巻頭言

持続可能は人間社会の難問

月尾嘉男（東京大学名誉教授）

1942年名古屋市生まれ。1965年東京大学工学部卒業。名古屋大学工学部教授、東京大学工学部教授、東京大学大学院新領域創成科学研究科教授などを経て、東京大学名誉教授、工学博士。2002-03年には総務省で総務審議官（国際担当）を務める。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーやクロスカントリースキーをしながら知床半島など各地で私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域振興に取り組んでいる。著書に『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球の暮らし方』（遊行社）、『転換日本 —— 地域創成の展望』（東京大学出版会）、『清々しき人々』（遊行社）ほか多数。

TSUKIO Yoshio

密閉された部屋の空気が悪化してきた場合、2種の解決方法が存在する。第一は部屋を外部に開放して新鮮な空気を導入すること、第二は内部に存在する悪化の原因を除去することである。

これまで人間社会は地球という外部に開放することで問題を解決してきたが、残念ながら地球も有限な環境であり、廃棄プラスチックは海洋に氾濫し、放出されたエネルギーは大気温度を上昇させはじめている。

第二の方法を採用すべきであるが、除去すべき悪化の最大の原因は人間の欲望である。この欲望を満足させるため便利なプラスチック製品は急増し、酷暑のなかで冷房を中止することもできない。

しかし、聖人でもない一般の人間にとって欲望を抑制することは困難である。そこで生物環境を参考にしようという発想が登場した。バイオミミクリー、生物を模倣するという学問である。

人間が欲望を拡大しはじめた発端は農業の発明であるが、そこからわずか1万年で破綻しはじめた。しかし生物は哺乳動物からでも億年単位で持続可能な環境を維持してきた。これを学習しようというわけである。

その原理は動物の排出する炭酸ガスを資源として植物が動物の必要とする酸素を生成し、植物の枝葉を食料とする動物の糞尿を植物が栄養にするというように完全に循環している構造である。

残念ながら人間社会は内部で循環できず、外部に大量の廃棄物質を放出して成立している。一例として、人間社会が放出する炭酸ガスの1割は森林が、3割は海洋が処理しているが、6割は処理されないままである。

そこで廃棄物質を循環させる活動が出現してきた。日本では食用可能であるが廃棄される食品ロスが年間640万トンになる。そこでフードバンクに寄付して必要とする人々に配分する仕組が登場している。

情報技術を駆使すると高度な循環も可能になる。日本の家庭に退蔵されている品物は37兆円になるという推計がある。フリマアプリで循環させれば休眠資産を有効利用でき廃棄が減少する。

新聞を電子新聞に転換すれば数％のエネルギーで情報を伝達でき、テレビジョン会議も出張の移動の数％で目的を達成できる。情報技術は生物世界には存在しない循環社会を実現できる人間特有の手段である。

ところが情報技術は広告を筆頭に欲望を拡張する性質があるという厄介な難問がある。旧約聖書の楽園追放の説話が象徴するように、古来、神話や伝承は情報を獲得することが不幸の原因であると警告してきた。

実際、幸福国家ブータンは前世紀末にテレビジョン放送とインターネットを解放した結果、欲望に目覚めた国民が首都に殺到し、かつての幸福社会は消滅しつつある。持続可能とは、かくも困難な課題である。

「持続可能性」と「こころ」の接点

広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）
HIROI Yoshinori

本号の特集テーマは「こころと持続可能性」である。

このうち「持続可能性 sustainability」については、それは現在ではほとんど“言い古された”といってよいほど、一般に広く使われる言葉になっている。ただし、この「持続可能性」という言葉が近年のような文脈で語られるようになったのは、ある意味で比較的最近のことであり、それは大きくは地球環境問題の浮上という状況と密接に結びついていた。

すなわち、持続可能性あるいは「持続可能な発展 sustainable development」という概念が明示的な形で提起されたのは、国連の「環境と開発に関する世界委員会」が1987年に発表した報告書「われら共通の未来 Our Common Future」── 委員長を務めたノルウェーの女性首相ブルントラントの名をとってブルントラント委員会報告と呼ばれる ── においてだった。そしてそこでは、「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような発展」が「持続可能な発展」とされたのである。

このように持続可能性の概念は、「環境や資源の有限性」ということと、世代間の公平性あるいは世代間継承性という視点を重要な要素として含意するもので、さしあたっては、経済や社会システムのありように関するコンセプトと言える。**けれども、それは決して経済社会の制度や“外面”のみに関わるのではなく、実は人間の「こころ」のあり方と深く関わっているのではないか。**あるいは、「持続可能な社会」というものを構想し実現しようとした場合、それは「こころ」についての探究や洞察を不可分のものとして伴うのではないか。こうした関心が、本号の「こころと持続可能性」というテーマの基本的な背景となっている。

人間と社会をめぐる構造 ── 個人・コミュニティ・自然

このようなテーマを考える1つの手がかりとして、**図**をご覧いただきたい。これは人間と社会をめぐる構造を理解するための枠組みで、「個人－共同体（コミュニティ）－自然」という3層構造において人間をとらえたものである。

ある意味でもっとも“表層”にあるのが一番上（A）の「個人」であり、これは特に近代社会において大きく展開していったもので、個人が自由な経済活動を行う場として「市場経済」が並行して生成していった。しかし個人という存在は最初から独立して存在するものではなく、その土台には「共同体」あるいは「コミュニティ」という層が存在している（図のB）。さらに、コミュニティというものは“真空”の中にあるのではなく、そのベースには「自然」が存在しており、これは「環境」と言い換えることもできる（図のC）。

こうした「個人－共同体－自然」あるいは「市場経済－コミュニティ－環境」という3層のピラミッドにおいて、先ほども示唆したように、一番上層にある「個人／市場経済」の層が飛躍的に拡大し、土台にある「自然／環境」や「共同体／コミュニティ」の次元からいわば大きく“離陸”あるいは“乖離”していったのが、近代という時代（あるいは資本主義と呼ばれるシステム）だったととらえることができるだろう。

そして、そのようにして市場経済の領域が“限りない拡大・成長”を追求していくことの半面あるいは帰結として、Bのコミュニティとの関係では共同体の解体や格差の拡大が進行し、Cの自然との関係において生じたのがさまざまな環境問題だったと言える。

「時間」との関わり

さて、以上の構造は、実は「時間」というテーマと深く関係しており、それが「持続可能性」という話題とつながってくる。

すなわち、**図**のピラミッドの一番上層にある「市場経済」においては、“短期”の時間軸や行動が重要であり、要は“スピード”が勝負の世界である。それはたとえば、1秒間にインターネット上で数千回もの金融取引が行われる株式市場といったことに象徴的に示されている。

一方、こうした市場経済に対して、その土台にある「コミュニティ」の次元においては、時間はもっと“ゆっくりと流れる”。また、そこでは親から子、孫といった世代間の継承性ということが本質的な意味をもっていて、市場経済に比べ時間軸が“長期”に及ぶ。さらに、ピラミッドのもっとも土台をなす「自然」においては、時間は一層ゆっくりと流れ、かつ「超長期」にわたるものになる。

このように考えていくと、「持続可能性」とは、経済社会システムの観点では、短期的な利潤の極大化のみを追求するような、**図**における「市場

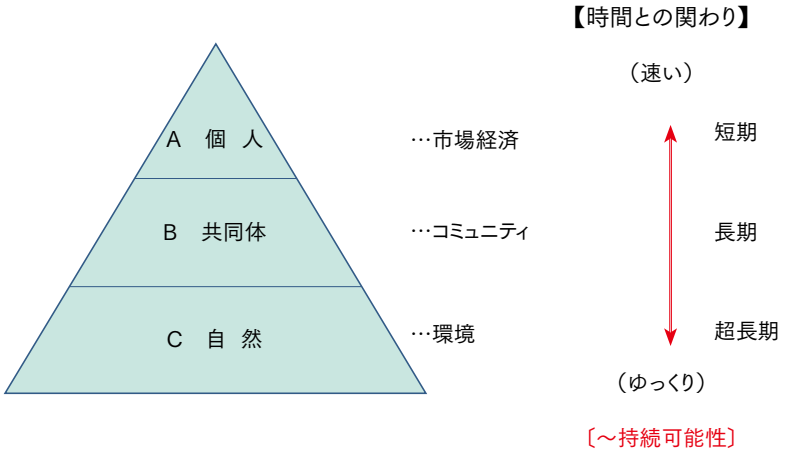


図　人間と社会をめぐる構造

経済」に何らかの意味でブレーキをかけ、それをその根底にある「コミュニティ」や「自然」へとつなぎ、あるいはそれらと調和させていくことを意味するだろう。同時にそれは、人間の「こころ」にそくして見れば、それを個人の内部に閉塞させず、コミュニティや自然との通路を回復していくことを意味し、「時間」との関連で言えば、現代人が失いがちな“ゆっくりと流れる時間の層”とのつながりを回復していくことであるのではないか（本特集に掲載されている浅野房世氏や上原巌氏の論考はそうした点に関するものでもある）。こうした把握が、「持続可能性」をめぐる経済社会の次元と「こころ」との接点の1つになると思われる。

「持続可能性」の意味

そして、このように持続可能性というテーマを「こころ」との関係でとらえ直していくと、そこにさらに深い次元がひそんでいることに気づく。

すなわち、もしも「持続可能性」という概念が、単に“長い時間にわたって続くこと”を意味するとしたら、次のような事実はどう考えられるだろうか。たとえば、「地球環境の持続可能性」が重要だという点を認めたとしても、時間軸をもっと長くとって、数万年、数億年等々といった未来を考えた場合、現代の科学的知見によれば、実は地球そのものがやがては消失するという理解が一般的である（たとえば地球科学者の松井孝典は、太陽が徐々に明るくなっていき大気中の二酸化炭素が減少することの帰結として、今からおよそ5億年後に地球の生物圏は消滅し、20億年後に地球は現在の金星と同じような状態となり、やがて太陽が膨張し地球はそれに呑み込まれるとする〔『宇宙人としての生き方――アストロバイオロジーへの招待』岩波新書、2003年他〕）。宇宙についても、（さまざまな説が存在しているが）大きくは同様である。

では、地球や宇宙――ひいては人類――の存続がそのように有限なものなのだとすれば、「持続可能性」の価値とは何を意味するのだろうか。

本稿の中でこのテーマに関する十分な答えを示すことは到底できないが、1つ確かに言えることは、**「持続可能性」というコンセプトは、単に「時間の“量的”な長さ」を問題にしているのではなく、そこには（時間や生命に関する）“質的”な関心――あるいは「時間」の意味そのものへの問い――が含まれている**のではないか。それは先ほどの図における、「自然」の次元のさらに根底にある“時間を超えた次元”あるいは“有と無を超えた次元”に関わる問いや関心と言えるかもしれない。

死生観との関わり

この問いは、個人の生についてもあてはまる。近年、「現代版“不老不死”の夢」とも呼べるような議論がさまざまな文脈で浮上しており、それにはアメリカの未来学者カーツワイルのいわゆる「シンギュラリティ」論――最高度に発達した人工知能（AI）と改造された人間が結びつき、人間は“永遠の意識”を得るといった議論――なども含まれる。また、ベストセラーになったユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス――テクノロジーとサピエンスの未来』（柴田裕之訳、河出書房新社、2018年）が示すような、人間はテクノロジーによって「不死」を目指し、“神”になることが残された課題であるといった議論も同様の志向に立つものだ。

考えてみれば、以上のような方向は、「人間と自然」、「個人とコミュニティ」をそれぞれ切断した上で、“独立した個人としての人間が自然を完全にコントロールする”という、近代的な原理をその極限まで追求するという性格のものだろう。それは先ほどの図において、ピラミッドの先端にある「個人」が限りなく「コミュニティ」や「自然」から離陸していくというベクトルとそのまま重なっている。

私自身はむしろ、そうした方向とは逆に、個人の根底にあるコミュニティや自然、ひいてはその根源にある次元とのつながりを再発見することで、新たな死生観が開けると考えているが、いずれにしても「持続可能性」をめぐるテーマは、究極的にはこうした死生観に関する問いとも深くつながっていくだろう。

以上のように、「こころと持続可能性」という本号の話題は、現代社会と人間についての問いの核に位置するような深さと広がりをもっている。本特集がそうした探究の道標の1つとなることを願う次第である。

鎮守の森とSDGs――日本人と持続可能性

田中朋清石清水八幡宮権宮司インタビュー

インタビュアー　広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）

田中朋清（たなか・ともきよ）　1973年、京都府生まれ。同志社大学経済学部を卒業後、國學院大學神道学専攻科で神職階位・明階を取得。太宰府天満宮で神職としての基礎を学ぶ。石清水八幡宮権禰宜、同宮禰宜を経て、2013年に同宮権宮司に就任。2019年４月より京都造形芸術大学SDGs推進室長。京都大学こころの未来研究センター連携研究員、京都産業大学日本文化研究所客員研究員、世界連邦日本宗教委員会事務局長、神社本庁参与、一般財団法人石清水なつかしい未来創造事業団理事長、京都造形芸術大学客員教授と幅広い文化・社会活動に関わる。

国連のSDGsへの関わり

広井　2001年に国際連合の主導で「ミレニアム開発目標（MDGs：Millennium Development Goals）」が策定されました。次いで2015年に「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」が国連サミットで採択されました。これは2016年から2030年までの国際目標です。MDGsまでは開発や経済成長が中心だったのですが、SDGsは持続可能性を前面に出した点が画期的な意味を持っていると思います。

国連のSDGsと神社とはすぐにはイメージが結びつかないところがありますが、最初にSDGsと田中朋清権宮司との繋がりについてうかがわせてください。

田中　いま私は石清水八幡宮で権宮司という立場にあります。石清水八幡宮はいまから1,159年前に弘法大師空海の愛弟子の行教（ぎょうきょう）が創建しました。都の南西の裏鬼門に当たる場所を守護する国家の守護神として、九州の宇佐神宮から八幡様を勧請されたものです。

私のご先祖様の行教は真言宗のお坊さんだったのですが、世の中をうまくまとめるためには、その地域だけとか日本の国だけではなくて、世の中の人みんなが幸せであるようにと考え、神と仏と両方の力をいただこうということで、神仏習合の八幡様をお祀りされたのです。それでここも幕末維新まで石清水八幡宮寺と書く神仏習合の宮寺（みやでら）でした。田中の家はもともと筆頭の社僧でしたから、神仏分離から150年以上経ったいまでも、田中の家も石清水八幡宮も仏教と非常にかかわりが深いのです。

私の祖父の田中文清（ふみきよ）は比叡山延暦寺の葉上照澄（はがみしょうちょう）大阿闍梨と非常に近い関係にありました。祖父が葉上照澄さんと身延山の朝比奈宗源（あさひなそうげん）老師と共に、神仏を分け隔てなく、お互いありがたいと認め合った上で、世

界の平和を一緒に祈り合いましょうということで1967年に世界連邦日本宗教委員会を始めました。最初は宗教間対話が目的だったのかもしれませんが、長年続けているうちに、参画してきたお坊さん、神主さん、キリスト教の牧師さん、神父さん、新宗教の教師の先生方なども加わって、個人として共に祈りを捧げ続けることが重要だということが基調になってきたのです。

世界連邦日本宗教委員会の活動の中で特に顕著な活動といえば、ハワイのパールハーバー（真珠湾）における慰霊と平和の祈りの集いで、39年間続けています。最初、日本人の宗教者が10名ほどで、ハワイの真珠湾に行って慰霊をしたのです。当時、アメリカの人の中には、日本人がなんでこんなところに来て祈るんだということで、白い目で見られたり非難されたりもしましたが、それでも毎年続けているうちに、現地の方々の理解が少しずつ深まっていきました。現役の将校の方々、歴史家の方々、特にアリゾナ記念館の方々との交流がきっかけとなって、真珠湾攻撃を経験した軍人さんたちや遺族の方との交流も盛んになっていきました。そうやって、次第にアメリカ側が、日本人の宗教者がやっているこの活動に理解を示してくださるようになり、慰霊や平和のこころには国境がない、差別や偏見があってはいけないんだという風潮が高まっていきました。

約25年前から、アメリカ軍が毎年開催しているパールハーバーの式典に我々を正式に招待していただけることになりました。そこで平和のメッセージという形で、人間の相互敬愛と世界平和を共に祈ることの重要性を発信し、みんなで共有していただいております。

この活動がきっかけとなって、2016年12月27日に、バラク・オバマ前アメリカ合衆国大統領と安倍晋三総理大臣が、「和解と友情のステートメント」をパールハーバーで発信されることに繋がったのです。そして、その一番の立役者である世界連邦日本宗教委員会に話を聞きたいということで、去年の４月に東京で開かれた政府の外交調査会に呼ばれました。

広井　もともと田中権宮司が世界平和や国際的な活動にかかわってこられた中で、SDGsに関係する会議に呼ばれたのですね。

田中　そうなんです。東ティモールという国の独立を支援してこられた長谷川祐弘（すけひろ）元国連事務総長特別代表という国連職員がいらっしゃいます。この方が外交調査会のメインスピーカーでした。SDGsを達成するためには、持続可能な世界の平和を生み出す必要があります。しかし、SDGsにはまだそのための理念のようなものが足らない。今日はその理念として最もふさわしい事例を持っておられる団体の方に話をしていただきますということで、急遽（きゅうきょ）、私が紹介されたのです。

私が申し上げたのは、日本人がもともと持っている自然との共生、人との和、文化・宗教における寛容の精神、世の中は四季と同じように循環しながら続いていくという概念をSDGsの中に組み込んでいく必要があるのではないかということです。そのような文化を持っている日本がリーダーシップを取ってSDGsをアップグレードすればよいだろうと考えておりました。

そういう意味からも、平和の構築を究極的な目標とした考え方が大切で、その基盤となるのは「和の概念」です。人と人がお互いを愛し合い尊敬し合う、そこが一番重要なところではないか。世界連邦日本宗教委員会を支えてきた理念は、まさしくそこにあったという話をさせていただきました。すると、「すごくいい話でした。来月の月末、ニューヨークに飛ぶ時間はありますか」と大鷹正人国連担当大使からいきなり言われたのです。５月に国連本部でSDGsの本部推進会議があるので、パールハーバーの事例を紹介し、日本の立場として、特に文化的な柱である和の概念といった価値観の重要性について発信をしてきてほしいと。

SDGs自体は常任理事国も含めて全国連加盟国193カ国が批准をしておりますが、SDGsの実践に目を向けると、実際は各国、各機関任せになっていて、結局達成できなかったとしても、だれも責任を取らないような形になっています。しかし、国連総会で採択されたSDGsのアジェンダの前文に、「これを達成することなくして、世界人類はもはや持続可能ではない」「地球上のだれ１人として取り残さない」と明確に書かれていることから考えても、SDGsという取り組みを真剣にやらなければならない。私は本部推進会議に出席して、SDGsは目標はたくさん設定されているけれども、全体を一貫する理念がないのではないか。その理念として日本の価値観を使っていただければ、SDGsは達成できるかもしれない。実際にそれを実施するためには、国連に任せるのではなく、産・官・学・民・文化・宗教・芸術といった地球上の全アクターを入れて、すべての人々が協調してSDGs達成に動いていかないといけないのではないか。そのための組織づくりを国連がするべきだという提言をさせていただきました。すると、前国連大使協会会長で元国連事務次長のアンワルル・K・チャウドリー国連永久大使をはじめ参加したみなさんが、「素晴らしい考え方ですね。ぜひ日本から会議体を立ち上げてください。そして、あなたが委員長としてそれをまとめてください」と依頼されたのです。

広井　いま非常に重要な点をいくつもお話しいただきました。１つは、SDGsは環境に関すること、貧困削減、だれ１人取り残さない、そういう具体的な17の目標を掲げていますが、そもそもなぜ持続可能性が大事

なのかとか、なぜ環境を守らなければいけないのかといった土台になる理念、拠り所になる思想がいまひとつ欠落している。そこで、まさに田中権宮司が言われたように、「和」という理念がSDGsに密接に結びつくのではないかという可能性ですね。

田中　そうですね。それで今年6月6日に国連本部で会議が行われて、産・官・学・民・文化・宗教・芸術を入れた中で、大学をヘッドクォーターとしたSDGs文化推進委員会を立ち上げました。学術、教育を芯に据えた委員会にしたことで、企業も文化も芸術も学術も、みんな集まれるような環境ができました。

広井　田中権宮司はいま京都造形芸術大学でSDGs推進室の室長をされているんですね。

田中　はい。そこをSDGsの事務局としています。これは京都造形芸術大学の学長で元京都大学総長の尾池和夫先生のご理解の上にできました。京都造形芸大内に京都大学との共同研究所として文明哲学研究所があります。それと、京都造形芸大がもともとも芸術立国ということを掲げていたので、産・学・公連携室として、この3つが連携してSDGsを進めていく体制ができました。京都大学に、研究ライトユニットがこの6月に立ち上がりまして、地球環境学堂の浅利美鈴先生と一緒に進めています。SDGs推進室自体も、京都大学と積極的にコラボレーションできないかということで、吉川左紀子先生と相談しているところです。

鎮守の森と死生観

広井　鎮守の森のことをおうかがいします。いま日本には神社・お寺がそれぞれ約8万ずつあって、コンビニが6万弱ですからコンビニより多いですし、神社は明治の初めには20万ぐらいあったそうです。つまり、地域コミュニティの原型が20万あったということになります。自然信仰とコミュニティが結びついたものとして鎮守の森があった。そして、鎮守の森に象徴される自然の中に、生と死、有と無を超えた何かを見いだすような日本の伝統的な自然観や世界観、死生観がある。それはいまの日本にとって非常に重要な意味を持つのではないかと思います。

田中　現代人のこころの中から死生観が見えなくなってしまいました。広井先生は「死生観の空洞化」という言葉を使っていらっしゃいますが、私もまさにそれを感じています。その原因として、鎮守の森が失われていった明治時代が1つの大きな転換点になったと思うのです。鎮守の森は町・村の中心とか、ちょっとした外れなど、暮らしに非常に近いところに必ず1つはあるものでした。鎮守の森は神様を祀っている、ご先祖さんもそこにいるし、先祖代々ずっとそこを信仰してきたというだけではなく、自分たちの魂の故郷（ふるさと）でもあり、自分たちもそこからやって来て、いずれまたそこに帰っていくところです。「八百万（やおよろず）」と言いますが、鎮守の森はいろいろな目に見えない存在を包括してきた場所だと思うのです。それを守り継いできたという感覚が日本人にはあるのではないでしょうか。

コミュニティも、町や村の人々や家族も、ご縁によって繋がっている。その縁を繋いできたのは、取りも直さず鎮守の森にいる神様であったりご先祖様たちという祖霊なんですね。日本人にとっては、ご先祖様の究極の姿は、自然や宇宙に繋がっていたのだろうと思います。自然から恵みをいただくと同時に、時には自然災害でひどい目に遭ったりもする。でも、それを「自分たちが何か悪いことをした祟りじゃないか」というふうに捉えてきたからこそ、そうならないように感謝を捧げたり、みんなが幸せであるように祈りを捧げる。鎮守の森は共同の祈りを捧げるための場所でもありました。だから、日本人にとっての社会はまさしく「社会」であって鎮守の森の「社（やしろ）」で「会」うと書きます。

広井　なるほど。

田中　神社はいまは宗教法人になりましたが、もともとはコミュニティの全体、あるいは日本全体、世界全体の平和や幸せを祈るための場所でした。もともと日本人は、自然からの恵みをいただかなければやっていけなかったがゆえに、自然に対する畏敬の念、感謝、それと死生観が一体のものだったのではないかと思います。日本の神社でお祀りされている神様は、一番原始的な姿だと大神（おおみわ）神社さんのように、山や岩、木、川、海であったりするわけです。もう少し新しいタイプになると、亡くなった偉人を神様としてお祀りする。ところが、明治39年（1906）から始まった神社合祀という国家の施策によって鎮守の森がどんどん合祀されていき、非常に数を減らしました。

広井　南方熊楠が神社合祀反対運動を展開しました。

田中　熊楠さんが神社合祀施策に関する意見書で、「これから日本は大変な状態になる」と書いていますが、残念ながらそれが当たっています。鎮守の森を失ったがゆえに、たぶん構造的には縄文時代以降あまり変わらなかった日本人の価値観が、どんどん失われていったのだろうと思います。

広井　現代の日本はいろいろな問題を抱えていますが、一番根っこにあるのは、そういう土台にある思想、こころの拠り所が見えなくなっていることだと思います。江戸時代までは、神道・仏教・儒教が土台にあった。それが年中行事などとも結びついて、日本人の生活に根差した形で精神的なバックボーンになっていたと思うのです。けれども、黒船ショックがあって、欧米の

圧倒的な軍事力とその背後にある科学技術力に度肝を抜かれて、富国強兵に向かう。そのとき、キリスト教を取り入れると向こうの土俵に乗ってしまうことになりますから、突貫工事のように国家神道という形をつくり上げていったわけです。

神仏分離が転換点

広井　それは神仏習合も壊してしまいましたし、本来、神社はそれぞれの地域に根差したものだったのを、国家として合祀する形で統合し過ぎた。それで突き進んでいって、戦争に負けると、戦後はもうそういうのは駄目だということで、ひたすら経済成長に邁進した。それがいま経済もままならなくなって、何を目標や拠り所にしたらいいのかが非常に見えなくなっています。そういう意味で、鎮守の森的なものを現代的な課題に結びつけて考えていくことが大事だと思います。

田中　自然との共生という価値観、循環の概念、死生観、そういうものの豊かさが最近はすごく求められるようになってきました。本来、神道は宗教というより物の考え方の基本みたいなものであって、そこに仏教という宗教が乗っかり、儒教も価値観として乗っかってきた。それでうまく融合していた。この石清水八幡宮は完全に神仏習合なんです。たとえば、この仏さんは八幡様の本地仏の阿弥陀如来です。ご本殿の中にずっといらっしゃったのを、明治維新のときの神仏分離で外に出された。仏教に関係するものの大部分は棄却されたのです。田中の家は僧侶でしたから、神仏分離で一夜にして追放され、代わりに国家公務員の神職が来ました。派遣された神職が伊勢神宮形式の祭りごとに全部入れ替えて、それまであった仏教を含む一切合財の伝統的な行事を棄却してしまったため、みんなでこの仏さんや大切な資料などを持って走って逃げたのだそうです。

広井　そうなんですか。よく残りましたね。こちらは一般的にも「石清水八幡宮」というより「八幡大菩薩さん」と呼ばれていたのですね。

田中　はい。八幡大菩薩ですから神仏習合の総本山的な様相があります。いま全国に約8万の神社がありますが、そのうち神仏習合だった社が7割ぐらい。八幡さん、天神さん、日吉さん、祇園さんなども神仏習合でした。だから、神社でありながらお寺でもあったし、お坊さんも神主さんも両方が奉仕していました。神仏習合は千年以上保たれてきたのですけれども、近代国家を建設するために犠牲にせざるを得なかったのかもしれません。

さらに戦後は、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）から戦前の国家神道的なものを排除するいわゆる神道指令が出されましたので、国家と神道のかかわりは一切なくなる。それと同時に、神道について、平和な考え方というより少し狂信的な、危険な神国思想が根底にあるという考え方が、日本の社会に入り込んでいきました。それに、戦後は特に高度経済成長のころから、人々が田舎から大都市圏に出てきてそこで働くことが普通になり、農業や漁業、林業からどんどん若い人が離れていく中で、神社離れが進んでいきました。

神仏分離になるまで石清水八幡宮の本殿に安置されていた阿弥陀如来像

明治から昭和、第2次世界大戦前から大戦後と西洋文明がどんどん入ってくる一方、戦後は核家族化が進み、伝統的な知恵や思想、価値観がさらに失われていったのだろうと思います。

広井　そのあたりが非常に重要なところですね。いま時代の転換点で、人口減少社会になり、田中権宮司が言われたように、戦後、空間的な人の移動という点でも意識の上でも、鎮守の森的なものがどんどん失われるような時代が続きましたが、それが大きく変わろうとしています。鎮守の森のプロジェクトで全国の神社を訪れると、意外に若い人がたくさん来ています。

田中　そうですね。うちでも若い人がすごく多いです。

広井　パワースポット・ブームといわれる世相もあって、多少流行的な部分もあるかもしれませんけれども、もうちょっと深い背景があるだろうと思います。やはりいまの若い世代は、こころの土台、拠り所になるようなものを求めていたり、伝統的なものに関心を向け

石清水八幡宮の社殿の前で語り合う広井良典教授と田中朋清権宮司

たりしているようです。祭りが盛んな地域は、若者のUターンやIターンが多いという指摘もあります。いま日本で課題になっている地方創生や地域再生も、鎮守の森とかお祭り、神社と繋がってきます。そんなふうに、鎮守の森を再評価、再発見する流れがいろいろな形で出てきているように思います。

田中権宮司も「石清水なつかしい未来創造事業団」をつくられて、鎮守の森を拠点にした地域活性化の活動もしておられますね。

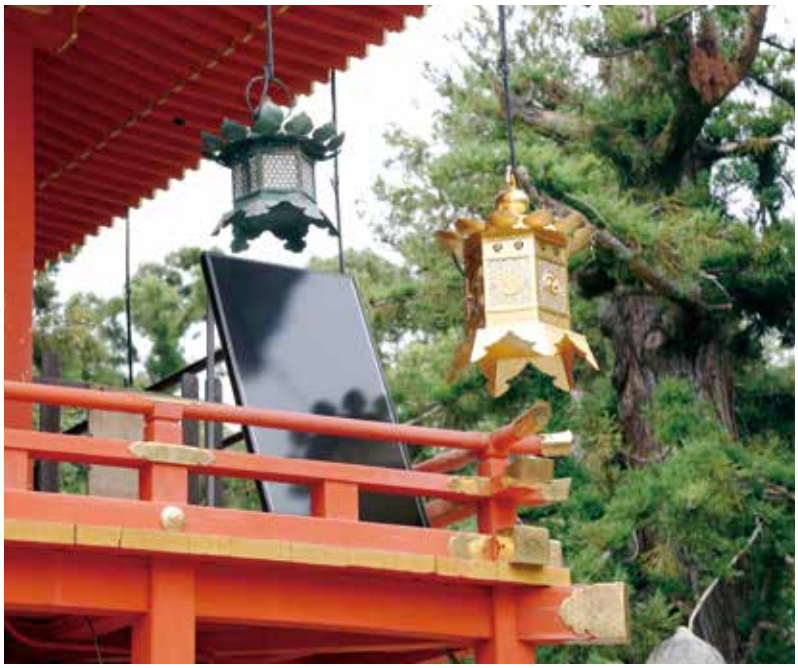
田中　鎮守の森は、「場の記憶」とでも言いましょうか、ご先祖さんたちが各地域で紡いできた知恵を伝承するための場所として存在してきたからこそ千年を超えて残ってきたのでしょう。しかし、日本人としての価値観を本当に忘れてしまったとき、鎮守の森はただの森になってしまって、中に入っている価値観を取り出す者がいなくなってしまうのではないかという危機感が、全国の神社にありました。そこで、なぜ先人が鎮守の森を受け継ぎ守り続けてきたのか、宗教を超えて、産・官・学・民・文化という諸アクターでその価値を共有しなければいけません。そういう意味では、南方熊楠の警鐘をもう一度いまの世の中で検証していく必要があります。そしてその対策をすぐに実施していかないと、価値観の空洞化がもたらす不幸は尋常ではないと思います。

たとえば、死生観がないと、いかに生きるか、生きる喜びとか、あるいは世の中みんなを幸せしたいというような素晴らしい価値観は、なかなか生まれてこないのではないか。すると、自分の命だけではなくて、人の命とか、この世の中に対する愛情を持てなくなると思うのです。神社やお寺にお参りしても、お願いごとだけして、神さんや仏さん、ご先祖さんへの感謝とか、目に見えない力のおかげで生かされているという感覚がなくなってしまっている。人や、自然や、さまざまな存在と繋がっているという感覚、その関連性の中に自分があるという感覚がないと、本当の幸せを感じることはできないと思います。

鎮守の森の知恵は、地域において人々が幸せに暮らしていくために必要なものだったので、それぞれの多様性も踏まえながら、もう一度鎮守の森的な価値観を取り出すことができればいい。実はそういう役割を果たしてきた場は世界中にあると思いますので、ユニバーサルに使える考え方ではないかと思います。

広井　いま、一番核心についてお話しいただいたと思います。人間が生きていく上で根源にあるものから、現代人が遠ざかってしまっているところがある。その根源にあるものと鎮守の森的な自然観、世界観との繋がりは非常に現代的な意味を持っている。

田中　そうですね。キリスト教が信仰されてきたところでも、信徒が非常に減ってきたのと同時に、価値観が空洞化し、悩む若者が増えてきているという話がUNESCOの役員さんから出ました。ですから、これは日本だけではなくて、世界に共通する課題を解決する



本殿の灯籠の脇に設置された太陽光パネル

エジソン記念の電球

知恵が内包されているのではないかと思います。

広井　確かにそうですね。ちょっと大きな話になりますが、私は人類の歴史には3段階あったと思っています。ホモサピエンスが20万年前にアフリカで生まれて、その後半期、いまから5万年ぐらい前に「こころのビックバン」と呼ばれる現象がありました。このとき、人間のこころみたいなもの、鎮守の森に通じるような自然信仰がかなり普遍的に生まれたと思います。

その後、今度は1万年前に、農耕がメソポタミアあたりで始まって、人口が急増して、それがまた限界に達した2,500年ぐらい前の紀元前5世紀ぐらいに、キリスト教の原型となるユダヤ教や仏教、ギリシャ哲学、儒教や老荘思想といった普遍的な思想が生まれた。これが第2段階です。

そして、300〜400年前が近代の工業化の時代で、人口も経済も一気に増えましたが、それがいま地球の限界にぶつかって次の転機を迎えている。それで、私は「地球倫理」という言い方をしますが、もう一度新しい価値、土台になる思想が求められていると思うのです。そこで、日本人の根底にある自然信仰、鎮守の森的なものと、もともと神仏習合的だったので普遍宗教みたいなものと、さらにSDGsとも繋がる地球という意識が加わります。地球倫理はまだ抽象的なものですが、その土台にあるのは鎮守の森的な自然信仰だと思います。地球のいろいろな風土の多様性を俯瞰しながら、鎮守の森を再発見していくことが大切でしょう。

それを現代的な課題と結びつけるために、私自身は鎮守の森コミュニティ研究所という活動をやっていて、大きな課題を3つ挙げています。1つはエネルギーの問題で、「鎮守の森・自然エネルギーコミュニティ構想」といいます。2番目が心身の癒しにとって自然との繋がりが大事だということで「鎮守の森セラピー」、3番目が「鎮守の森ホスピス」です。

特に3.11（東日本大震災）以降、自然エネルギー、再生可能エネルギーが重要になっている中で、私はこれらのエネルギーと鎮守の森の自然観はとても親和性があると思っています。田中権宮司のご理解をいただいて、今年の3月に、こちらの本殿の灯籠の脇に太陽光パネルを設置させていただきました。自動的に太陽光モービルで灯籠が灯るようにしました。

田中　いま使わせていただいております。

広井　これを展望台の「たけくらぶ」に広げていけないかなと勝手ながら思っています。

田中　それはありがとうございます。ちなみに、これはエジソン記念の電球です。

広井　石清水八幡宮は、エジソンがこちらの竹でフィラメントを作ったということで、エネルギーとも繋がりがありますね。また、なつかしい未来創造事業団にはエネルギーの地産地消という考え方があります。

田中　そうなんです。なつかしい未来創造事業団も、だいぶ活動が盛んになってきました。来月は七夕の行事をやることになっています。

鎮守の森ホスピス

広井　「鎮守の森ホスピス」は死生観にかかわる問題です。私も学生と話すと、死生観を学校で学ぶ機会もなかったし、非常に空洞化している。公の教育の中では「死」はいまだにタブー視される傾向にあり、手塚治虫の『火の鳥』のような漫画やアニメが多少死生観を

代替しています。若い世代にはそういうことへの飢餓感のようなものがありますが、他方で、いまは高齢化社会で、亡くなる方が年間100万人を超えていて、2040年頃には170万人近くまで急増する。そんなふうに、死生観への関心が高まる中で、ホスピスが1980年代ぐらいから注目されるようになりました。日本では最初、キリスト教系のホスピスがいくつかできました。それから、「ビハーラ」と呼ばれる仏教ホスピスもできました。いまは宗教とは関係のないホスピスが数百できていますけれど、素朴に考えれば、日本人にとって鎮守の森的な、自然に還る、魂がそこに還るというような死生観や自然観がもともと根っこにあったと思います。そこで、鎮守の森と、看取りや死生観を結びつけて、それを「鎮守の森ホスピス」という形で実現すれば、ニーズも大きいのではないかと思っています。田中権宮司も前からそういったことを考えておられましたね。

田中　そうですね。これは早く実現しないといけないと思っています。明治時代以降、神社は死を穢れとし、神社ではお葬式も含めて人の死には触れられませんということになりました。それも神仏分離の結果で、お葬式は仏教のほうでするという、本来とは違う形になってしまったのです。明治時代以降、神主の多くは国家や地方の公務員になったので、24時間365日対応しなければいけない人の死に対して距離を置かざるを得なかったのでしょう。一方、仏教者は生活していくためにお葬式をしなければいけないという状況もあったようです。そこが大きな転換点だったと思います。

いま多くの人たちが死から距離を置き、死が遠いものになってしまっている。実際、病院で亡くなる方が統計上は89％以上となり、家で家族に見守られながら亡くなる方はほんの数％しかいらっしゃらない。そのため、自分自身、あるいは自分の家族や愛する人たちが死と向き合わなければならなくなったとき、悩みや苦しみが非常に大きいわけです。本来、死はそんなに恐怖すべきものでもなかったのではないでしょうか。おそらく昔の人は自分のお祖父さんやお祖母さんも含めて、人の命がなくなる瞬間をもっと身近で見てきたでしょう。かつては自然にやって来る「生」と同じ存在として「死」を受け入れるという考え方があった。このままだと、死を否定し過ぎるがゆえに、死に対する恐れや悩みが勝ってしまって、それを恐れながら生きるということになるだろうと思います。

鎮守の森からやって来て、鎮守の森へ還っていく。そのとき、神さんや仏さん、あるいは万物が守ってくれる。また、いつか生まれ変わってくるために毎日魂を磨かなあかんとか、お天道さんが見てはるとか、食事のときに「いただきます」「ごちそうさま」と言うことも含めて、鎮守の森と繋がる死生観を含めた価値観が日本の文化の土台になっていたと思います。そういうものを取り戻していくと同時に、その価値観を学んでいただく施設の１つとして、鎮守の森ホスピスが大切だと考えております。

そして、いずれは倫理とか価値観の教育を行えるような寺子屋的なものもできればなと考えております。もちろん、いろいろな宗教や考え方がありますので、多様性を尊重しながらですが。

広井　人間は概して共同体とか集団ができると、その中で固まってしまって排他的になる傾向があります。そうではなくて、一番根っこの共通しているところを大切にするということですね。

田中　そうですね。「もったいない」「おかげさまで」といった考え方は日本だけではなく、世界中の人が共感できます。人類が普遍的に、「これは大事だ」と思えるようなことはあると思うのです。

キリスト教と仏教とイスラム教とユダヤ教で「平和」という概念を共有するのはなかなか難しい。でも、具体的な平和というのは、まずは戦争がない状態を第一義として、次に生きとし生けるものみんなが笑顔で、豊かで、幸せである、それが持続可能であるという状態ですよね。価値観は多様であっていい。宗教も、さまざまな風土のもとで連綿とグレード・アップを重ねて培われてきた、その地域の人たちが幸せであるための知恵だと思うのです。その知恵の部分をお互いに尊重しながら、その中心にあるのは、具体的な結果としての平和を伴う、それを生み出すための価値観を共有していきましょうということだと思うのです。それは宗教だけでなく、学術、実学、科学、すべてにおいてOKとされる考え方でなければいけない。そういう意味では、SDGsも、産・官・学・民・文化・宗教・芸術、さまざまなアクターによって語り合っていかなければいけないと思います。

その中で、私が理念として最も重要だと考えているのが、鎮守の森の価値観です。人類において普遍的な価値になるものは何なのかを話し合いの中で見出し、諸アクターで共有していく。それをまた教育や社会に還元していき、SDGsに生かしていく。さらに、企業活動や１人１人の生活の中に生かしていく。そういう考え方があれば、SDGsは達成できるのではないかと思います。

広井　今日はとても充実したお話をありがとうございました。

田中　こちらこそ、ありがとうございました。

（2019年6月18日、石清水八幡宮にて。撮影：坂井保夫）

◎ 特集・こころと持続可能性

持続可能性とローカル・コミュニティ

平野彰秀NPO法人地域再生機構副理事長インタビュー

インタビュアー　広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）

平野彰秀（ひらの・あきひで）　1975年岐阜市生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業、同大学院環境学修士。商業施設のプロデュースに携わった後、ブーズ・アレン・ハミルトン（現PwCコンサルティング）で大企業の経営戦略コンサルティングに従事。2008年、同社を退職し岐阜にUターン。2009年、NPO法人地域再生機構理事就任。2011年、岐阜県郡上市白鳥町石徹白に移住。2014年、石徹白農業用水農業協同組合を設立し小水力発電所建設に携わる。現在、NPO法人地域再生機構副理事長、石徹白農業用水農業協同組合参事、石徹白地区地域づくり協議会事務局、NPO法人HUB GUJO理事、郡上カンパニーディレクターほか。

人が働きかけることで未来は変わる

広井　平野彰秀さんは、岐阜県郡上（ぐじょう）市の石徹白（いとしろ）という集落で、小水力発電を中心とした地域活性化、地域再生に取り組んでこられました。それが大きな成功を収められ、全国的にも注目されています。最近では、『おだやかな革命』（渡辺智史監督）というドキュメンタリー映画にもなりました。

もともと平野さんは、大学を出て、東京の外資系コンサルティング会社で働いて、ある意味ではグローバル経済的な仕事をされていました。そのことと、岐阜県の1つの地域で地域再生活動をすることとは、ある意味では対極にあるように見えます。その間の経緯などをまずうかがわせてください。

平野　私は子どものころに育ったのが岐阜市の郊外で、当時は田んぼばかりでしたが、だんだんロードサイド・ショップや駐車場になっていきました。長良川河口堰ができて川の環境が変わったということもありました。そんな中で、環境と人が共生できるような形はないだろうかと思ったのが原体験です。大学時代には都市計画を専攻しましたが、環境と人はどういうふうに共存できるかということを追究したいと思っていました。

東京に出て都市計画を学ぶ中で、自然発生的にできたような町であっても、そこには意図的に「このようにしよう」と町の未来像を描いて実現していく人がいたということを知りました。『都市ヨコハマをつくる――実践的まちづくり手法』（中公新書、1983年）という本があるんですが、田村明さんという方が横浜市の六大プロジェクトをやって、関内の日本大通に計画されていた高架の高速道路を地下化したり、「みなとみらい」をつくって横浜駅周辺と山下公園をつないだりという計画をされた。大学の恩師の西村幸夫

先生からは、全国各地で開発が進んでいく中で、町並みを守ろうとする地域の人たちの動きがあり、それを都市計画や文化財の専門家が法制度を整えて支援をしてきたという話を教えていただきました。

そんなことを学んで、いろいろな人が働きかけることによって未来が変わるということを知りました。そういった意味では、町においても、自分の暮らす地域においても、環境は所与のものと捉えるより、そこに働きかけることによって変わっていくということに関心を持ったのです。

広井　もともと石徹白の活動につながるようなことに関心を持っておられたわけですね。

平野　そうですね。田園風景の中で育ち、長良川を見て育ったという原体験と、大学のときに学んだ、町の未来は変えられるということが重なったという感じです。それで、そういった日本の田園風景を残していきたいとか、環境と人が共生できるような地域をつくれないかということがあり、それに、自分自身がどこかの地域にかかわることで、その地域がよくなっていくことをやりたいというのが根底にありました。

広井　日本人は町並みとか環境について、自分でつくっていくとか、よくしていくという発想を持ちにくい面もあるかもしれません。でも、人のあり方によって、町のあり方や環境のあり方も変わってくる。

平野　そうですね。私の場合、大学に入って大人になってくるに従って、町はどういうふうにできていくかとか、1つの食べ物でも、それはどこでできて、どういう人が介在してやって来るのかとかがわかってきた。要は、物を受け取る側ではなくて、その背景に何があるのかということを意識したことが大きかったのかなと思います。

広井　そこは重要なところですね。日本人は「世の中はどうにも変わらない」みたいな意識の人がわりと多い。そのへんは教育によって変わっていく余地があると思われますか。

平野　あると思います。私は大学で建築や都市計画を学んだのですが、その教育は、ある意味、そういった背景を考えさせることであったかもしれません。あとは大学のころベンチャー企業をやろうという学生たちの集まりにいたので、その影響もあります。

広井　それは1990年代ぐらいですか。

平野　1990年代後半ですね。ネット・ベンチャーが出始めたころです。そういう人たちは、自分で仕組みをつくっていこうと働きかける人たちだったので、その経験はかなり大きかったと思います。物事の成り立ちとか背景とか、そこにかかわって何かが変えられるみたいなことって、持続可能な社会をつくっていく上ですごく大事だと思います。

広井　卒業してからは？

平野　最初、商業施設のプロデュースをする会社に入ってそこで4年働き、それから外資系の経営コンサルティング会社で3年働きました。

大学院のとき、コンパクトシティについて研究をしたのですが、外資コンサルの先輩とお話ししていたときに、「コンパクトシティってどうして必要なのですか」と聞かれて、「遠くに離れているより近くで集まって暮らすほうが環境負荷が低いからです」というような話をしたんですが、「何かほかに方法があるのではないか」みたいなことを言われました。

結局、建築とか都市計画の発想でいくと、物としてどうするかということになるわけです。でも、もしかしたら、自動車がもっと省エネになることかもしれないし、動かなくても働けるということかもしれない。ある1つの課題に対する解決策は、いろいろ選択肢があるわけです。そのやり取りを通じて、そういうことを痛切に感じました。1つの専門分野を深めていくのは大事なことですが、専門分野に囚われ過ぎると解決策に近づかないということはある。そこで、いったん専門分野を外して、この課題を解決するために何をすべきかということを広く考える。コンサルティングの業界だと「ゼロ・ベースで」と言いますけれども、そういったことは必要だと思いました。さらに言うと、問題の設定の仕方もすごく重要です。

広井　それをきちんとやらないと、ボタンのかけ違いみたいになりますね。

平野　そうなんです。そこを身につけておきたいということもあって、コンサルティング会社に転職をしました。ですから、転職のときも、ずっとこの仕事をするということではなくて、「将来、町づくりをやろうと思っています」と言って入れていただきました。

コンサルティング会社も、いろいろなタイプの人が働いていますが、基本的には難しい課題をどのように解いて解決策を出すかにやりがいを感じる人たちです。企業の経営幹部になっていく人もいれば、社会的な課題を解決しようという方向にいく人もいます。私の場合、もともと環境、持続可能性、地域のことに対する関心があって、一時的にそういった仕事をしていたという感じですね。

石徹白と出会う

広井　石徹白は、どういう形で出会われたのですか。

平野　大学院を卒業した後、最初の会社に勤めながら、岐阜市でまちづくりの団体を友人が始めるということで、土日とか夏休みの長期休暇などに帰って、立ち上げを手伝っていました。岐阜のまちづくりの仲間に、

郡上出身の友人がいたのですが、彼の実家の田植えを手伝ったのがきっかけとなり、郡上に通うようになりました。

長良川は、かつては上流と下流を結ぶ交易のルートでした。上流で木が伐られて、その木を筏にして運んで、下流で材木になります。また、美濃で和紙が漉(す)かれて、下流でうちわや提灯に加工されます。水も上流の山からやってくるわけです。したがって、上流の生活や自然があって、下流の生活が成り立つという関係性があったということがわかってきました。

より源流に関心を持ちながら郡上に通ううちに、かつては小さい地域で食べ物もエネルギーも自分たちでつくることができていたということを知りました。小地域で食やエネルギーの循環をつくることが、グローバルな意味でのサスティナビリティにつながるのではないかと思うようになりました。

広井　私は2012年に最初に石徹白にうかがったとき、いまのようなことを平野さんに聞いて、非常に感銘を受けました。つまりグローバルな課題も、結局は資源や食料、エネルギーを巡る争いだったりするので、ローカルの地域で、できるだけ自給できるようにすることが、結果的にグローバルの問題の解決にもつながるし、逆に言えば、グローバルな問題もローカルから出発して解決していくしかないというような考え方ですね。それは、長良川とか岐阜の状況を見る中でそう考えるようになったのですか。

平野　そうですね。仲間で勉強会をやっていて、「長良川流域持続可能研究会」という名前なんですけど。

広井　今号のテーマはまさに「持続可能性」です。

平野　名古屋大学の高野雅夫先生や、NPO法人地域再生機構の駒宮博男理事長などに、「成長の限界」など、いろいろなことを教えていただく中で、このままでは持続不可能だということも改めて認識しましたし、エネルギーは今後非常に重要な問題になるだろう、それを地域でやっていきたいと思いました。そこで、小さな水力発電をやろうという話になり、郡上市内のいろいろな集落にその話を持ちかけました。みんな20代だったので、「そういうことをやったら面白いね」みたいなノリで、駒宮さんが、「そんなの簡単にできるんだ」なんて言うので（笑）。

広井　駒宮さんは存じ上げていますが、ごく小さいピコ水力発電を開発されたりしている方ですね。

平野　はい。それで、駒宮さんに乗せられて、「じゃ、みんなでやろうぜ」と。だから、僕が中心でやっていたというより、仲間でわいわい盛り上がっていたみたいな感じです。駒宮さんが、たまたま石徹白の人たちと知り合いで、「石徹白は水も豊かだし、地域の人たちも非常に危機感を持っていて何とかしたいと思っているから、あそこならいいんじゃないか」ということで連れていかれたのが最初です。そこで、地元の人たちと対面をして、小水力発電をやりましょうという話をしたところ、石徹白の人たちも、そういうことをやってみたいと思っていたというのです。

挫折経験を経て時が来る

広井　外資コンサルをやめて、地方に飛び込むというのは、大きな決断だったのではないですか。

平野　そのような決断をするまでは、大それたことだと思っていたのですが、実際には、自然な流れで決断することができました。実は、岐阜でNPOのまちづくりの団体を始めて1年ぐらい経ったとき、岐阜にUターンしようとして、決断できなかった苦い経験があります。当時、一緒に活動をはじめた年下の友人が、大学を中退して岐阜市に戻って、NPOをやることを決断したんです。僕自身は、彼に強く誘われて、岐阜の仲間たちもみんな「帰ってきて一緒にやろう」と言ってくれました。でも、そのときに踏み切れなかったという挫折の経験があります。それは27〜28歳のころ、コンサルに入る前の最初の会社のときです。

広井　何かやり残したことがあるという感じですか。

平野　そうですね。社会人2年目で、まだまだ実力も伴っていないという気もあるし、東京で何かやらないといけないという気持ちもあって。理屈としては一緒にやりたい、やってみようと思うんですけれども、体が動かないみたいな。自分にとっては、大きな挫折経験となりました。

広井　ふつうの“挫折”とはちょっと違いますけどね。

平野　そうですね。ずっと地方のことをやりたいと言っていて、一緒にやろうと言ってくれる仲間もいて、地元としても状況が整ってきて、「やらない理由はないじゃないか」とみんなに言われました。岐阜の学生たちが、僕の東京の独り暮らしの家に泊まり込んで、平野が岐阜に戻ると言うまでここを動かないと（笑）。

広井　ものすごくドラマチックですね。

平野　ドラマですよ。毎日、仕事から帰ると家に彼らがいて、話をして、また翌朝出かけていく。1週間ぐらい籠城していました。それが最初の会社で4年間のうちの2年目のことで、3年目は打ちひしがれた時期を過ごし、4年目にだいぶ回復してきて、やっぱりもう少し東京で学ぼうという気になりました。

そのとき、ある企業家の方に、「この仕事を辞めて会社を起こすとか、地方に行って何かを始めるというのは、特別な人でないとなかなかできないですよね」みたいな話をしたんです。そうしたら、「しかるべき時が来たら腹に落ちるので、その時に動けばいいんだ」と

石徹白の小水力発電用水車（写真提供：NPO法人地域再生機構）

言われまして。

広井　それは貴重なアドバイスですね。

平野　はい。「そんな時が来るのかな」と思いながら、コンサルに転職して仕事をしていたとき、石徹白でエネルギーのことをやろうということが固まった。「ああ、しかるべき時が来た」と感じました。

石徹白との接点ができてから半年後に退職し、エネルギーの仕事を始めようということでいったん岐阜市に戻って準備をして、3年後に石徹白に移住しました。

広井　移住されたのが2011年ですね。私が初めて平野さんにコンタクトを取ったのが2012年1月で、訪問させていただいたのが4月でした。3.11（東日本大震災）のあった2011年の暮れに、テレビで石徹白地区の先駆的な小水力の取り組みとして紹介され、平野さんもそこで説明をされていた。それで連絡を取らせていただいたんです。自然エネルギーに対する世の中の関心も高まっていました。あの時期はまだ小規模な小水力だったけれども、小水力発電による地域再生として注目されるようになっていた時期ですね。

平野　そうですね。まだそういうことをやっていたところが少なかったですからね。

広井　ほとんどなかったと思います。私が最初に平野さんにお会いしたころは、小規模の小水力発電、水車型とか、水路に取りつけるものとか、もっと小さなものでした。そこから始めて、最終的に石徹白地区全体を賄うような、小水力発電と言ってもかなりの規模のものにされた。

平野　それでも小水力ですけどね。

広井　それが実現したのがいつごろですか。

平野　完成したのは2016年の夏です。

大正13年に水力発電をしていた

広井　2011年のころから完成に至るまで、大きく振り返るとどういう流れでしたか。

平野　2008年3月に会社を辞めて、その秋に石徹白の人たちと、どういう発電ができそうかという調査をしたところ、100キロワットぐらいの規模の発電所ができそうな場所が見つかりました。そこで、石徹白の人たちと一緒に、山梨や長野にそれぐらいの規模の発電所を見に行きました。その帰りのバスの中で、「億単位のお金がかかるのですが、これを石徹白でみんなでつくりませんか」と話したところ、「100世帯の集落で億単位のお金を出してつくるのはとても無理だ」というのがみなさんの意見でした。ただ、ある方が、「小さなものから始めて、小水力発電が石徹白の将来にとって必要なものということが見えてきたら、もしかしたら、できるようになるかもしれない」とおっしゃった。それで、小さなものから始めることになりました。

最初は家1軒分の電気をということで始めたのですが、世の中的には再生可能エネルギーに対する関心もまだ低かったし、僕らも石徹白に住んでいなかったので、「よそ者が来て何かおかしなことをやっている」という人もあった。それで、なるべく地域の人たちの関心に沿った活動をしようということで、特産品をつくったり、地元の女性有志によるカフェづくりを応援したりしていました。そして、僕らも移住しました。

あとは「聞き書き」活動をしました。地域のお年寄りにお話を聞いて、本にまとめるのです。高度成長期以前の暮らしを知っている方々のお話からは、とても学ぶことが多いと感じます。

その話の中で、よく、結（ゆい）のことが出てきます。かつては、田植えをみんなで助けあってやって、それが大変だけど楽しかったという話を聞きました。農業用水は、明治時代に山の中を手掘りで3キロ通したものだそうです。そして、大正13年（1924）には、地域の人たちで、水力発電所をつくっているんです。そのときは170世帯で「石徹白電気利用組合」をつくって、お金を出し合って発電所をつくった。

広井　私もある時期、環境政策を調べていて驚いたことがあります。戦後、石油中心になる中で電力は中央集権化していったけれども、実は戦前、組合をつくって各地で水力を中心に発電をしていたんですね。

平野　そうですね。当時は石徹白に製材所があって、製材所で水を使いますので、そこに水力発電を設置しました。そこから、自分たちで送電網を引いて全世帯の電気を賄っていた。それが昭和30年（1955）まで続くので、30年間ぐらい、完全に電気は自給をしていました。

広井　いま思うと本当にすごいことですね。

平野　すごいです。私たちは、ごく小さな水力発電でもとても苦労したのですが、昔すでにそれだけのことをやっていた。

石徹白は縄文時代から続く集落で、ずっと千人ぐらいの人口を保ってきたんです。それが、戦後、特に昭和33年の合併以降急速に減って、合併時は1,200人いたのが、いまでは250人になっている。よくよく考えると、戦前は便利で暮らしやすかったから人が多かったわけではないですよね。逆に、戦後、便利になればなるほど、地域でみんなで何かをやるということが薄れていったので、どんどん人が減っていったのかなと思いました。

さて、2012年に岐阜県庁から、私たちが目をつけていた場所で発電をしたいという話がありました。でも、県の事業で発電所をつくると、売電の利益は運営する市に全部入り、地元にはほとんど残らないことがわかった。それではあまり地元のためにならないので、リスクを負ってでも、地元に利益が落ちる発電所にしようということで、県の発電所とは別に、地域でお金を出し合って自分たちの発電所をつくりました。

地域の人たちも、力を合わせて地域の将来に向かっていくきっかけにしようと考えました。こうして、2014年に集落全世帯出資の農業協同組合ができ、そこが建設をして、2016年に完成しました。地域の人たちが自分たちでお金を出し合って、地域が主体になった発電所は、全国的にも珍しかったと思います。

広井　これは画期的なことで、成功事例として高く評価されましたね。

こころ・いのちと白山信仰

広井　石徹白で平野さんたちが実現されたことが、もっと普遍的なものになっていくにはどうしたらいいと考えられますか。

平野　石徹白で水力発電をやったことは、社会にとってどういう意義があったのかということを、よく自問自答します。

石徹白にとっては、地域の人たちが自治の力を取り戻し、自前の発電所をつくることができた。そして移住者も増えて、この10年間のUターン・Iターンが50人近くになり、集落の2割を占めるまでになりました。

全国には、石徹白と同じように過疎に悩む地域がたくさんありますが、かつては、どの地域でも、地域の自然資源を有効活用して自分たちの暮らしを成り立たせる自治の力があったのだと思います。自分たちで何とかするという力を、郡上の言葉では「甲斐性（かいしょう）」といいますが、地域に暮らす人たちが甲斐性を取り戻すことが、重要だと思います。

都会で暮らしている人たちには、「源を知る」ということを伝えていきたいと思います。石徹白のような自然に近いところで暮らし、自然からエネルギーをつくっていると、その源が見えることがとても大切だと感じます。それは“消費者”からの脱却につながると思います。

広井　「コンセントを挿せば電気が流れる」という受動的なものではなくて、ということですね。

平野　はい。エネルギーに限らず、水、食べ物、住宅、衣服、みんなそうですけど、源がどこにあるかを知る。それは「人間の命はどこからやって来るか」ということにも通じますが、すごく大事なことだと思います。それは、こころの話になるかもしれませんが、物事の見え方とか捉え方が変わってくるのではないかという気がしています。

自分たちの命はどこで支えられているか。自然があって、豊かな森があって、そこからきれいな水が流れてくる。食べ物も、ただスーパーに並んでいるものを買うということだと、結局、安い物がいいということになり、生産者を買い叩くことにつながっていくので、過剰に生産したり、農薬で土汚染をしたり、魚を捕り過ぎたりする。また、原子力に頼らないと生活が回らないということになりがちなので、どこからやって来るかを知ることが大事だと思います。ただ物を消費するだけの立場ではなく、生産者とか生活者の立場に立つことですね。

ずっと石徹白で暮らしてきた人たちは、先祖代々があっていまの自分がいるという意識が非常に強い。私は都会にいるときは自分の力だけで生きているみたいな感じだったので、すごく大事なことを石徹白の人たちの精神性から学んでいます。

広井　地方への移住について、村社会で閉鎖的だとか、人間関係が窮屈だとか、そういうマイナス面もないとは言えないと思うんです。そのへんはいかがですか。

平野　これはかなり地域性があると思うんです。石徹白の場合は、それぞれの家が自立していて、必要なときはまとまるけれども、ある程度距離感を保つみたいなところがあって、基本的に排他的ではなくて、外から来た人もすごくよくしてくださる土地柄です。

広井　それは何か背景があるのですか。

平野　石徹白は白山信仰の拠点だったので、昔から人

広井良典教授と平野彰秀氏、郡上市のHUB GUJOにて

が出入りをしていたということがあるようです。「御師」と言いますが、夏の間は宿坊を営んで、白山登山の道案内をして、冬は全国に出かけていってご祈禱をする。その人たちが白山信仰を広めていって、彼らの現金収入にもなっていました。

また、石徹白は雪が深く、隣の集落まで15キロの道のりがあるので、昭和45年（1970）まで冬は雪の中を3～4時間歩かないと行けないという集落だった。たとえば、うちの隣のおばさんは昭和20年生まれなのですが、昭和40年代に子どもを出産するとき、産まれる1週間前に、雪の中を歩いて山を越えて町の病院まで来て出産し、産まれて1週間後に、子どもをリンゴ箱に入れて背負って、また山を超えて帰ったのだそうです。高度成長期以前の、自然と共に生きていたころの価値観を持っているという感じなのです。

広井　面白いですね。白山信仰で思い出したのですが、最初に平野さんに連絡を取らせていただいたときに、「鎮守の森・自然エネルギーコミュニティ構想」という、鎮守の森と自然エネルギーを結びつけ、自然エネルギーの拠点を全国津々浦々に整備していく構想についてお話ししたとき、怪訝な顔をされるかなと思ったところ、平野さんからのメッセージで、自然エネルギーの見学などで石徹白に訪れる方には、必ず白山中居神社にお参りいただいていますというのを読んで、びっくりしました。その地域の自治やエネルギーの自治を考えることと、精神性とか鎮守の森、信仰みたいなこともやはりつながっているのですね。

平野　そう思います。白山は水を四方に分ける「水分の神」と言われていますので、水もご神体の1つです。水で発電するということは、自然の恵みで発電するということです。源を知ることは、信仰や感謝のこころにもつながると思います。

拡大成長型ではない本当の豊かさ

広井　去年、京都でのシンポジウム（2018年11月26日「地球倫理 ── ローカルからグローバルへ」）に来られたとき、いまのような話も踏まえた上で、現在の日本社会について、平野さんはやや危機感を感じているようなことを言われました。

平野　広井先生たちがやっていらっしゃるシミュレーションで、都市集中なのか、地方分散なのかというテーマはとても興味深く拝見させていただきました。このまま行くと、都市集中で、経済効率という方向に、全体としては突き進んでいくだろうなと思います。一方で、所与のものとして考えずに未来を描くという立場で行くならば、自然と共生しながら、持続可能な形をつくっていくことはあるんだろうなという気がしています。いままでコンサルティング会社とかビジネスの世界でやってきた人の中にも、都市集中ではない未来をつくっていこうという人たちが出てきています。

平成の30年間の総括をすると、日本は経済的にはまったくいいところはなかった、ITなどを駆使したほかの国は経済成長をしている、みたいな話がありますが、IT、情報技術の発展はめざましいので、今後自動車会社でもそのまま生き残れなくなるかもしれない。良くも悪くも情報技術によって、20世紀後半型の社会とか、高度成長で工業化社会という前提自体が大きく崩れようとしているのかなと思っています。

一方で、昔だったら、たとえば石徹白のような田舎と都会では、情報の環境とか仕事の環境は大きく違ったかもしれません。でも、いまはもはやほとんど変わらなくなってきているところがあって、前提がどんどん崩れているなという時代認識があります。

広井　危機感もありながら、プラスの可能性も出てきている。

平野　そうですね。たとえば、教育という観点で言ったとき、われわれは受験勉強をして、いい高校、いい大学にということでやってきました。けれども、「些末な事実的知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題」ということを、文部科学省が新学習指導要領の中で明記している。一方で、「地域みらい留学」という仕組みが島根県の海士町から始まっています。地

方だからこそできるプロジェクト型の学びがあるということが全国に広がっていって、偏差値の高い高校に行かせるより、地域でプロジェクトをつくっていくとか、課題を解決していくことを学ぶほうに大きく変わりつつあります。

従来型の工業化社会の価値観にいる人たちにとっては難しい社会になっていくでしょう。そういう人たちがいままでの仕組みを何とか維持しようとすると、なかなか次の時代に移れない。だけど、その前提自体がどんどん崩れていって、より理想的な未来を描くという方向に移り変われる可能性もあるように思います。

広井　その話を聞いて少し光がさしてくるような気がします。昭和は拡大成長で、一本の坂道をみんなで上るという感じでした。平成は、本当は人口減少社会になって変わっていくはずだったけれど、経済社会の基調は相変わらず昭和的な拡大成長路線で、矛盾が広がっていった。希望を込めて言うと、令和こそ、そういう単純な拡大成長型ではない、本当の意味の豊かさを求める方向に行ってほしいし、平野さんはまさに石徹白でそれを先駆的に実現されてきました。時代が平野さんに追いついてきたように思います。

平野　価値観がもっと多様化してくるだろうなと思いますが、従来どおりの考え方の人たちは根強くいますので、すぐには変われないかもしれません。でも、都市集中ではない未来だったり、こころの豊かさ、自然との共生といったことを志向する人たちは一定数は出てくるはずです。そういう人たちが、新しい社会をつくっていく可能性はあり得ると思います。

都市と地域をつないで新しい価値を生む

広井　いま言われたようなことを実現していくために、これからこういうことをやっていきたい、ということがありますか。

平野　2016年に小水力発電が完成してからこの3年は、都市と地域をつないで新しい価値を生むことを重点的にやってきました。このHUB GUJOという場もその1つです。たとえば、遠隔会議システムを提供しているベンチャー企業が、HUB GUJOにサテライトオフィスを開設しています。それがきっかけとなり、郡上市内の全小中学校に彼らのシステムが導入されました。さらに、私たちの仲間の、NEC出身の技術者が、ロボット・プログラミングの私塾をはじめたことがきっかけとなり、今年は郡上市の全小学校の授業でプログラミング教育をやっています。また、情報技術を使って、地域の課題を解決していくプロジェクト型の学習も、今年から始まりました。

広井　学校教育にも入っているのはすごいですね。

平野　文科省が新学習指導要領をつくっても、なかなか現場は変われない。どうしても知識偏重型というか、決まったことを教える教育が続いてしまう。でも、たとえば郡上ですと、都会の子どもたちを対象に自然体験を提供している団体が多数あります。その人たちは、自然体験の中で、子どもたちの自主性を重んじた学びの場を展開しています。先生の話を聞いて一律に全部の教室で同じことをやらせるのではなくて、それぞれの子どもたちが自発的にやりたいことやるのをサポートしていくという考え方で自然体験の場をやっている。学校の先生だけでは変われなくても、地域に新しい教育の価値観を持つ人たちがいるので、そういうところと融合していくことによって、郡上、海士町で先駆的に始まったように、これからの時代に必要な子どもたちを、地域だからこそ育てられると思います。

もう1つ、石徹白で私の妻がやっている「石徹白洋品店」というお店があります。私がいま履いているこのパンツもそうなんですが、全部直線断ちで、地域の野良着を使った服なんです。まったく布が無駄にならないつくり方です。化学染料ではなく藍や草木で染めて、蚕も飼い、今度、ヒツジも飼おうとしているんです。衣・食・住・エネルギーのうち、食と住は比較的見えやすいですけれども、衣の部分って、最も早く工業化されて、その源が見えなくなっています。どういう過程で繊維ができて、布になって、服になっていくかをちゃんと伝えられるような場をつくろうとしています。石徹白がそういう気づきの場としての役割を果たすようになればいいなと考えています。

もう1つ、「郡上カンパニー」という事業をやっていて、それも非常に面白いのです。郡上の人が何か新しい事業とか新しい取り組みをやりたいという提案をして、都会の人が3カ月通って一緒にプロジェクトを育て、その後3年間一緒に共同操業をするというプログラムです。これまでの3年間で30プロジェクトぐらい生まれています。このプログラムは、都市に暮らす人たちの、人生のトランジッションの場になっていると感じます。郡上の人や郡上の自然と出会って、移住する人もいます。中には、ベンチャー企業の経営者が、郡上カンパニーのプログラムに参加したことで、「目の前の人を大切にする」というふうにマネジメントスタイルを変えたという人もいました。都市の人たちも郡上の人たちも、お互い学びを得ることのできる場が生まれつつあります。

広井　今号のテーマ「こころと持続可能性」にぴったりのお話をありがとうございました。

平野　ありがとうございました。

（2019年7月18日、郡上市のHUB GUJOにて。撮影：村松繁昌）

成長経済から持続的社会へ

佐伯啓思（京都大学こころの未来研究センター特任教授）
SAEKI Keishi

1949（昭和24）年奈良県生まれ。東京大学経済学部卒業、同大学院経済学研究科博士課程単位取得。広島修道大学商学部講師、滋賀大学経済学部助教授、滋賀大学経済学部教授を経て、1993年～2015年京都大学大学院人間・環境学研究科教授、2015年より京都大学名誉教授。共生文明学、現代文明論、現代社会論、社会思想史を研究テーマとし、現代社会を文明論的観点から捉え、政治、経済の分野を中心に広く評論活動を行っている。著書に『隠された思考 —— 市場経済のメタフィジックス』（筑摩書房、1985年、サントリー学芸賞）『反・幸福論』（新潮社、2012年）、『日本の宿命』（新潮社、2013年）、『貨幣と欲望 —— 資本主義の精神解剖学』（筑摩書房、2013年）、『西田幾多郎 —— 無私の思想と日本人』（新潮社、2014年）『さらば、資本主義』（新潮社、2015年）、『反・民主主義論』（新潮社、2016年）、『経済成長への訣別』（新潮社、2017年）、『さらば、民主主義 —— 憲法と日本社会を問いなおす』（朝日新書、2017年）、『死と生』（新潮社、2018年）など多数。

1　経済成長の終焉

今日、経済成長はもっとも重要な価値となっている。とりわけ日本では、戦後の復興から始まり、1960年代の「奇跡の成長」をへて、80年代のバブルへとひたすら経済成長を目指し、また実現してきた。その成功体験のゆえにか、21世紀に入った今日でも「経済成長至上主義」から抜け出ることができない。ところが現実を見ると、バブル崩壊後の90年代以降、経済成長率は0－1％という極めて低い水準で推移している。つまり、われわれの頭の中にある「期待」とわれわれが生きている「現実」の間に大きなギャップがある。

そこで、何とか現実を変えなければというわけで、次々とイノーベーションが引き起こされ、また強い期待がかけられる。90年代のIT革命から始まって、今日では、AI、ロボット、生命科学、IOTなどにおけるイノーベーションこそが成長を可能とする、とされる。

しかし、これらの新手のイノーベーションが経済成長を可能とするという理由はどこにもない。一般的にいえば、経済成長率は、労働人口の増加率と労働生産性の増加率によって決定される。今日の日本では、労働人口の増加率はマイナスであり、それゆえ経済成長の実現のためには、労働生産性の増加が必要となる。

ところで労働生産性とは何かといえば、GDP（国内総生産）を総労働時間（労働人口と労働時間を合わせたもの）で割った数値である。ということは、GDPの値が変化せずに、総労働時間が減少すれば労働生産性は上昇することになる。そこで、たとえば、AIやロボットの大規模な導入によって無駄な労働がはぶかれ、労働時間が短くなれば総労働時間は短くなるので労働生産性は上昇することになる。

ところがそれでGDPが増加するとは限らない。なぜなら、GDPは結局のところ消費需要が増加しなければ増加しないからだ。そして、総労働時間が短くなれば、労働者の所得が増加するとは期待できず、所得が増えなければ消費も増えないであろう。ということは、AIやロボットの導入によってGDPが増加するかといえば、おそらくそうはならないであろう。イノーベーションを起こせば経済成長を実現できるという論理は必ずしも成り立たないのである。

少し面倒な理屈を述べたが、ここで言いたいことは、今日の先進国ではもはや経済成長を至上の価値とするわけにはいかないだろう、ということである。とりわけ人口減少・高齢化社会へと突入した日本においてはなおさらそうである。

戦後の先進国の経済成長率の推移をざっと見ても、それが傾向的に低下している事実を見て取ることができる。日本の場合、それはきわめて顕著で、1953－1973年の平均成長率は9.1％、74－90年が4.3％、91－2007年は0.8％である。これは日本だけではなく先進7か国で見ても、70年代が3.6％、80年代が2.7％、90年代が2.0％となっている（**図1**、**図2**）。

おそらく、この傾向的低下を逆転するのはきわめて困難であろう。そして、この傾向的低下をもたらしてい

る最大の要因は、イノーベーションの不足や市場競争の欠如ではなく、戦後に一貫して成長してきた先進国にあっては、経済的な富（物的な豊かさ）が相当な水準にまで達した、つまり戦後の工業社会という意味では「成熟段階」を迎えている、という点に求めるべきであろう。この成熟段階までくれば、いくらイノーベーションを起こして生産性を高め、供給を増やしても、それに見合うだけの総需要の増加がみられないのである。簡単にいえば、消費が伸びないのである。そのひとつの要因は、所得が増加しないからであるが、もうひとつの要因は、多くの人々がもはや物的な富の増加に強い関心をもたず、「幸福」の基準を別のところに求めるようになっているからであろう。

この「幸福観念」の変化に私も関心をもつのだが、その前に、改めてひとつのことを指摘しておきたい。

2　「フロー」から「ストック」へ

これほど豊かになっても、なぜ、われわれはかくも成長に囚われるのだろうか。それ自体がひとつの奇怪な心理的事実であり、精神分析上、あるいは社会心理学上の興味深い事実だと思うが、まず、きわめて単純な誤解があることに注意しておきたい。

しばしば、脱成長というと次のような批判がなされる。「経済成長できなければ、日本は貧しくなる。それでいいのか」というものである。もちろん、これが単純な誤解であることはいうまでもない。経済成長はあくまでGDPの増加率であり、GDPとは1年間に新たに生産され市場を通して売られた生産物の価値である。だから、経済成長率が10％だということは、GDPの増加率が10％ということである。たとえば、日本経済のGDPが500兆円だとすれば、成長率が10％なら、来年のGDPは550兆円となり、再来年はまたその10％増えて605兆円になる。一方、ゼロ成長だとすれば、毎年GDPは500兆円である。

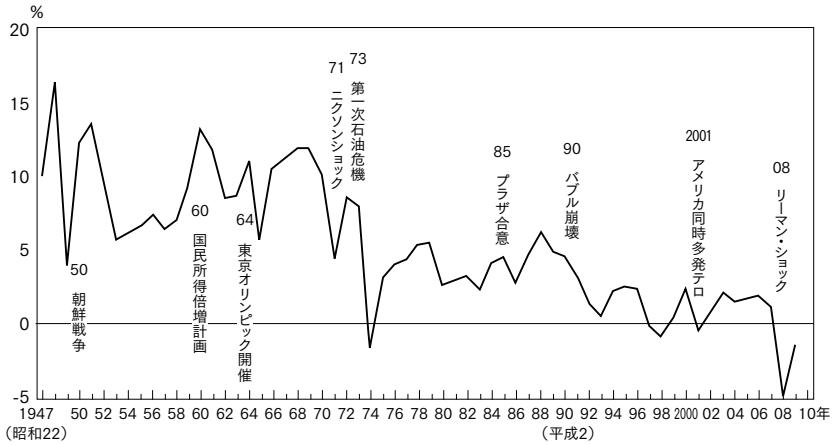


図1　戦後日本の名目経済成長率　　資料出所：内閣府ホームページ等より

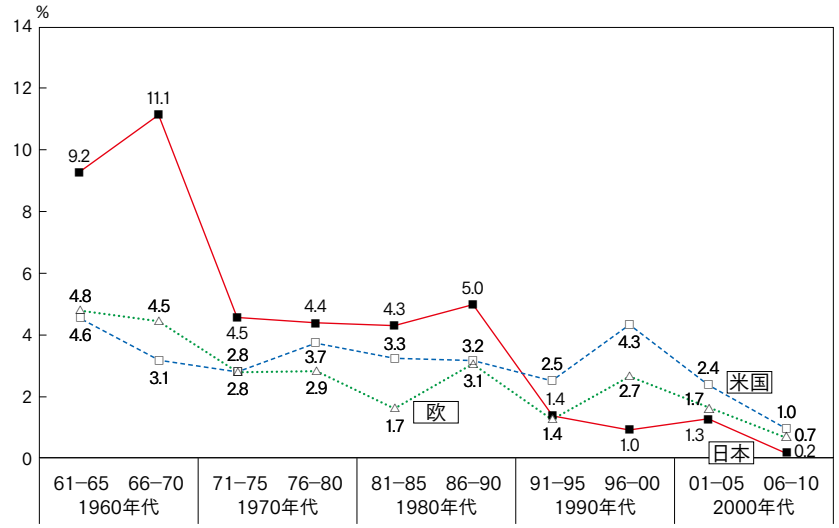


図2　年代ごとの日米欧の経済成長率
注：年代ごとの経済成長率は各年の成長率（実質GDP対前年増減率）の単純平均。欧は英国、ドイツ（1991年では西ドイツ）、フランス、イタリア、スウェーデン
資料出所：世界銀行WDI（2011年1月29日現在、1991年までの西ドイツはOECD資料）、内閣府（日本）より

これは何を意味するのか。GDPとは、あくまで1年間に生産・消費された付加価値であった。つまり、今年度に新たに付加された価値である。ゼロ成長では、今年度の新たな付加価値は500兆円であり、来年度もまた500兆円が付加される。毎年付加されるGDPが増加するのがプラス成長であり、その付加分が増加しないのがゼロ成長だ。つまり、成長率が問題としているのは、「付加分」の増加であって、国全体に蓄積された富ではない。ゼロ成長でも「付加分」が毎年同額だけ生み出されているのである。したがって、ゼロ成長でも決して貧しくなるわけではない。毎年、同額の「付加」が生み出されるのであり、それは、われわれの生活の中に蓄積されてゆくのである。

そうだとすれば、「経済成長しなければ、日本は貧しくなる」という論の誤りは明白であろう。「付加される富」と「蓄積された富」を混同しているのである。「付加された富」は「フロー」であり、「蓄積された富」は「ストック」である。GDPはあくまでフローに関わる。フローが毎年大きくなればプラス成長であり、フローが毎年同じであればゼロ成長である。しかし、ゼロ成長であっても、フローの一部がストックとなっ

て社会に蓄積されてゆくことに変わりはない。たとえば、仮にGDP500兆円のうちの300兆円がその1年で消費されてしまい、100兆円が従来のストックの補てんなどに使われたとしても、それでも100兆円は新たなストックとして付加されることになる。だから、「豊かさ」をストックの次元で理解すれば、ゼロ成長でも「豊かになる」ことになる。

ところが、GDPは数字で測定できるのに対して、すでに蓄積されたストックの価値は測定できない。その結果、GDPの成長率のみが関心の的になってしまい、蓄積されたストックは問題とならないのである。

だが、本当に大事なのは毎年のフローなのか、それとも蓄積されたストックなのであろうか。われわれが多くの場合に生活のなかで「豊かさ」の実感をもつのはストックであろう。たとえば、住宅や近隣の環境、自然環境、病院や学校などの公共施設、都市そのものやオフィスビル、公園や街路、街の景観、文化的施設など、すべてストックである。われわれは生活のなかで「豊かさ」を問題とするのは、多くの場合、これらの「社会共通資本」なのである。そして、GDPの成長率は、社会共通資本については何も述べない。ところが、90年代のグローバル経済の市場競争主義においてもっぱら強調されたのは、あくまで「フロー」としてのGDPの増加であって、「ストック」としての社会共通資本はむしろ「非効率」とみなされて非難の対象となったのだった。これに対して、低成長時代とは、市場競争ではなく、むしろ「ストック」としての社会共通資本へと関心を向けるべき時代であろう。

一般論としていえば、今日の日本では、多くの人が物資面においてはかなりの充足感を持っていることは間違いなかろう。たとえば、『現代日本人の意識調査』（放送文化研究所、2010年）を見ても、さまざまな意味での経済的な満足度は高く、生活全般にわたる満足度を見ると、「満足」と「やや満足」を足しあわせた数字は、80年代以降、おおよそ80％後半で推移している。とりわけ、衣食住や地域の物的な生活環境については70年代前半から80年代にかけて大きく増加して後も多少の増加傾向にあり、おおよそ70－80％が満足している。これに対して、強いて言えば、「地域や職場での人間関係」における満足度がやや低く、90年代に多少の減少を見せ、おおよそ70％の人が満足と答えている。

これからわかることは何だろうか。高度成長やその後のバブル経済の後、日本人の80％近くが物的な生活にはおおよそ満足しており、しかもそれは90年代以降の経済低迷にもかかわらずほとんど変化しない、ということである。明らかに、今日の日本は物的な富に関しては成熟段階にある、ということになろう。人々が強く求めるのは欠乏感のある対象であって、満足しているものではない。とすれば、物的なものを軸にした生活満足度が90％近くになるというような社会において、経済成長主義が人々に幸福感をもたらさないのも当然のことであろう。

3　「持続可能な社会」とは

今日、しばしば「持続可能性社会」が論議される。国連サミットが2015年に採用したSDGs（持続可能な開発目標）というものもある。17項目にわたって、2030年を目指し国際的な目標を定めて、各国に対して一定の成果を達成させようとしている。もともとその基本目標は「1人も取り残されない」という、少々歯の浮くような大上段に構えた理想主義であって、あまり現実性はない。しかし、SDGsは別としても「持続可能な社会」という問題設定には意味はあり、ポスト経済成長社会が、何らかの意味で、経済成長を目指さなくとも持続可能な社会を目指すことは間違いなかろう。

持続可能な社会といえば、通常は、経済成長が自然資源、食料生産、環境等にダメージを与え、その結果として成長を可能とするその基本条件を破壊してしまうという矛盾を突くことが多い。その先駆けは、1972年に発表されたローマクラブの『成長の限界』に見ることができ、そこで、著者たちは、このままで経済成長が続けば、人口増加とGDPの増加は指数的に増大し、その結果として、食糧難を引き起こし、また資源枯渇と環境破壊をもたらすと主張した。経済成長を野放しにすれば、やがて、突然にクライシスが襲ってくる。したがって、今のうちに、持続可能な社会へ向けて意図的に成長率を落とすべきだ、という提案であった。

しかし、新興国が徹底した成長路線を取ろうとしている今日、地球規模でいえば、この主張に意味がないわけではないが、こと先進国に関しては、成長率は低下し、人口増加にも抑制がかかっている。環境負荷の比較的小さなイノーベーションも進行している。とすれば、先進国においてはもはや持続可能な社会を論じる必要はないのだろうか。そうではない。

たとえば、日本の東日本大震災のような大規模災害を考えてみよう。この巨大地震と津波によって何が失

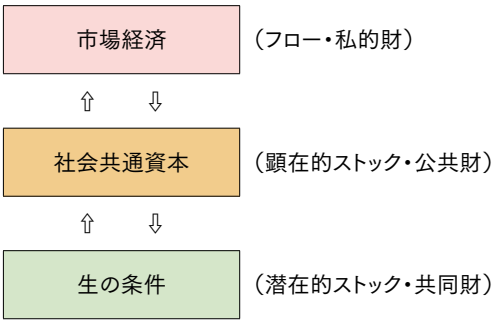


図3

われたのであろうか。まずは人命である。次に海岸線や海、森林などの自然である。さらに町や建物そのものである。さらに地域の人のつながりである。そして最後に、人々の精神、つまり「こころ」に決定的なダメージを与えた。

このことは、われわれが守らなければならないもの、われわれの生を可能にしている基本的な条件が何であるかを端的に示しているだろう。列挙すれば次のようになる。「生命」「自然」「世界（町）」「人間関係」「精神」である。これらは「生の条件」であって、あらゆる活動の基本的な条件といってよいだろう。それは市場経済や社会共通資本よりもさらに根本にある条件であろう。（**図3**、これらについては、私の『経済成長主義への訣別』新潮選書、2017年を参照）。

巨大災害によってわれわれが思い知るのは、これらの生の条件が一瞬にして破壊されることにほかならない。言い換えれば、持続可能でなければならないのは、まずはこれらの「生の条件」である。

「生命」に対する脅威はもちろん巨大災害だけではなく、高齢化にしても同じことだし、また犯罪もあるだろう。あるいは、いきいきと活動するためのさまざまな健康維持も「生命」に属するであろう。「自然」については特に論じるまでもなかろう。山や林、森、河川、それに農耕地などの一種の循環的な秩序のなかに日本人の生はあった。特に日本には、人間が自然と対抗するというよりもむしろ自然との調和をよしとする傾向があったはずである。

「世界」は、都市であり街であり、建物であり、さまざまな職人によって作られた家具やあるいは機械であり、また芸術作品である。その作品やそれを生み出す技術は、本質的に継承され持続されるべきものであり、その作品は、個人の生命を超えてはるかに長い時間保持されるべきものである。「人間関係」とは、家族、知人、地域などを含め、われわれは相互関係のなかで生きているという人間の生の基本的な事実にほかならない。人間の生とは、和辻哲郎ではないが「人の間」にあるものであって、人々の相互への信頼がなければならず、それもまた持続する時間のなかで初めて可能となるであろう。信頼ある関係を築くにはそれなりの時間と自己抑制がなければならないだろう。そして、最後に「精神」。これもさしたる説明は不要であろう。われわれの生にはある種の宗教的な意識（死生観など）と道徳的な意識がなければならない。ようするに価値観である。これらは、即席に作り出されるものではなく、いわば歴史的に形成され維持されるほかないであろう。

社会の持続のためには、これらの条件の持続がなければならない。すぐにわかるように、これらの「生の条件」は、それ自体が人々の生を可能とすると同時に、それらは、個々人の利害や事情を超えている。そして、人々が、それらの条件を積極的に支えていかなければならない。「生命」にせよ、「自然」にせよ、「世界」にせよ、「人間関係」にせよ、「精神」にせよ、個人の好みの問題でもなければ選択の対象でもない。人々がそれを支え、それを維持していかなければ崩壊してゆく。そして、それが崩壊しつつある社会は、かりに経済が成長しようがイノーベーションに活気があろうが、やがて大きなクライシスに直面するであろう。そして、ひとたびこれらを失うと、その復興、復活は絶望的な作業になる。

持続可能な社会とは、何よりもまず、これらの「生の条件」を維持することを最大限に優先する社会でなければならないだろう。そして、「生の条件」に対する脅威は、ただ自然災害だけではなく、過度な市場競争や過度な利潤追求型の資本主義からもやってくることに注意しなければならないし、また、行き過ぎたグローバリズムからもくるであろう。それらは、持続可能性を破壊する可能性が高いのである。近代社会は、人間の解放や自由や幸福追求を賞揚しながら、実際には、この過剰な追求によって、その人間であることの基本的な条件を破壊しかけていると言ったらよいだろう。今日、われわれの理性や欲望ではなく、「こころ」がそのことを感じ取っているのだろうと思う。

レジリエンスと持続可能性

藤田裕之（レジリエント・シティ京都市統括監）
FUJITA Hiroyuki

1955年、兵庫県生まれ。京都大学教育学部卒業後、京都市役所に勤務。教育委員会生涯学習部長、右京区長等を経て、2013年京都市副市長に就任。教育・子育て支援、区役所行政、保健・福祉・医療・スポーツ、文化・芸術、国際交流、防災対応等を担当。2017年任期満了退任後、ロックフェラー財団選定による世界100レジリエント・シティの京都市統括監に指名され現在に至る。2013年から京都光華女子大学客員教授。本年7月から京都市国際交流会館館長も兼務。また京都大学教育学部同窓会長を務めている。

はじめに

近年、さまざまな場面で散見する「レジリエンス」は、幅広い意味を持つ用語であり、どのように理解すべきか難しい場合も少なくない。そこで、本稿では、頻繁に用いられる「持続可能性」や、近年、国際目標として重要視されている「SDGs」と関係づけながら、レジリエンスの現代社会における意味合いについて考察したい。

1-1　レジリエンスの理念

レジリエンス（resilience）は、もともとラテン語から発した、復元力、弾性、強靭さといった意味の英語であるが、1970年代にエコロジーの分野で、荒廃した自然環境が徐々に復活する状態を指す意味で使われ、心理学においても、しなやかな粘り強さや組織の柔軟性などを表わす用語として頻繁に用いられるようになった。そして近年は災害への対応を中心にさまざまな危機への備えとして、しばしば用いられている。

特に2011年の東日本震災以降、危機への対応力として用いられる機会が国際的に急増し、2013年の世界経済フォーラム（通称「ダボス会議」）で、「社会のレジリエンス構築」がテーマに掲げられたのをはじめ、わが国においても、同年、内閣府に「ナショナル・レジリエンス懇談会」が設置されるなど、社会構造を考える上でのキーワードとなってきた。

1-2　レジリエンスの2つの特徴

レジリエンスが広く受け入れられる背景にあるのは、自然災害、テロ、集団感染、異常気象、経済不況など、予測不可能な事態に伴う急激な変化である。その変化に柔軟に適応し、またそこで受けるダメージを最小限に食い止めるとともに、いかに柔軟に克服できるか、さらには、押し込められたバネが跳ね上がるように、元の状態以上に回復できるのか、身近なことわざでは、「雨降って地固まる」という状態を示す表現として、重要な意味を持ってきている。

レジリエンスのもう1つの特徴は、発想の転換による新たな場面展開への挑戦である。単に元に戻るのではなく、異なった分野や方向に向けてスタートを切る状態と考えられる。こちらは、「災い転じて福となす」ということわざや「ピンチはチャンス」という標語に当たると言えよう。

以上の特徴から、レジリエンスという理念は、何事も順風満帆に進むのでなく、むしろ、必ず落ち込む場面があることを前提に、あらゆる想定外を克服し、常に柔軟に、そして前向きに対処し、元の状態以上に創造的に回復していくことにつながっているのである（**図1**参照）。

1-3　現代社会におけるレジリエンスの意義

現代社会を表現しようとするとき、先行き不透明という言葉とともに、レジリエンスほど、相応しい言葉はない。

自然災害のみならず、テロ、事故、

火災などにおいても、被害の甚大化が近年の特徴であり、技術の進歩によって、インフラ設備や施設規模は充実増大したが、万が一、災害に直面した際には、とりわけ人口の集中する都市部では、人的被害が増大する傾向にある。

また阪神淡路大震災では、多くの犠牲者が、地震そのものではなく、その後に発生した火災によって亡くなっているし、東日本大震災でも、地震の直後に襲った大津波が多くの命を奪い、甚大な被害を残したことは周知のとおりである。想定外の事態への備えという点では、直接の原因となる事象だけでなく、そうした二次災害、三次災害への対応も重要な視点である。

いずれにせよ、都市は、概して経済効率や利便性では、郊外や農漁村と比べて圧倒的優位を誇るものの、食糧やエネルギーの供給、移動手段の確保、医療・福祉面での対処などにおいて、想像を絶する危機に直面した際のリスク管理という点では、きわめて脆弱で、自立できていないと言わざるを得ない。

危機に備える常からの準備は言うまでもなく、最も厳しい局面である災害の真っ只中において耐え忍ぶ力、そしてその危機から、復元、回復に向けて動き出すエネルギーを発現していくことが、レジリエンスとして求められるが、そのためには最も困難な事態を想定しておくことが重要である。

しかし、今日の都市文明は、表面的な華やかさや豊かさだけが先行して、最悪のシナリオから逃避していると言わざるを得ない。

1-4　あらゆる危機への対応としてのレジリエンス

以上述べたように、レジリエンスの重要な要素の1つは、最悪の局面においても、決定的なダメージは回避し、復元・回復に向けた活動を再開できることである。しかし私たちが経験する危機は、そうした突然のショックとしての災害だけではない。

じわじわと忍び寄り、ややもすると見過ごされ、気づかない「ストレス」と呼ばれる危機も数多く存在する。気候変動や地球温暖化はもちろん、地域コミュニティの崩壊、文化・芸術の衰退、さらには少子化など、社会の存続において最も深刻な課題であり、これらの問題は早くから指摘されてきたにもかかわらず、ほとんど効果的な対応ができないまま現在に至っている。

これらの課題解決を考える際に重要なことは、個々の課題が実は密接に関連し合っていることを認識することである。実は、それこそが、あらゆる想定外を排除し、さまざまな代替性や可能性を駆使するレジリエンスの理念そのものと言えるのであり、個々の課題の関係性を浮き彫りにし、連携融合させて取り組むことで、個々の課題への対応が相乗効果をもたらすに至るのである。

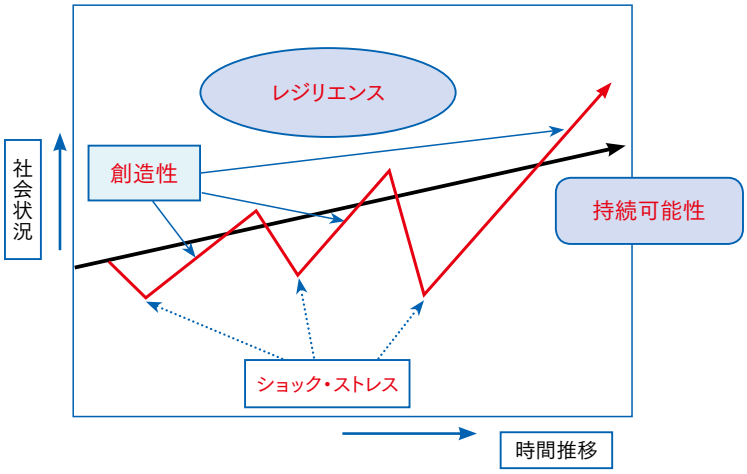


図1　「持続可能性」と「レジリエンス」

1-5　京都市におけるレジリエンス戦略

京都市では、ロックフェラー財団が提唱した世界100レジリエント・シティのプロジェクトに応募して選定され、先ごろ、「京都市レジリエンス戦略」を策定した（図2参照）。

紙面の関係で詳細な紹介はできないが、京都ならではの強みである「地域コミュニティ」「文化芸術・ものづくり」「景観・町並み」を軸に、災害への対応、環境保全、人口減少といった課題を視野に入れて、20年後、50年後も都市の魅力を維持発展できる仕組みづくりを検討している。

特に、行政の取り組みとして、施策の融合、市民との協働、前例主義の打破、想定外の克服、発想の転換（ピンチをチャンスに）を掲げるとともに、市民力の強化に向けて、レジリエンス理念の共有、地域の絆の強化、多様な社会資本の連携、ライフスタイルの見直し、レジリエンスの担い手育成を提示するとともに、それらを融合させたまちづくりを目指すユニークな提言となっている。

2-1　人間にとってのレジリエンス

レジリエンスは、人間の心にも置き換えて考えることができる。

さまざまな試練に対し、耐え忍ぶ姿には、大きく2つのタイプがある。いかなる困難にも正面から立ち向かい、折れることなく克服していくタイプが1つ目であり、こちらは一見、頑強そうであるが、限界を超えて折れてしまうときには、修復不可能な状態までダメージを深く受けている場合が少なくない。

2つ目は、しなやかで臨機応変に試練に対処し、部分的に折れる場面があっても、全体としては比較的容

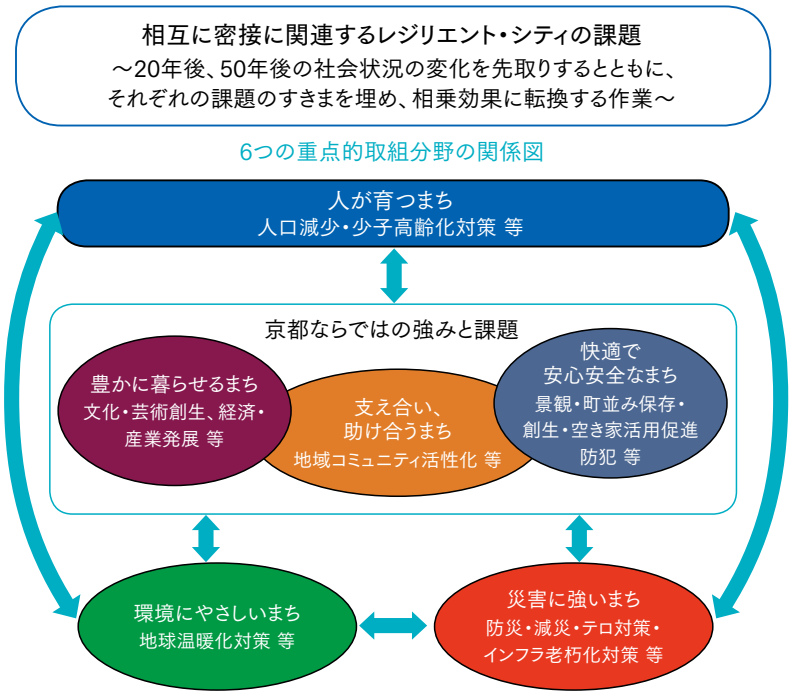


図2　京都市におけるレジリエンスの主な課題

易に復活を遂げるタイプである。

レジリエンスは、どちらかというと後者のタイプであり、課題解決が困難で乗り越えられない場合でも、余力を残して、あるいは別の方法を見出して再起を期すイメージに近いであろうか。

あわせて、レジリエンスの理念に関わって興味深いのは、自分だけで対処できない課題について、他者に協力を求めることができる力や、嫌なことは割り切る力、努力すれば報われるという楽観主義、自己有用感なども、レジリエンスな状態を達成するために不可欠の要素として挙げられることである。

さて、試練を乗り越えたとき、達成感や成就感とともに、前以上に成長できたと実感できる場面は、多くの人が経験しているのではないだろうか。

こうした視点は、教育や人間の発達を考える上でも、さらには幸福感について考える上でも、レジリエンスという理念が、重要な意味を持っていることを示している。

しかし、これまで述べてきた、レジリエンスとは何か、という課題と同時に、レジリエンスな状態を達成するためには、どのような環境を整備することが求められるのかが、むしろ課題となってきていると言えよう。

2-2　レジリエンスの獲得

結論から言って、レジリエンスとは、誰かから与えられたり、用意されたりするものではない。別の言い方をすると、レジリエンスのある社会は、常に変化する状態に適応し続け、新たに創り出されるものである。したがって、過去にレジリエンスにおいて理想とされた社会が、時代の変化を経て、固定的にそのままレジリエンスのある状態として続くことはあり得ない。それは、レジリエンスのある社会を、いかに持続するかという課題とも密接に関わっている。

レジリエンスが与えられるものでなく、創り出すものであるとするなら、その社会を持続可能にするためには、その社会の担い手、レジリエンスの創り手を育成することが不可欠となる。同時に、レジリエンスを創り出す努力の中で、その社会に相応しい構成員が登場してくることにも注目する必要がある。

こうした考え方は、学びの中で人が成長し、新たな社会を創造していく生涯学習の理念にも相通ずるところがあり、レジリエンスのある社会は生涯学習社会であるという指摘もできそうである。

3-1　持続可能性への注目

次に「持続可能性」であるが、この言葉が使われる頻度は、近年、急激に増している。理由は何といっても、2030年までのアジェンダとして2015年の国連サミットにおいて、全加盟国の賛同のもとで採択されたSDGs（Sustainable Development Goals）、即ち「持続可能な開発目標」の普及によるところが大きい。

実は、1972年のローマクラブによる「成長の限界」、近くはアル・ゴア元副大統領による「不都合な真実」等に見られるように、人類の文明が飛躍的に発展する中で、地球環境のバランスを考慮して持続可能性を論じる視点は、地球環境の危機として、はたまた人類の文明の在り方への警鐘として、しばしば指摘されてきたが、国際的な風潮にまで高まったとは言い難かった。

その意味で、SDGsは、遅まきながら、生命が存在できる惑星としての地球の持続可能性を、国際社会の緊急命題としてようやく明らかにした目標であると言えよう（図3参照）。

3-2　SDGsの意義と落とし穴

SDGsは、その前身ともいうべきMGDs（Millennium Development Goals）と比較すると、いわゆる発展途上国に照準を当てた課題だけでなく、地球環境全体を視野に入れた全面的な課題が提示されている。

しかし、この目標が2030年までに達成されることは、地球環境の持続可能性において、単なる希望や目標

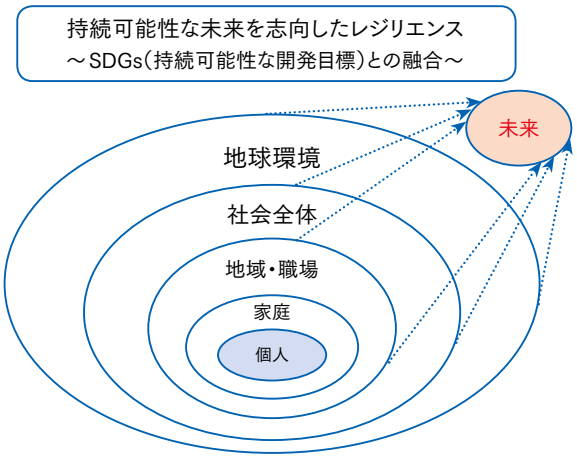


図3　レジリエンスとSDGsのつながりのイメージ

ではなく、相当切羽詰まった深刻な課題と考えるべきであろう。

さて、SDGsでは17項目の目標（Goal）と、169の達成基準（Target）が示されているが、最も重要なことは、これらの目標が相互に密接に関わっていることであり、個別に取り組んでいては、新たな「縦割り」を作り出すことにしかならないという点である。振り返ってみれば、人類は、貧困や飢餓をなくすという大義名分のもとに、海を汚し、陸の自然を破壊してきた。SDGsでは、それらの項目は、まさに両立して取り組む課題として提示されているのであり、決して優先順位や包含関係があるわけではない。

SDGsに取り組んでいる企業や団体において、「私たちは何番と何番に取り組んでいます!」と受け止められるようなキャッチフレーズや宣伝に出くわす場合があるが、こうした姿勢はSDGsの実現という視点であるとは言えまい。

3-3　SDGsとレジリエンスの関係

SDGsは、あえてたとえるなら、17本の柱で桶を作って水を入れる作業であり、それぞれの柱の間に隙間があっても、柱の長さが異なっても、水がたまらない。その隙間を埋め、高さを調整する役割を担うのが、レジリエンスの理念や行動様式なのである。

つまり、さまざまな条件や要素をつなぎ合わせ、柔軟に、粘り強く復元し、代わりの方策を見出し対応するというレジリエンスの手法が、まさにここで求められているのである。

そうしたSDGsの背景を考えるとき、そもそも地球の持続可能性を危機に陥れているのは誰なのか、という問いかけから逃れることはできない。答えは、言うまでもなく人類であり、とりわけ産業革命期以降の人類の営みが最大の原因であることは論を待たないであろう。

人類の生存や持続可能性は、当然のことながら、地球が生物の生息可能な環境を維持することが前提になっていたが、地球と人類の間において、これほどまでの対立図式が成立していることこそ最大の危機であり、その対立をどう受け止めるべきかが問題なのである。それは、本来、地球に付随して生息する人類が、もはや、地球に従属する生物でなく、危害を及ぼす害敵になりつつあることの証左かもしれない。

そのことを逆に人間社会の在り方から考えてみると、人類の20万年に及ぶ歩みの中で、動物としての本能を今日ほど失った時代はないのではなかろうか。

3-4　人類の持続可能性と「ながらスマホ」

さて近年、スマートフォンの普及が著しいが、特に目に付くのが歩きスマホ、自転車スマホ等と称されるいわゆる「ながらスマホ」である。

レジリエンスを考えるとき、私たちがいかに危機的な状況に陥っているかを認識するには、この「ながらスマホ」の実態を観察するのが大いに参考になるのではないだろうか。

人間は、生きていくために最小限の警戒心や注意力が常に求められる。そのことはレジリエンスとしての最小限の危機管理に該当するわけであるが、もし、誰かが襲ってきたら、目の前の道路が陥没していたら、と考えれば、前方や周囲への注意をあそこまで怠ることは許されないはずであるし、あまりにも無防備と言えるのではないだろうか。

むすび

今日、人類の文明は地球環境を支配しているかのごとき錯覚をもたらすレベルにまで達した。しかし、今後、経験する右肩下がりの社会においては、こうした安全や平和への無関心、俗に言う「平和ボケ」から脱却しなければ、レジリエンスのある人間は育たないのかもしれない。

その意味で、現代の世相は、幼少期からスマホやゲーム機等の機器を利用し続け、中毒状態になった末の新たな生物体のなせる業だと考えたほうが理解しやすいのかもしれない。しかし、その生物体は、私たちが目指している人類の本来の持続可能性とは、間違いなく異なるレールの上を進んでいるように感じるのである。

主な参考文献

京都市レジリエンス戦略（京都市、2019年）
広井良典『生命の政治学 —— 福祉国家・エコロジー・生命倫理』（岩波現代文庫、2015年）
佐伯啓思『経済成長主義への訣別』（新潮選書、2017年）
清水美香、山口和也写真『協働知創造のレジリエンス』（京都大学学術出版会、2015年）
枝廣淳子『レジリエンスとは何か —— 何があっても折れないこころ、暮らし、地域、社会をつくる』（東洋経済新報社、2015年）

自分で創るデイサービス――園芸療法の新しい活用

浅野房世（東京農業大学農学部教授）
ASANO Fusayo

東京農業大学農学部バイオセラピー学科植物介在（園芸）療法学研究室教授。技術士（都市及び地方計画）。一級造園施工管理技師。上智大学経済学部卒業。九州大学で「癒しの風景」に関する研究で博士号取得。専門研究はタナトロジー（死生学）と風景の関係。人間・植物関係学会理事。日本園芸療法学会理事。林野庁林政審議委員。日本造園学会学会賞（2000年）、リー・マッキャンドリス賞（アメリカ園芸療法協会、2004年）、ロン・メイス賞（国際ユニバーサル・デザイン・センター、2004年）受賞。共著に『人にやさしい公園づくり ―― バリアーフリーからユニバーサルデザインへ』（鹿島出版会、1996年）、『安らぎと緑の公園づくり ―― ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ』（鹿島出版会、1999年）、『生きられる癒しの風景 ―― 園芸療法からミリューセラピーへ』（人文書院、2008年）など。

はじめに

4人に1人が高齢者という社会を迎えた日本は、「地域で高齢者を支える」というスローガンのもとに、地域包括ケアシステムの充実が求められている。認知症に関しては、2012年は65歳以上の7人に1人と言われたが、2025年は5人に1人が認知症になると言われる。合わせて効果のある治療薬も見当たらない。人口構成が大きく変化する社会では社会ストックのあり方もサービスのあり方も変化する。

このような状況の中で、行政が用意する介護や介護予防に任せていてよいのだろうか、もっとわれわれが「自分にできること」を考え、スタートさせなければならないのではないか……と不安や焦りや疑問が起こる。

さて、筆者は植物を育てる行為を治療の媒体として活用する園芸療法の研究を行っている。園芸療法は、1990年代のバブル期後半に日本に紹介された。それ以来、30年余が過ぎる。残念ながら園芸療法士という職業が国家資格化されなかったことも1つの要因となり、以前の勢いは衰えている。しかし園芸作業のもつ効果は万人の認めるところである。

園芸療法は、園芸作業の行為そのものをリハビリテーションとして用いる場合もあるが、多くは精神療法として「植物とのかかわりによる心理的効用」を対象者の問題解決に利用する場合が多い。高齢者施設で認知症の周辺症状の軽減、精神科病院での患者の社会性向上、小児がん患児の生きる力の賦活など、多くの先行研究が、その効果を評している。

すなわち園芸療法は「問題を抱える対象者に園芸行為を介在させることによって改善を目指す」ものである。この視点から、園芸療法は病院や介護施設あるいは福祉施設などにサービスを提供する施設型になることが多い。

しかし筆者は、日本の超高齢社会に対応して園芸療法サービスの柔軟化とシームレス化が必要だと思っている。寿命が延びたわりには健康寿命が延びないことに対して、「未病をどう解決するか」「健康寿命をどう延伸させるか」という予防医療も園芸療法の重要な課題だと思っている。

独居高齢者にインタビューすると「生活し続けた場所を終の棲（ついすみか）としたい」「病院で死にたくない」「終活します」という反面、「最後はだれが支えるのか？」「独りで死んでは周囲に迷惑がかかる」という矛盾する問題を呈する。独居老人が抱く「独りになっても、住みなれた場所で死ぬまで暮らしたい。しかし誰かに迷惑をかけるわけにはいかない」という相反する問題を園芸行為が解決できるのではないかと、社会実験を始めることにした。

1　社会実験

1　地域の概要

当該地域は阪神間の山際に位置し、自然豊かな住宅地である。開発当初（50年前）から、バス路線を拒否し、豊かな景観と静かさを守ってきた。その甲斐あって国土交通省の都市景観大賞を受賞した地域である。

居住者は、駅から急峻な坂道で20分以上かかる地を選ぶ、“こだわり”のある生き方をする人々である。とはいうものの、開発から半世紀近くが経過すると600世帯の約3分の1は高齢者世帯もしくは独居老人世帯となっている。そのせいか、近年は空き家・売家が増加して、景観的にも治安的にも問題がある地域になりつつある。この傾向は、多摩や千里などのニュータウンが抱える問題でもあるが、当該地域が深刻なのは、交通手段が自家用車のみという点である。高齢になり免許証を返納すれば移動手段はタクシーしかなく、世帯の孤立化は免れない。病院通いや買い物のすべてがタクシー利用であれば、金銭的な負担も大きい。

2　目的

社会実験の仮説は、①地域に安心できるコミュニティが形成されれば、住み慣れた場所を“終の棲”とすることができるのではないか、また、②そのコミュニティ形成のプロセスが健康寿命延伸につながるのではないか、③コミュニティ形成手段は園芸作業を媒介とし、その効果、という3点である。

アメリカでは、1970年代からコミュニティ・ガーデンと呼ばれ、共同で耕し収穫するガーデンがある。このガーデンは、子どもの非行や高齢者の孤立を防ぐ効果があるとされている。日本においてもコミュニティ・ガーデンとよばれる運動や場所は多く存在するが、形態・運営・目的などが統一されていない。そのため本社会実験はコミュニティ・ガーデンと称せず、ファームと述べたい。

ファームは、健康寿命を延伸させ、孤独を解消し、1人になっても安心して死ねるコミュニティを創るための「空間」である。ファームでの作業を「園芸」と記載しているが、花ではなく野菜を育てている。囲われた空間の中で、収穫量は度外視して有機農法で植物の育ちを楽しみながら作業する点から、園芸という言葉を使っている。園芸は、播種・発芽・開花・結実・収穫という植物の成長が、対象者が抱える問題から一時的にせよ意識を逸らしてくれる。また土づくりから収穫まで多くの作業で形成されるために、グループで実施していても、得手不得手によって1人の作業量が偏らず、参加者が何らかの適応可能な仕事を見出すことができる。力の強い人、背の高い人、手先が器用な人、料理が得意な人……。「誰もが、何らかの責任ある役割を得る」ことは、高齢者の生きがいづくりでは重要なことである。

3　参加者との進め方：Step by Step

筆者はファームのファシリテーターの役割を担っているが、コミュニティの成長に合わせて、Step by Stepの指導をしてきた。多くの情報を一挙に与えることは、メンバーの不安や混乱を増長させるだけである。ファームの進行はおよそ四段階に分けられると考えている。

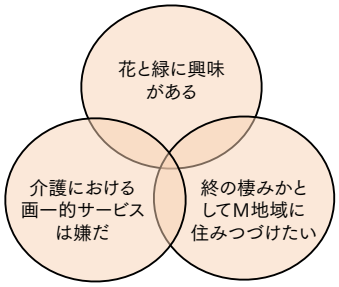
Step 1：萌芽期―「面白そうだから参加してみよう」という気持ちが起こる

Step 2：調査期―「自分事」にするために具体的なイメージと自分の役割を見出す

Step 3：整備期―集うための空間を整備する物理的作業

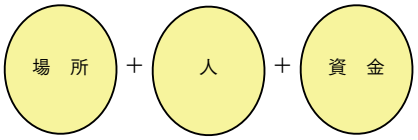
Step 4：運営期―運営へ主体的に

萌芽期：集める　Step1



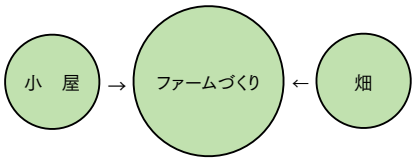
①園芸療法　②自助互助の努力
③健康寿命延伸の勉強会と見学会

調査期：探す　Step2



ファームの場所　農業の指導者　必要資金調達

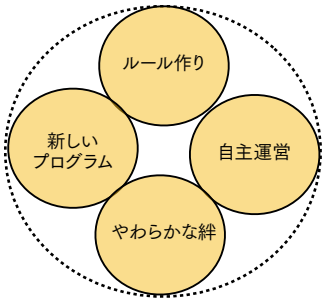
整備期：造る　Step3



ミニキッチン　すべて手作り　車いす使用可能

運営期：育てる　Step4

Farmの運営



効果の測定（心理面・身体面）

ファームでの会議

参画するためのメンバーシップの育成

Step 1～4まで、本事例の場合は2.5年かかった。

各期のポイントを以下に記載する。

萌芽期は、筆者が地域住民に呼びかけ「園芸療法とは何か？」「どのような効果があるのか」「行政の介護施策に頼らず、自分の好みに合うデイサービスとは」などについて勉強会を実施した。その結果、「園芸療法によって地域の絆が深まり、死ぬまでここで暮らせるのなら、もっと勉強したい」「やってみたい」という反応があった。このメンバーは15名（平均年齢は71±10歳）、高齢者単独世帯7家族と世話役1名であった。

調査期は、ファームの場所をどこにするかの調査である。日当り、排水、給水などを検討しながら、地域の可能性のある空き地を検討した。候補地を1カ所に絞り具体的な整備計画を始めた。園芸は、個々の作業の得手不得手は別にして、植物を育てるノウハウは必要である。当該メンバーには高齢ながら農業改良普及員がおり、全面的にそのメンバーに指導を仰いだ。あとは資金である。資金は各家庭から初期整備費3万円を徴収し、それ以外は、申請書類を多数提出して外部資金の調達を試みた。

整備期は、15名がフル活動した1年である。役所に伐開許可を申請し雑木林を伐開した。抜根したのちの整地は水平器で測りながら、人力で転圧作業を行った。高齢者の「なくてはならない場所」となるためには、収穫物を皆で食べるための調理が必要である。そのために、車いす使用可能なファーム（畑はレイズドベッドを中心）だけではなく、料理のできるミニキッチンを備えた小屋（10㎡以下）を整備することとした。小屋に必要な木材や釘を購入し、男性が中心となり建設を行った。

運営期は、レイズドベッドが設置されると同時に始まった。堆肥づくり、土づくり、播種を行い、水やり当番を決めた。当番は小屋にある日誌に収穫した野菜の数量を記載した。原則は週2回、しかし仕事を持つメンバーは休日1回のみとした。お互いが、「無理のない範囲で植物の成長に関わり、世帯に必要なその日の収穫物を採取する」ルールもメンバーの話し合いで決めた。

2　結果

前述の萌芽期は2016年9月に勉強会を行い、11月に見学会を経て、実質的なスタートは調査期（2017年2月）からとなる。中心的作業となったファームの整備（小屋の建設とレイズドベッドつくり）には、約1年が必要であった。整備期は、のべ584人、ファームで作業した時間は293時間であった（2017年3月-2018年7月末）。運営期はファームの園芸作業が中心となった（2018年8月-2019年7月）。のべ412人、193時間をファームのために費やした。運営期はそれ以外にファームの水やり当番が割り当てられ、別途に126日実施している。

この間、3回の運動機能測定を実施した。項目は「立ち上がり回数（60秒間）」「2ステップ歩幅測定」「開眼片足水平時間（120秒間）」「左右握力」である。測定は2017年6月、2018年6月、2019年6月の3回実施した。統計処理の結果は、1年目と3年目の「立ち上がり回数」と「2ステップ歩幅測定」については有意に上昇していた。一方、「開眼片足水平時間」と「左右握力」については、3年間変化がないというデータが得られた。またロコモティブテスト（自分の身体および健康が衰えたことの自覚症状問診テスト）も3年間変化は見られなかった。

3　考察

園芸によるファーム設置の目的は、「コミュニティの中での絆の形成」「健康寿命の延伸」「園芸作業の効果」である。

①コミュニティの中での絆は形成されたか

7家族15人の平均年齢は現在74歳である。スタートから3年間の7家族にはさまざまな健康や生活の問題が起こった。

メンバーA（男）は、近所のホームセンターで買い物をしているときに脳梗塞で倒れた。すぐに妻が駆け付けたが、ファームメンバーにも連絡して救急車に同乗してもらった。そのほうが落ち着いて緊急対応ができた。残りのメンバーも連絡を受けて、駐車場に置き去りになった車をAの自宅まで戻した。

メンバーB（女）は、腹部の開腹手術が必要となった。Bの入院によって食事の世話をする者がいなくなった夫に対して、ファームの女性が食事を提供した。

メンバーC（女）は、夜間に歩いているときに側溝に足を踏み込み、踵を複雑骨折し2カ月の入院となった。このあいだ、ファームのメンバーは収穫したキュウリやトマトを病院に運ぶとともに、Cの夫のサポートも行った。

メンバーD夫婦は買い物に出かけている隙に自宅に空き巣が入った。窓ガラスを壊されて侵入された。その直後にD夫婦は旅行に出かけなければならなかったが、不在のあいだ

はメンバーが見回りを実施した。

その他、大事には至らなかったものの、車の脱論の対応、熱中症へのケア、車で1時間以上離れた都心病院への運転の代行など、日常の「高齢者にはちょっとエネルギーがいる」事柄に対して、ファームで培われた「絆」がサポートできたことは大きい。高齢社会は「遠くの血縁より近くの友人が頼りになる」というが、まさしくその事例となった。

②健康寿命は延伸するか?

体力が減少したという自覚症状があるか否かを調査（ロコモティブテスト）した結果は変化がなかった。一方、椅子に腰を掛けて、立ち上がり回数を測定する下肢筋力測定と歩行能力全般が測定できる「2ステップ歩幅測定」は、1年目と3年目のあいだに有意な向上があった。高齢者は、加齢による筋力の減少を予防することが重要であるとされるが、ファームメンバーは減少ではなく向上していたことの意義は大きい。また、「開眼水平時間」と「左右握力」は減少が見られなかった。「開眼水平」は転倒防止やバランスを測定するが、バランス能力が落ちていない結果となり、握力と認知症には相関関係があるというデータもある。

ファームでは、レイズドベッド（高さ60cm）の畝と、地面レベルの畝と2種類がある。

土づくり、雑木林の落ち葉から堆肥づくり、伐開したコナラをほだ木とした菌の植え付けなど、園芸といえども、足腰を使い、上肢も使う。このような年間を通じた作業が、上肢下肢筋力を鍛え、握力も保持できたのではないかと考える。

③園芸作業の効果

ファームの施設整備として必要だった時間は293時間、参加人数はのべ584人であった。運営期は園芸作業である。参加はのべ412人193時間となった。この数字はファームの全体会議および集団で実施した園芸作業である。これ以外に1人が毎日水やり1時間程度を行い（秋から春は半日）回数は126となった。ファームに関わる時間が年間319時間となった。日曜日を除き毎日ファームで1人が作業をしていたことになる。

集合写真（茶摘みイベント）

播種、植え付け、間引き、芽かき、受粉、収穫、再整地という一連の作業が、野菜ごとに実施されるのがファームである。用事があっても、忙しくても、「待ったなし」。これが園芸の最大の良さだと考える。こちらの都合に合わさずに育っていくからこそ、植物の育ちに合わせなければならない。「今、ここでしておかなければならない」という緩やかな強制が園芸の特徴である。

他方、1人で園芸をしていれば「今日は疲れたから」「今は時間がないから」という理由のもとに、園芸作業を後回しにすることができる。しかし集団でファームを実施していると、自分だけがさぼるわけにはいかなくなる。「もし枯れたら、もし虫が付いたら、みんなに迷惑がかかる」という緩やかな強制がみんなで園芸を実施するもう1つの特徴である。

④その他

キャリア学の研究者が、メンバーにインタビューしたいという要請があり、協力した。調査を終えて研究者曰く「退職後は“自分の人生はこれでよかったのか……”という心残りや不燃焼感を持つことが多いが、メンバーはファームの仕事によって、自分の仕事やこれまでの人生は価値があったと再解釈できたことの価値は大きい」と述べた。特に整備期の男性チームの仕事へのやる気、役割意識は多大なものだった。高齢者が仕事を退職した後に自己の役割を見出せず、軽いうつ症状を呈することは多い。ファームが「出かける場所」「生活の中で生きがいとなる場所」であることで、健康寿命延伸のメンタルを支えることになると考える。

4　まとめ

筆者の社会実験はまだ途中段階ではあるが、園芸療法による高齢者の地域の絆づくりと、健康寿命の延伸の萌芽は見られると考える。

治療や療法のために園芸を活用することは多いが、園芸療法が「未病に活用」されることはまだ少ない。「自分らしく、よりよい最期を迎えるために、園芸によって心身の準備を行っていこう」というやり方は、園芸療法の範疇であると考える。老人施設で園芸療法を実施していると、「もう死にたい」「誰の役にもたっていない」「私なんて、どうせ」という発語が多い。その発語と同時に、体力も気力も減少し、自室に閉じこもる。そうなる前に、前向きに、土を耕し、笑い、喜び、食事を共にする行為が、「最後まで生ききる力」を育むと考える。

現在のファームメンバーの次なる輝きは、願わくは「同じようなファームをつくりたい」というさまざまな地域からのニーズに応えることであろう。そこに出向き、小屋をつくり、畑をつくり、その地のファームメンバーが問題を解決するのを手伝うことは、現ファームメンバーが光り輝く場面であろうと思う。高齢者を地域で支えるというのは、このような種を全国に蒔くことではないだろうか。

森林療法とはなにか

上原　巌（東京農業大学地域環境学部森林総合科学科教授）
UEHARA Iwao

1964年長野市生まれ。岐阜大学大学院博士課程修了。農学博士。日本カウンセリング学会認定カウンセラー。長野県農業高校、養護学校、社会福祉施設勤務を経て現職。日本森林保健学会理事長。全国の放置林の再生と、森林の保健休養機能を重ねた実践研究に取り組んでいる。著書に『森林療法序説』（全国林業改良普及協会、2003年）、『ジョン・レノンが愛した森　夏目漱石が癒された森』（全国林業改良普及協会、2010年）、『回復の森』（川辺書林、2012年）、『森林アメニティ学』（朝倉書店、2017年）、『造林学フィールドノート』（コロナ社、2018年）など多数。趣味は山歩き、古書店めぐり、抽象絵画、阪神タイガースの応援。

森林浴・森林療法という言葉

今から37年前の1982年（昭和57）、「みどりの森林の中を歩き、心身をリフレッシュしませんか？」というキャッチフレーズのもと、“森林浴”という新たな言葉が、時の林野庁長官秋山智英氏によって提唱された。森林浴は今日では広く市民の間に浸透した言葉となったが、もともとは、温泉などと比べていまひとつ国民の出足が鈍く、人気のなかった森林に焦点を当て、温泉に出かけるように森林にも出かけてもらいたいという意図も含んだPRの言葉であった。そして、樹木から発散される揮発物質、いわゆるフィトンチッドという言葉も同時期に研究が進み、脚光を浴びた。森の香りには殺菌などだけではなく、人をリラックスさせたり、逆に集中力を高めたりする効果があり、森林浴によるリフレッシュ効果はそのフィトンチッドを享受することでもあるとされたのだ。1980年代前半の『現代用語の基礎知識』（自由国民社）には、「森林浴」や「フィトンチッド」という言葉は、重要単語としても掲載されている。

しかしながら、それから数年後の80年代後半のバブル期には、これらの言葉は、いったん消えた感がある。好景気のときには、世相は営利や享楽に関心が向き、健康や保健衛生などには気をまわさなくなるらしい。しかし、間もなくそのバブルは弾けてしまい、今度は、日本は長期の経済低迷期に入ることとなった。やがて20世紀末になったころ、今度は“森林療法”という言葉が登場した。森林療法は、その名のとおり、森林浴をさらに自然療法の1つとしてグレーアップし、発展させたものである。具体的には、1999年（平成11）4月に、愛媛大学で行われた第115回日本林学会大会の風致部門において、「森林療法の構築を目指して」という演題で、「森林療法とは、森林環境を利用したリハビリテーション、カウンセリング、療育、作業療法、代替療法など、森林を総合的に活用した健康増進および福祉医療のこころみ」として、初めて公式に定義され、提案された。その後、行政機関でも、林野庁が、2003年（平成15）3月に報告された「高齢社会における森林空間利用についての調査報告書」の中で、「森林環境を総合的に利用した健康増進のセラピーのことを森林療法と呼称する」と定義し、発表している。

「健康バブル」

長期にわたる不景気下において、身近な自然環境に健康づくりの場を求めるという風潮は、20世紀初めのイギリスでもみられ、イギリスではその時期に公的な散策路である「フットパス」も飛躍的に国内全土に整備され、いわゆるウォーキングが人気を博するようになった。こうした動きとわが国における森林療法のデビュー、取り組みには共通している部分もみられる。また、この時期と前後して、「森林・林業基本法」が施行されたタイミングも重なって、森林の「総合的利用」や「多面的機能」などのキーワードの一環としても、森林における保健休養の企画を

行う地方自治体が各地に飛躍的に増加した。しかしながら、その中にはトップダウン形式による企画や、安易に森林療法の看板を掲げた地域振興的な企画、曖昧で漠然としたこころみの地域も数多くみられ、さらには「森林療法」に類似した名称のものや登録商標まで生まれ、観光や地域振興を主とした認定事業にまで変化していった。これはあたかも80年代後半にみられた経済バブルが、今度は、「健康バブル」の形に変容したかのようでもあった。このため、各地域における身近な森林環境を見直し、森林の手入れなどの働きかけをしながら、「森林も人間も共にその健康を高めていこう」とする取り組みや、地域の高齢者、障がい者、子どもなどをはじめ、地域住民の健康づくりに関する本来の森林療法の取り組みは、意外にも依然として稀少な存在にとどまってしまっている。したがって、森林療法の本来の目的、骨子をあらためてふりかえり、地域の高齢者、障がい者、子どもなどをはじめ、地域住民がその目的に応じて森林を歩き、休養し、あるいは作業、活動を行うことによって、「森も人も共に健やかになっていく」ことをめざす、各地での実践を重ねることこそが、現在においても最も大切な課題なのである。

森林療法の対象と目的

2001～2002年に行われた林野庁の調査によると、全国の医療機関のうち、高齢者の保養・療養環境として地域の森林の活用を期待している医療機関が5～7割にものぼることが明らかになった。調査前には約1～3割の医療機関で森林活用を考えているのであればまずまずと予想されていたので、これはその予想をはるかに上回る結果であった。このことからも、間もなく65歳以上の高齢者が総人口の4分の1以上になるわが国にあっては、森林療法の対象には高齢者もしくは中年、壮年がまずは考えられ、それらの対象者の健康作りや生活習慣病の予防が当面の目標と考えられる。

また、現在病院などに受診・通院はしていないものの、健康とも言えないという境界領域、「未病」の状態の人々も大きな対象である。毎日、満員電車に乗って通勤し、職場自体も1日中ビルの室内で、終日OA機器を相手に仕事をし続けているなどという生活習慣が健康的でないことは自ずと明らかである。こうした環境下における職業人の心身のリフレッシュやメンタルヘルスの一手段としても、森林療法にはその効果が期待されるところだ。

「森林療法」は、1999年の定義以来、もともと弱者のためのものである。心身に障がいを抱える人にも普及を進めていく必要があることは言うまでもなく、心身に障害や疾患を抱えている方のリハビリテーションの一環として、さらに場合によっては治療や休養、気分転換の一環としても、森林療法は新たな可能性を持っている。最近では特に各地の山間部などで、「ぜひ新しい試みとして実践してみたい」「うちの特色として取り入れたい」という地域病院も現れてきている。また、「うちでは昔から野外散策は行ってきている」という地域福祉施設などもみられ、地域福祉においても同様の高い可能性が考えられる。

現在の森林療法の内容

それでは現在、国内の各地で実践されている森林療法の内容には、どのようなものがあるだろうか。実践されている内容は、「ケア・治療・療育」「地域住民の健康増進」「保養」の3つに大別できよう。

まず、ケア・治療・療育としては、特に精神疾患の治療の一環として、また障がい者の療育活動の一環として、森林散策や森林での作業活動を展開しているところが全国にみられる。たとえば、東海地域のある病院では、定期的に森林散策や簡単なレクリエーションを行い、PTSD（精神的外傷ストレス）を受けた入院患者の治療を行っている（**写真1**）。また、中部や関西の社会福祉施設では、山林の保育作業を知的・精神障がい者のケアの一環として行っているところがある（**写真2**）。手入れ不足の山林が全国に増えてしまった今日、こうした山林での作業が作業療法として活用できることも森林療法の1つの特長なのだ。また、認知症の患者

写真1　病院近くの森林公園を活用して散策する医師と患者さん（静岡県の国立病院、2004年）

写真2　森林で作業療法を行う社会福祉施設（山梨県の県立公園、2010年）

写真３　地域の森林での認知症の患者さんの回想法の様子（長野県の診療所、2011年）

写真４　病院隣接の放置林を整備し、リハビリテーションに活用している事例（鹿児島県、2010年）

写真５　高齢者の定期的な森林散策（埼玉県の公民館活動：保健師指導）

さんの回想法として森林散策を取り入れている山間部の診療所（**写真３**）や、病院隣接の放置林を活用した認知症の患者さんのリハビリテーションを行っている事例（**写真４**）、地域の高血圧症の高齢者の患者さんを対象にして森林散策を取り入れている地域病院、リハビリテーションの一環として野外散策を取り入れている温泉病院などもあり、そうした地域病院、社会福祉施設の数は少しずつではあるが毎年増加してきている。

次に、住民の健康増進では、地域の高齢者が保健師さんの指導のもと、定期的、継続的に地域の森林散策を行っている事例（**写真５**）や、働き盛りの企業人や教員の心の保養づくり（**写真６**、**７**）、また一般市民を対象とした作業療法と森林散策、リラクセーションをミックスした活動などが各地で行われている（**写真８**）。

保養部門では、全国に森林療法や「セラピー」を看板に掲げた地域が各地にみられている。しかしながら、冒頭でもふれたように、トップダウン形式による企画や、ただ安易な看板を掲げた地域振興企画によって漠然とした試みになってしまっている地域も数多く、これまでの「観光」、「自然観察会」などを「療法」「セラピー」という名称の看板につけかえただけでは？という疑問を持たれる内容も数多い。さらに「療法」「セラピー」という名称を使いながらも、一体何をしたらよいのかわからない、またどう継続的に運営をしていったらよいのか不明確のまま、企画を見切り発進させてしまったという、常識的には考えられないような根本的な課題を抱えた低迷の地域の例も多く見受けられる（**写真９**）。

写真６　森林公園を活用した企業人対象の森林療法の様子（奈良県、2005年）

学会における研究・調査

2005年３月末に北海道大学で開催された日本森林学会大会では、「森林環境の持つ保健休養機能についての新たな研究の展開」という新テーマが設けられた。これまで同学会では、森林環境内の揮発性物質（フィトンチッド）や音・光、温度・イオン環境などの研究をはじめ、さまざまな森林環境下における「生理的・心理的」な研究、そして「臨床研究」の発表などが行われてきており、具

写真７　森林公園を活用した教員対象の森林療法の様子（山梨県、2007年）

写真８　放置林を整備し、その林床でのリラクセーションの様子（兵庫県、2005年）

写真９　「セラピー」の名称を掲げた公園。もとはオートキャンプ場であった（長野県、2010年）

体的には、針葉樹・広葉樹の混交林が、林内揮発成分、音、温度、休養効果などでも多様な作用を有していることや、明るく健全に整備された森林環境では、都市部と比べて快適性、休養効果が高く、心理、生理ストレスが少ないこと、森林には心身の異常値を健常値に近づけるスタビライザー的な働きがあること、森林療法は長期における行動療法、精神療法、環境療法に好適であることなどが報告されている（**写真10**）。また、今日の都市化のすすんだ生活環境で暮らしている現代人にとって、森林環境は日常空間とは隔絶した場であり、その「転地効果」は大きく、とりわけ精神的、心理的な保養効果が大きいようだ。たとえば、職場や学校などでは、目先のノルマや人間関係に日々振り回されがちであるが、森林環境に身を置くと、いつも忘れていた自分自身の心のありかや感性を少しずつ取り戻し、生活習慣をリセットできることが多い。

しかしながら、森林療法の効果は、心身共にいまだ研究の途上にあり、特に事例研究、臨床研究のデータが依然として大きく欠落していることが目下の課題である。医療、福祉、心理、教育関係者などとのコラボレーションを図った共同研究もすでに提唱されており、事例・臨床研究による森林の保健休養機能の効果の解明がさらに進んでいくことが期待される。

写真10　森林環境での生理反応研究の様子

森林療法に取り組むにあたって

森林療法に取り組むには、まずは対象者のニーズを明らかにし（健康増進、あるいは休養が目的なのか、またはケアやリハビリテーションが目的なのか）、そのニーズを踏まえた上で、距離、地形、歴史性、個人の習慣なども考慮することが基本的に必要である。また、森林療法の実践にあたっては、対象者とのインフォームドコンセント、アセスメント、計画、実行、評価という一連の流れを守ることも当然ながら重要である。特に森林療法の同行者は、自然観察ガイドとは異なり、基本的に対象者のニーズ、希望に耳を傾ける傾聴、受容の姿勢が極めて大切である。この点において、森林療法の今後の発展の成否は、それを担う人材に多分にかかっているとも言える。相手の言葉や思い、要求を着実に傾聴し、それによって、プログラムや森林環境、保養コースの設定、構築、アレンジができるような人材が望まれる。これはかなりハードルが高いことである。

森林療法の現時点における根底的な課題としては、前述したように、短時間における実験アプローチの研究は増加してきているものの、地域における長期的な実践や、臨床データが依然として不足していることである。森林の環境要因と保健休養効果の関連性を引き続き明らかにしながら、地域の高齢者の健康づくりをはじめ、子どもたちの健全な成長、働き盛りの方々の生活習慣病予備群の予防医療、また精神面での保養や、代替療法の一環としての森林療法プログラムなどについて、その効果と意義を多角的なアプローチから継続的に、実証研究していくことが強く望まれる。

はじめの一歩

森林療法のはじめの一歩で最も大切なことは、それを望む人自身の気持ちであり、感性である。気持ち、感性という言葉からは数値化しにくく、非科学的な印象を受けるが、これほど重要なものは実はない。いくら「科学的な効果」を数値、データとともに並べられても、「そうかなあ？」と自分の気持ちが納得できないのであれば、そちらが真実である。逆に、掛け値なしに、心が落ち着き、感性がめざめ、心身がリフレッシュできたと感じるのであれば、その森林の環境は、その人にとって理に適った条件だったのである。

ぜひ森林の癒しの効果を、訪れる人自身の心と体で見つけていただきたい。

森林公園での静かな一人でのひととき。日頃の生活をリセットできそうですか？

存在の不安、地面についた世界の変容
――エコロジカルな危機の時代における場所をめぐって

篠原雅武（京都大学大学院総合生存学館思修館特定准教授）
SHINOHARA Masatake

1975年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了（哲学・公共空間論・環境人文学）。日本学術振興会特別研究員PD、大阪大学特任准教授、京都大学非常勤講師などをへて現職。著書に『公共空間の政治理論』（人文書院、2007年）、『空間のために ―― 遍在化するスラム的世界のなかで』（以文社、2011年）、『全－生活論 ―― 転形期の公共空間』（以文社、2012年）、『生きられたニュータウン ―― 未来空間の哲学』（青土社、2015年）、『複数性のエコロジー ―― 人間ならざるものの環境哲学』（以文社、2016年）、『人新世の哲学＝Philosophy in the Anthropocene：思弁的実在論以後の「人間の条件」』（人文書院、2018年）。主な翻訳書として『社会の新たな哲学 ―― 集合体、潜在性、創発』（マヌエル・デランダ著、人文書院、2015年）、『自然なきエコロジー ―― 来たるべき環境哲学に向けて』（ティモシー・モートン著、以文社、2018年）など。

1

『破壊しに、と彼女たちは言う ―― 柔らかに境界を横断する女性アーティストたち』で、長谷川祐子は述べている。「人々は分断と不確かさの時代にあって、存在の不安の中にいる」。存在の不安は、「近代の個人主義の中の不安」、つまりはかつて保たれていた前近代的共同体から離れてしまったことにともなう不安とは異なっている。長谷川は、「洞窟の中で獣に怯えて暮らし、水の欠如のために何日もオアシスを探し求めて彷徨うような生の不安のレベルに近い」という[1)]。

存在の不安。それは、洞窟という、暗がりの世界に身をおくことゆえに生じてくる。私が何者であるかわからないことゆえの不安ではない。私がどこにいるのかわからない、私がいるところが何なのかわからない。それゆえに、不安が生じる。洞窟の中では、何に出会うかわからない。私をとりまくところにおいて存在するものが何であるかがわからない。私が存在しているところにおいて何がいるのか、何が起こるのか、わからない。信用できるのか、突如牙をむいて襲いかかってくるのか。私がいるところは、私が生きていくことの支えとなりうるのかどうかもわからない。水も、食料もあるのかがわからない。突然壊れてしまうかもしれない。

存在の不安は、私が存在しているところの不確かさ、危うさ、はかなさ、ないしは脆さへの感覚から生じるものを意味していると思われる。

ところで、長谷川は、存在の不安の要因として、クラウドスペース、インターネットの形成がもたらす「クラウド・エコシステム」に言及している。「ここに出現したクラウド・エコシステムがもたらす差異は、従来のものとあまりに異なる。断絶、あるいは文字どおり「クラウディな（曇った）」不確かさ、曖昧さの中で、人々は、このあらたなエコシステムと、自身の身体とが連なる既存の「地面についた世界」、記憶と歴史に満たされ（ときに汚染された）世界と、どのように折り合いをつけていけばいいのか、試行錯誤している」[2)]。

私たちは、自分が生きているところを、従来の世界への感覚にそぐわないというだけでなく、そこから切り離されたものとして感じるようになっている。たしかに、そこにはインターネットの形成発展が深く関係しているのだろう。

これに対して私は、存在の不安が現実の環境の変化に促されていると主張したい。「地面についた世界」のほうもじつは変化しつつあり、この変化ゆえに、存在の不安が高まっているのではないか。二酸化炭素排出、宅地造成、海の埋め立て、ダム建設、都市開発は、地球に対して人間が刻みつけてきた痕跡の蓄積といえるが、その過程で、温暖化、海洋汚染、土砂崩れ、豪雨後の家屋浸水といった事態が発生している。人間生活の条件における、根本的な変化である。哲学者のデボラ・ダノウスキーと文化人類学者のヴィヴェイロス・デ・カストロは、『世界の終わり』で、この現実の変化は近代社会を支える思想的設定の変更を迫るも

のでもあると主張する。

近代の社会的・宇宙論的地層の美しさが、私たちのまさに目の前で破裂し始めている。その大規模な建造物はただその1階部分（経済）を支えにして建っていることができるとかつては考えられていたが、私たちがその土台のことを忘れていたということが明らかになろうとしている。最終審級における決定がじつは最終的なものではないかもしれないことが知れ渡るとき、パニックが発生する[3)]。

ここでは、近代的な思想の到達点の1つであるマルクス主義が、無効になると言われている。かつてカール・マルクスは、政治や文化、宗教といった領域をイデオロギー的な上部構造と捉え、これに対するものとして、経済的な生産様式による最終審級としての下部構造が存在すると主張した。そして、生産様式が資本主義的なものとして成立していることを問題化し、これを崩壊させ、共産主義的な生産様式を現実のものとすることで、現実の人間生活の悲惨は消滅し、皆が尊厳のある生活を送ることができるという見通しを示した。だが、温暖化や海洋汚染にともない、経済的な下部構造のさらなる基底にあるものによって人間生活が支えられていることが明らかになろうとしている。

生の不安が何であるかは、経済的な下部構造を考えるだけではわからない。問われるのは、経済的な下部構造をも規定するさらなる根底である。この根底を、人間が存在しているまさにそこのところとして考えることが求められる。

2

本当のところ私は、どこかにいることで、まともに、現実に生きていることができる。だが、私がいるところは、不安定的で、脆くなろうとしている。重要なのは、この脆さを私が生きているところにおいて感じるだけでなく、脆さが何において、いかにして生じているかを問うことである。そうすることで、この脆くてはかない状態にあるものとしての土台を、人間にも住むことのできる世界として構築するための原理への問いが可能になる。これらが、現代の思想の重要課題となりつつある。

図1　突然壊れてしまう日常生活。2019年10月26日、台風21号の大雨により鹿島川が氾濫し、浸水した千葉県佐倉市の住宅地（写真提供：毎日新聞社）

それは、人間から離れたところにあるものとして、人間がいるところ、世界、ないしは場所を考えていくことである。世界は人間から離れたところにあるが、ただの空白ではなく、現実として、生きることを支える現実の場所として、とりまくものとしての環境として、存在している。

人間の想念から離れているが、人間がいないのではないところとして、地球的な条件を問うとしたら、それはいかなる問いになるか。この課題に先鞭をつけたのが、ティモシー・モートンの2007年の著書『自然なきエコロジー』である。（モートンの思想については、拙著『複数性のエコロジー――人間ならざるものの環境哲学』で論じたので、こちらも参照されたい。）モートンが独自なのは、エコロジカルな変化の時代において、あらためて場所を問おうとするからである。モートンは述べる。「新しい世界観の提案は、人間がいかにしてみずからの場所を経験するかという問題にかかわる[4)]」。

場所への問い。それは、人間が存在しているところとしての場所を問うことを意味する。ただし場所は、ただ人間がいるというだけでない。モートンが言うには、「そこは出来事の起こる余地のある雰囲気ないしは領域であり、密度があって、具現化されていて、緊張の度合いの高められている雰囲気である[5)]」。すなわち場所は、何かが起ころうとしているところとして考えられているが、そこでは、人間の行為、思考、記憶といったものも、起こりうる何ものかとして、潜在的に存在している。そうなると、場所を問うことは、実際に私が身を定め、歩き、ぼんやりと考えごとをしているまさにそこのところにある潜在性の感覚のあり方を問うことであるということになろう。

それは、私たちが没入しているところとへの問い、「ここ」への問いとならざるをえない。この問いは、場所の根拠にかかわる。ただし、モートンの問いは、人間が実際に生活するということに先立つものとしての

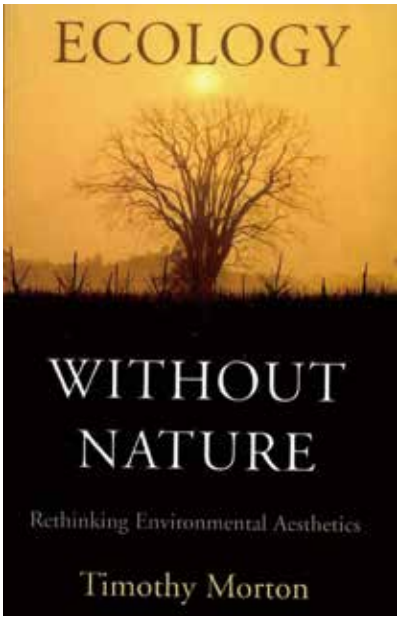


図２　Timothy Morton, *Ecology without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics*（Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2007),

図３　ティモシー・モートン『自然なきエコロジー ―― 来たるべき環境哲学に向けて』篠原雅武訳、以文社、2018年

場所、人間が不在であっても生じうるところとしての場所の感覚へと向けられている。人間が自分のための占有物として囲い込むことで成立する定まったものとして場所を考えるのではない。そう考えるのは誤りだと、モートンはいう。「明確な境界をそなえた実体的な「事物」としての場所なる考えが、それ自体誤りであったとしたら、どうだろうか。すなわち、そもそも場所のようなものがないというのではなく、それを間違ったところにおいて探していたのだとしたらどうだろうか[6)]」。モートンの考えでは、グローバリゼーションに対抗するローカルな場所なる概念も、基本的なところで間違っている。ローカルな拠点を形成し、そこに立てこもることは、ローカリティの固定化に帰着していく。「私たち」のためのものとして占有されたローカルな場所は、自閉的になり、「私たち」ならざるものが入り込む余地はなくなっていく。

場所は、いかなるものであるか。場所は、まずは「ここ」である。自分がまさにいるところとしての「ここ」である。「ここ」は、かならずしも大自然の草原や、古くからある民家でなくていい。大都市の雑居ビルの1室でもいいし、郊外住宅地のワンルームマンションの1室でもいい。モートンがいうには、大切なのは、「ここ」に心身の感覚をむけ、没頭することである。自分をとりまく「ぐるり」のところがどうなっているかを、心身でしっかり感じていくことである。モートンは言う。

「私たちはここへとあまりにも没頭するので、それはつねに崩壊し消滅していく。それは私たちが探すところにはない。ここは問いである[7)]」。

モートンは、「ここ」において、つまりは自分が存在しているところとしての「ここ」において、没頭し、沈潜せよと呼びかける。「ここ」は、家や部屋、街区といった具合に、何重もの障壁で仕切られ、囲い込まれることで成立していると考えることもできるが、「ここ」において没頭し、沈潜するうちに、定められ、境界づけられたあり方で保持されている「ここ」としての場所が崩壊し、消滅していくように感じられてくる。さらにモートンは、「環境は、直接的には示すことのできないもののことである」という。前景にあるものとしては語り得ず、背景的なもの、深層にあるものとして、場所はある。あるいは、「ここ」への沈潜において、私をとりまくもの、何かが今にも起ころうとしている潜在性の感覚が生じるところとしての場所が、発見されると言うこともできるだろう。そして「ここ」は、ただ区切られた複数の諸部分空間のなかの1つであるというだけでなく、「ここ」をも、さらには壁を隔てて隣り合う「あちら」をも超えた拡がりのなかにおいて存在しうるところでもある。「ここ」をも含む拡がりは、「ここ」から逃れたところ、つまりは「ここ」の外部にではなく、私が存在しているところとしての「ここ」の深みにおいて発見される。モートンは、哲学者ジャック・デリダの議論に触れながら、次のように述べる。「ナルシシズムからの本当の逃走はそこへとより深く潜り込むことであり、可能なかぎり多くの他の存在者を含みこむほどにまでそれを（デリダの言葉でいうならば）拡張することであるだろう。身体と、（複数の）心に取り憑かれている物質的な世界のジレンマを強調することで、私たちはエコシステムを、要するに相互連関であるエコシステムを、気遣うことになる[8)]」。

場所は、定まらぬところとして存在する。その定まらなさは、1つには何かが起こりうるための余地を意味している。それは、未来へと開かれていることを意味しているともいえるだろう。ただし、その何かが「ここ」で起こるのだとしても、それはただ「ここ」だけで起こるのではない。「ここ」をもとりまく広がりの領域においてそれは起こる。広がりの領域は、私にはわからない複数の心の住みつくところなのだが、モートンは、これらとの相互連関の領域が、「ここ」の深みにおいて見いだされてくると主張する。相互連関の領域への沈潜は、定まった日常生活領域にとらわれている状態を外れ、外縁に拡がる広大な未知の空間へと分け入ることを意味している。現在優勢な世界像にとらわれているのではみえてこないところ、現在の現実の

図4　篠原雅武『複数性のエコロジー ―― 人間ならざるものの環境哲学』以文社、2016年

際にある定かならざるものの領域、つまりは未来の感覚に触れていくことの可能なミステリアスな領域である。予見ができないというだけでなく不確定的でもあるという意味で、「よくわからないこと」「感じることのできないもの」に触れていくことの可能な場所である。「ここ」の深みへと沈潜することは、「ここ」の定まらなさ、わからなさを受け入れていくことである。それは一方で、私たちが住みつく世界がいつ壊れてもおかしくはない状況になっていることを受け入れることでもあり、そのかぎりでは不安をともなう。だが他方では、場所の不確定的な脆さへと身を開くことは、現在の定まった現実を外れ、超えたところへ向かうことでもある。

3

存在の不安。それは、私がいるところがどうなっているのかわからないという不安である。長谷川の指摘にもあるように、私がいるところは、「クラウド・エコシステム」の「クラウディな（曇った）」不確かさ、曖昧さにより浸透されていく。だが他方で、私が身をおく「地面についた世界」のほうも、その地球的な条件の水準において、不確定で、わからないものへと変わりつつある。私がいるところである現実の人間世界は、温暖化や海面上昇、食糧危機といった状況とともに、そこにいる人間にとって安全でなく、逆に脆くしていくものへと変容していく。2018年の論文「人新世の時間」で、ディペッシュ・チャクラバルティは、人間の存在の不安の理由に関して次のようにいう。すなわち、地理学者のナイジェル・クラークが述べているように、私たちは「想像可能な人間の現前を徹底的に超えた時間と空間とつねに接触することになる」のだが、これは、「人間がただの部分、それも小さな部分でしかない物語」において生きていることを意味している[9]。しかも、繰り返しになるが、人間を超えた拡がりは、安定的なものとして長らく考えられてきた「地面についた世界」において起きている。

モートンは、人間を超えたものとしての世界についての考察を、ハイパー・オブジェクトという考えとともに展開している。ハイパー・オブジェクトはモートンの造語で、「人間とのかかわりにおいて、時間と空間のなかで大規模に撒き散らされている事物」を意味する。具体的には、発泡スチロールやプルトニウムなど、人間の時間感覚と相関しないところにおいて存在しとどまり続ける事物のことだ。「ありふれた発泡スチロールから恐るべきプルトニウムに至る物質は、現在の社会的・生物的な形態よりもはるかに長く存続するだろう。私たちは、何百年、何千年ものことを語っている。今から五百年後にも、コップやテイクアウトに使われる箱のようなスチロール製の物体はまだ残っているだろう。千年前には、ストーンヘンジは存在しなかった[10]」。重要なのは、これらの物体が人間と関わりなく、それでも大規模に撒き散らされ、世界に存在してしまっているということである。人間がすべて消滅しても、プルトニウムは地球において残るかもしれない。

存在の不安の根底には、地面についた世界の変容、人間的な尺度を超えたものへの変容がある。そして世界の変容は、人間のあり方を脆くしていく。それにもかかわらず、世界の変容は見過ごされている。世界の危機的な変容が続くなら、そこはもしかしたら、本当に人間不在の世界になるのかもしれない。私たちは全員死んでいくだろう。2010年代半ば以降、夏の温度は上昇しているし、豪雨の被害は世界化している。たとえば日本でも、2018年の西日本では、豪雨で町が崩壊した。2011年の大地震と津波も、地面についた世界が人間的な尺度をこえた拡がりのなかにあることに気づかせ、そのなかでの人間の脆さを自覚させたものとして考えることもできる。

注

1）長谷川祐子『破壊しに、と彼女たちは言う ―― 柔らかに境界を横断する女性アーティストたち』東京藝術大学出版会、2017年、242頁。
2）同書、242頁。
3）Déborah Danowski and Eduardo Viveiros de Castro, *The Ends of the World*, trans. Rodrigo Nunes（Cambridge, Mass: Polity Press), 15.
4）Timothy Morton, *Ecology without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics*（Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2007), 2.（ティモシー・モートン『自然なきエコロジー ―― 来たるべき環境哲学に向けて』篠原雅武訳、以文社、2018年、4−5頁）。
5）Ibid, 93.（同書、182頁）。
6）Ibid, 170.（同書、329頁）。
7）Ibid, 175.（同書、338頁）
8）Ibid, 184.（同書、356頁）
9）Dipesh Chakrabarty, “The Anthropocene Time,” *History and Theory* 57.1（March 2018): 5-32（29）.
10）Timothy Morton, *The Ecological Thought*（Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2010), 130.

芸術の持続可能性

吉岡　洋（京都大学こころの未来研究センター特定教授）
YOSHIOKA Hiroshi

1956年京都生まれ。京都大学文学部哲学科卒業、同大学院博士後期課程単位取得満期退学（美学美術史学専攻）。甲南大学文学部教授、情報科学芸術大学院大学（IAMAS）教授、京都大学大学院文学研究科教授等を経て、現在、京都大学こころの未来研究センター特定教授。専門は美学、現代思想、情報文化論。著書に『情報と生命―脳・コンピュータ・宇宙』（共著、新曜社、1993年）、『〈思想〉の現在形―複雑系・電脳空間・アフォーダンス』（講談社、1997年）、編著に『光速スローネス：京都ビエンナーレ2003』（京都芸術センター、2004年）、『岐阜おおがきビエンナーレ2006 ― じゃんけん：運の力』（情報科学芸術大学院大学、2007年）、『文学・芸術は何のためにあるのか？』（東信堂、2009年）、訳書に『第四の境界―人間－機械進化論』（ジャストシステム、1996年）、『反美学―ポストモダンの諸相』（共訳、勁草書房、1987年）、『情報様式論』（共訳、岩波書店、2001年）など。「京都ビエンナーレ2003」、「岐阜おおがきビエンナーレ2006」など展覧会企画にも携わっている。

はじめに

「持続可能性」というテーマについて、美学芸術学の視点から記述を試みたいと思う。まず、（1）自然環境に着目する美学の新たな分野である「環境美学」について述べ、次に（2）自然や環境をテーマとする現代美術について概観し、（3）「持続可能性」をめぐる最近の社会状況について美学的見地から考察した後、「持続」に関わる芸術作品の実例を紹介して結びとしたい。

1　環境美学

現在、美学において「持続可能性」というテーマに最も関係の深い研究領域は「環境美学」と呼ばれる分野であろう。環境美学の研究は、欧米と比較すると日本においては必ずしも盛んとは言えず、美学会における研究発表や論文の数もけっして多いとはいえない。だが、20世紀後半以来拡大してきた環境美学への関心は、美学という学問そのものの成立や歴史に深く関わるという側面もあり、考察に値すると思われる。

美学（aesthetics）は18世紀ヨーロッパに起源を持つ学問であるが、美学の成立したこの時期、その主たる関心の対象は芸術にではなく自然にあった。芸術作品の経験ではなく自然美の観賞が、18世紀美学のモデルであったと言える。シャフツベリ（The third Earl of Shaftesbury, 1671-1713）やハチソン（Francis Hutcheson, 1694-1746）の思想において、自然美はいわば道徳的善とパラレルに考えられていた。すなわち人間精神は自然美を直感するように、道徳的善を直観するということである。「美」と「善」とは隣同士にあったのである。

直感的（“aesthetic”――「美的」「感性的」とも訳される）とは、規則や概念を前提せず、こころの内部から自発的に発生する感情を言い表す言葉である。これがカント美学における美の「無関心性（“Interesselosigkeit”）」につながってゆくのだが、ここで重要なことは、芸術作品における美的経験が、自然美の経験を基礎としているということである。美学において「自然」と「芸術」はいずれも最重要概念であるが、二者の関係は対等ではなく、18世紀においては「芸術」は「自然」モデルに基づいてはじめて成立する概念であった。このことはヨーロッパにおける古典的な芸術観――「芸術とは自然の模倣である」――とも一致するものであった。

19世紀において、いわばこの関係は逆転する。ヘーゲル美学のもたらした最大のインパクトのひとつは、自然は芸術の起源というより、芸術の不十分な前段階であるという主張である。つまり芸術が自然を模倣するのではなく、むしろ自然が芸術として現れる、いわば「自然が芸術化する」ということである。こうした考え方が重要なのは、それが哲学的命題として議論されただけではなく、産業革命の進展とともに変質してゆく一般的な自然観、あるいは広い意味でのロマン主義的な自然観の特徴を言い当てているからである。芸術モデルが優位になったこと、いわば自然が芸術の中に入ってしまったと言

ってもいいだろう。今日でも、私たちは自然の風景を前にして「絵のように美しい」などと呟いたりする。美的経験を言い表すこうした常套句の中に、そうした古典美学の歴史的転倒の名残りを見出すことができる。

環境美学とは、このように芸術化された自然に対して、自然美の経験を回復しようとするものとして考えられる。それは一方では、(A) 19世紀以来のこうした芸術中心主義に対する理論的な反省として、他方では、(B) 20世紀後半以降増大してきたエコロジーや環境問題による動機付けから、理解することができる。

さて、本論では環境美学の多様な議論について詳述する余裕はないが[1)]、古典的美学との関係において軸となる問題点をひとつだけ指摘しておきたい。それは環境美学と、先述した美的経験が法や概念に媒介されることなく成立すること(「無関心性」)との関係である。

持続可能性は私たちの生存に関わる条件であるから、すべてに優先する概念であるように思える。したがって環境美学がそうした持続可能性への関心を第一に置くとすれば(つまり上の(B)の側面が強くなった場合には)、それは美的経験は概念に媒介されないという前提を棄却せざるをえない。だが美的経験の無媒介性を捨て去ることは、本質的には美学それ自体の否定となる。だから環境美学が「美学」であるためには、むしろ(A)を徹底すること、つまり美の無媒介性を維持しつつ、それに結びついていた主観主義や人間中心性主義を乗り越えて、それに新たな意味づけを与える必要があるだろう。

2　環境と芸術

では次に、現代美術の作品に着目した場合、自然環境や持続可能性に関わる意識はいつ、どのように現れて来たのかを考えてみたい。

美術はつねに自然を描いてきたし、先述したように西洋美術の歴史においては19世紀まで、芸術とは「自然の模倣」であるとする通念が根強く続いていた。しかし芸術が意識的に自然を「地球環境」として捉えはじめたのは、1970年以降のことだと言っていいであろう。古典的美術にとって、自然とは描くべき対象のひとつでしかなかった。また20世紀の前衛芸術においては、たしかに自然環境の中に美術作品の素材や展示の場を求める動きも出てきたが、それは今日のような、環境そのものへの関心からではなかった。1960年代後半アメリカの美術家を中心に始まった「ランドアート」や「アースワーク」「環境芸術」と呼ばれる一連の傾向では、自然物を用いた野外での大規模な美術表現が試みられたが、それらは環境それ自体に配慮するものではなかったのである。

図1　ロバート・スミッソンの《スパイラル・ジェティ》、米国ユタ州のグレートソルト湖で6500トンの岩、土砂、塩を運び込んで造られた(写真はwikipediaより)

たとえば、アメリカの美術家ロバート・スミッソン(Robert Smithson, 1938-1973)が1970年に制作した《スパイラル・ジェティ(Spiral Jetty)》は、ランドアートの代表的な作品である。これは、米国ユタ州のグレートソルト湖に大量の岩、土砂、塩を運び込んで作られた、長さ457m、幅4.57mの渦まき状の人工的地形である。スミッソンのこうした作品は、ヨーロッパの伝統的美学における自然観、芸術化された自然に対して意識的な反逆を試みるものであったが、そのようにして作られた作品が実際に周囲の自然環境にどのような影響を及ぼすのか、といったことには無関心なものであった。

環境保護という観点から大きな議論を引き起こしてきた美術家のひとりが、ブルガリア出身のアメリカ人美術家クリスト(Christo, 1935-)である。パートナーのフランス出身のアメリカ人美術家ジャンヌ=クロードと共に制作した作品が世界各地で話題を呼んできた。たとえば1983年に制作された《囲まれた島々(Surrounded Islands)》は、マイアミのビスケイン湾にある11の島の周囲の海を、合計60万平方メートルに及ぶピンク色のポリプロピレンの布で2週間にわたって覆うというものである。当然ながらこうした作品は自然環境を護るどころか海の生態系を破壊するものだという批判も予想されたことから、クリストたちは40万ドルを費やして環境テストを行い、許可申請や公聴会に備え、許可を獲得した。その後も野生動物保護団体からの抗議があり、団体にプロジェクトの進行を監視する権利とボートを与えることになった。また1985年の《包まれたポン・ヌフ》(The Pont Neuf Wrapped)は、セーヌ川に架かる橋を4.2万平方メートルのナイロンで覆うものであり、当時パリ市長であったジャック・シラクとの交渉を含め、実現に10年間を要したと言われる。

図２　クリストとジャンヌ＝クロード《囲まれた島々、フロリダ州グレーターマイアミ、ビスケン湾、1980-83》　マイアミのビスケイン湾にある11の島の周囲の海をピンク色のポリプロピレンの布で２週間にわたって覆う

©Christo and Jeanne-Claude: Surrounded Islands, Biscayne Bay, Greater Miami, Florida, 1980-83, Photo: Wolfgang Volz/laif/amanaimages

これら「ランドアート」（美術家本人はこの呼称を拒否する場合が多い）は、自然環境や巨大建造物を美術作品の素材あるいは場として利用するものではあるが、自然や環境がその作品の主題となっているとは言い難い。それに対して環境が美術作品のテーマと大きく関わってくるのは、たとえばドイツの美術家ヨーゼフ・ボイス（Josef Beuys, 1921-1986）の1970年代以降の活動にみられるだろう。とはいえここでも、作品と自然保護やエコロジーといったテーマとの関係は直接的なものではない。《私はアメリカが好き、アメリカは私が好き》（I Like America and America Likes Me, 1974）では、ボイスはニューヨークの空港から救急車によってウエストブロードウェイのギャラリーに搬送され、そこに設置された檻の中で3日間、野生のコヨーテと共生するというパフォーマンスを行った。もちろんコヨーテが象徴する文明化以前のアメリカの自然との共生といった解釈は可能だが、この作品には呪術的な側面もあり簡単には割り切れない。美術と環境問題との関係を考えるとき、ヨゼフ・ボイスの存在は現在も根本的な問いを投げかけていると思う。

だが1980年代以降になると、環境問題はより直接的な形で美術やデザインの世界に入り込んできたように思われる。その現れのひとつは、スウェーデンの医師カール・ヘンリク＝ロベールの思想に基づいて1989年に発足した国際組織「ナチュラル・ステップ（the Natural Step）」である。そこから「持続可能性のためのデザイン」（Design for Sustainability）という考えが生まれた。また「サスティナブルアート」という言い方も、ロンドンのキュレータであるMaja and Reuben Fowkesの活動を通して拡大してきた。今日では、たとえそれらに直接的影響を受けていなくとも、日本各地で開催されている芸術祭、とりわけ「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」や「瀬戸内芸術祭」のような催しにおいては、エコロジーや持続可能性についての意識や言及を、多くの参加作品から読み取ることができる。

3　持続可能性の美学

ここでもう一度美学的な観点に戻って、「持続可能性」の理論的な意味ではなく、その直感的な側面、つまりそれが今日どのように美的に経験されているかを考えてみたい。

2019年9月23日、ニューヨークで「国連気候行動サミット」が開催された。これに先立って、二酸化炭素排出による地球温暖化に関して、政治・経済的な指導者たちの無策に抗議するデモが、子どもや若者たちによって全世界的規模で行われた。日本では主要都市を中心に合計数千人程度にとどまったようだが、9月20日の『ニューヨーク・タイムズ』によれば、ベルリン、メルボルン、ロンドンでは約10万人が参加したとみられ、ニューヨークでも約6万人がマンハッタンの通りを練り歩きながら「あなたたちには未来があった、それなら私たちにもあるべきだ（“You had a future, so should we.”）」と訴えたという。

このメッセージから分かるように、この運動は地球環境に関するアピールであると同時に、大人たちの無責任さに対する若者たちの抗議という側面もある。若者たちによる抵抗運動がこれほど広く大規模に行われたのは、1960年代の対抗文化運動以来かもしれない。だが現代の若者たちの運動を特徴づけているのは、新たな価値観の主張というよりも、開発や経済成長を躍起になって追求してきた年長者たちが、悪化した地球環境という負債を自分たちに残して去ってゆくことに対する憤りである。そこには共感できる面もあるが、同時にそうした世代間の分断や反目は、「持続可能性」の本来のイメージにはそぐわないとも感じられる。

そこで「持続可能性」はどんな時間スケールで考えられているのだろうか？　それは現実には世代を単位とする時間の長さ、数十年から数百年といったオーダーではないかと思われるが、同時に「持続可能性」という概念は、何万年あるいはそれ以上の悠久の時間に結びついているようにも響く。その点は、最近話題に

図３　嶋本昭三による《平和の証》　コンクリートの画面の上に毎年瓶投げを行い、それを百年続ける、百年続くことが平和の証となるという作品。写真は2019年　©shimamotoLAB Ink.

なっている「人新世（anthropocene）」という概念にも共通している。地球にとって、人類文明とはつい最近出現した（そしておそらくはまもなく消え去ってゆく）ひとつのエピソードにすぎないだろう。それでも私たちは自分たちの文明活動が、地質学的な時間スケールにおいて地球環境を変化させるものとして、考えたがっているようである。このように、人間的サイズの世界における出来事を宇宙的スケールで表象する傾向は、美学史上では「崇高（sublime）」の概念、あるいとそれと結びついたロマン主義的態度に共通するものである。

もちろん現代の環境思想は最新の科学的知識を前提しており、19世紀的なロマン主義の自然観と異なるものであることは当然である。しかし美学的観点からすれば、環境思想は広い意味におけるロマン主義以外のものではありえない。広い意味のロマン主義とは、人間的認識の限界に由来する自然な思想傾向であって、けっして克服すべき旧弊や誤謬といったものではない。

おわりに

最後に芸術表現それ自体の中に「持続可能性」のイメージを探る実例を紹介して結びとしたい。ここでとりあげたいのはふたつの作例である。ひとつは日本の美術家嶋本昭三（1928-2013）による《平和の証》、もうひとつはアメリカの音楽家ジョン・ケージ（1912-1992）の《Organ^2/ASLSP》と呼ばれる作品である。

《平和の証》は、嶋本が1950年代から続けてきた「瓶投げ」パフォーマンスによる絵画制作が元になっている。絵具の詰まったガラス瓶を布や板などの支持体に向かって投げ、瓶の破壊と絵具の飛散によって描くという方法である。この方法自体は前衛美術のものであり、持続可能性と直接関わるわけではないし、それは平和的でも環境保護的でもない。だが《平和の証》は、新西宮ヨットハーバーに神戸市から土地を提供された作家が、同じコンクリートの画面の上に毎年瓶投げを行い、それを百年続ける、百年続くことが平和の証

図４　ジョン・ケージ《Organ^2/ASLSP》が進行するブキャルディ廃教会（写真はwikipediaより）

となるというものである（現在38年目）。

ジョン・ケージの作品もまた、持続をテーマとするものである。「ASLSP」とは“as slow as possible”という意味で、これはドイツのハルバーシュタットにあるブキャルディ廃教会に設置された特製のパイプオルガンで現在演奏中の、演奏時間が639年かかるオルガン曲である。639年とはこの教会にかつて最初のパイプオルガンが設置された1361年からこのプロジェクトが提案された2000年までの時間によって決めらめた。2001年に演奏が始まり、終了するのは2640年9月5日とされている。

これらの作品は、いわば作品みずからが「持続」することによって「持続」を表現するものである。芸術作品の持続というと、すでに完結した傑作を保存して未来に引き渡すというイメージを持つ人もいるかもしれないが、完結した作品をアーカイヴすることは「持続」ではない。環境の「持続可能性」の場合も、かつてどこかに存在した理想的自然環境をなるべく壊さず保存する、といったことではありえないだろう、と私は考える。

注

1）　環境美学の具体的概観を得たい人は、スタンフォード大学が提供しているオンラインの哲学辞典における「環境美学」の項目を参照されたい。https://plato.stanford.edu/entries/environmental-aesthetics/

一般公募プロジェクト

日本における“うつ病”の説明モデル
── 新聞記事データベースの内容分析による文化的産物（Cultural Products）の検討

Andrew Ryder（Associate Professor of Concordia University）＋春原桃佳（Concordia University 博士課程）
（担当教員：内田由紀子、畑中千紘）

■研究の背景と目的

世間一般の日本人は精神疾患を抱えている人やその状況をどのように解釈し、説明するのだろうか？　人はそれぞれ、病気の発症の原因について、一定の思考パターンにより理解しようする“説明モデル”をもっているとされる（Kleinman, 1980）。これまで、欧米の研究では、脳や生物学医学的な問題が原因であると捉える「医療化」、トラウマやこころの傷が原因と捉える「心理化」、患者個人に依拠する能動的な選択やもともとの性格、モラルのなさが要因とする「モラル化」の3つの説明モデルが存在し、特に「医療化」が主要なモデルであると言われてきた（Haslam, 2003）。しかし、これらの説明モデルは欧米で提唱された理論的枠組みであり、精神病理に関する知識や考え方はそれぞれの文化で共有された価値観や歴史的背景に大きく影響されると考えられる。ある特定の文化を持つ人々が互いに共有し合う意味体系や文化的習慣・規範・制度は、総じて文化的産物（Cultural Products）と呼ばれ、私たちの身の回りにある新聞・雑誌などの資料を用いて文化的産物を検討することができる（Masuda, 2014; Morling & Lamoreaux, 2008）。本研究では、日本人の“うつ病の説明モデル”に着目し、疾患の原因をどのような文脈でどのように解釈・説明するのかの特徴を明らかにすべく、新聞記事の内容分析によって探索的に検討した。

■研究の方法・内容

Factiva データベースで1999年から2002年まで、2015年から2018年までのそれぞれ3年間の全国紙（読売、朝日、毎日、産経、日経）に掲載された朝刊・夕刊全記事を対象とし、“うつ”、“うつ病”、“抑うつ”という用語を含むものを抽出し、分析対象とした。先行研究において、文章やテキストデータを質的にかつ系統的に分析することが可能とされている内容分析によりデータをコード化した。コーディングは各記事に対し、まずWongら（2010）の分類を参考にカテゴリーを抽出し、コード表を作成した。それらを3つの既存の説明モデル：「医療化」、「心理化」、「モラル化」、とそれらに当てはまらない「その他」でコード化した（表）。統計処理にあたり、3つの説明モデルについてχ2検定を行った。

表　コード表

説明モデル	テーマ	カテゴリー
心理化	学校	いじめ
		受験
	家庭	子育て
		妊娠・出産
		介護
	仕事	過労
		就職・転職
	環境の変化	引越し
		退職・引退
医療化	生物医学的な要因	神経
		遺伝
		加齢
		病気
		ホルモン（妊娠・出産・更年期）
モラル化	性格・個人の特性	性格（頑固、打たれ弱い）
		気・意思が弱い
社会化	経済	不景気
		雇用
	制度・政策	政策・規制
		労働組合
		公害
	慣習	マスメディア
		社会的圧力

■平成30年度の研究成果

予備抽出で得た200件の記事のデータを報告する。まず、1999～2002年、2015～2018年の比較では「心理化」のみ有意な差がみられ、1999～2002年は2015～2018年より、「心理化」する傾向がより強かった（図）。説明モデル別にみてみると、1999～2002年では「医療化」、「心理化」、「モラル化」の順で、2015年～2018年では「心理化」、「医療化」、「モラル化」の順となった。また、既存の説明モデルには当てはまらない「その他」には社会的要因をうつ病の原因と捉える記事が多数抽出され、これらを新たに「社会化」と分類した。

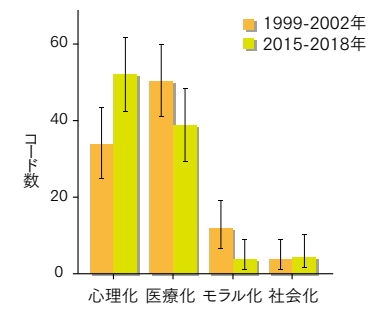


図　説明モデルの比較

■考察

1999～2002年と2015～2018年において「医療化」と「心理化」の順位が逆転し、日本人のうつ病に対する考え方や解釈が変化した可能性が示された。1999年は日本で最初のSSRI（選択的セロトニン再取り込み阻害薬）という抗うつ薬が承認・薬価収載された。この年は製薬会社がうつ病は「こころの風邪」とキャンペーンを展開し、抗うつ薬市場が急成長し、日本の精神医学においてターニングポイントとなる年であったとされている。以後、うつ病の概念が社会に浸透すると同時に多様化・複雑化し、近年は治療のオプションも薬物療法以外にも心理療法など心理的介入が注目されるようになった背景も影響していることが考えられる。社会的要因に依拠する解釈が抽出されたことは、日本と欧米では精神病理に関する解釈や認識が異なることが文化的産物に反映されていることを示唆する。

■今後の展開

今後は発達障害、統合失調症、依存性、ひきこもりなどうつ病以外の精神疾患についても説明モデルの検討を行う予定である。また、比較文化研究を行うために欧米の新聞記事も分析対象にし、検証を重ねていく必要がある。

一般公募プロジェクト

■ 一般公募プロジェクト・アブストラクト

カップルにおける対人的感情制御の文化比較：共通性と差異の検討

Michael Boiger （担当教員：内田由紀子）

本研究は夫婦（カップル）がどのように意見の不一致を乗り越えるのかを、相手に対する感情制御の側面から検討しているものである。ベルギー（58組のペア）と日本（80組のペア）の夫婦（カップル）が、問題について話し合う様子をビデオ撮影し、その際に表出される感情をコード化して分析した。主な結果として、日本においては互いに異なる意見を持ちながらも、相手に対する共感も示しつつお互いの状態を見計らって感情を調整する手法が用いられていた。これに対し、ベルギーでは怒りがストレートに表出され、互いに意見をぶつけ合い、交渉しようとする手法が用いられていた。これらの結果は文化による感情制御手法の違いについてのこれまでの研究結果と一致するものであった。現在はフォローアップ調査として実施された「夫婦間の問題解決に関するグループ・インタビュー」での内容の分析を継続している。

才能や努力に関するフィードバックによってもたらされる感情と動機づけ

Christina Brown （担当教員：内田由紀子、上田祥行）

物事に取り組もうとする意志（動機付け）は様々な要因に左右される。なかでも、「才能」や「努力」といった要因は大きな影響を持っている。日本では、大人も子どもも「努力」が評価されがちだが、逆にアメリカでは「才能」が評価されることが知られている（Heine et al., 2001; Lockhart, et al., 2009）。われわれの研究プロジェクトは、「努力」や「才能」によって課題が成功したときに、日本人やアメリカ人がどのように振る舞うのか、特に、このようなフィードバックを受けた後に難しい課題をどれくらい続けようとする動機づけが生じるかを検討するものである。現在、日本とアメリカの両国でデータを集めている。このプロジェクトの重要な意義として、努力や才能といった評価が動機づけにもたらす影響を解明することができれば、これらを子育てや教育などの場面に応用できる可能性があることがあげられる。

ブータンにおけるチベットの政治倫理学文献の研究

Miguel Álvarez Ortega （担当教員：熊谷誠滋）

インドにおいては古くから政治倫理学文献が作成された。それらのいくつかはチベットに伝えられ、チベット語に翻訳されている。またチベットにおいても、9世紀以降、多くの政治倫理学文献が作成された。本プロジェクトでは、チベットにおいて13世紀前半にサキャ・パンディタ（1182-1251）が著した政治倫理学文献と、15世紀前半にポドン・パンチェン（1376 -1451）が著した政治倫理学文献を比較分析し、結果、後者が前者から多くの引用をしつつも、独自の論を展開していたことが明らかになった。さらに、テンジンチューゲルが1729年に作成したブータンの法律文書にも、いくつかの偈頌が引用されていることが判明した。結果、チベットを中心として、ブータンを含むヒマラヤ文化圏全般で、共通する政治倫理思想が存在することが、本研究プロジェクトを通じて明らかとなった。

Interpersonal Emotion Regulation in Couples: Cultural Differences and Similarities

Michael Boiger（Assistant Professor of University of Amsterdam）

■Purpose of this study

From time to time, romantic partners face disagreements: One partner wants to buy a new family car, the other would rather save the money; one partner wants to spend more time together, the other struggles with being available. How do couples handle these disagreements and the feelings that come with them? While psychologists and relationship researchers know much about how "Western"（primarily European American）couples handle these issues, little is known about the rest of the world. To get a better understanding of the range and variability of relationship dynamics, we have been studying what happens during couple disagreements in Japan and Belgium for the last years.

What has clearly stood out from past research is the pivotal role of emotions for relationships（e.g., Gottman, 1994）. While this may be true universally, we have proposed that which emotions are in the foreground, how they are handled, and what effect they have on the relationship may differ between cultures. We found support for this idea in previous research with 80 Japanese and 58 Belgian couples who discussed a disagreement in the lab. After the discussion, partners separately viewed recordings of their interactions and indicated their emotional experience. We found that a balance of positive and negative affect as well as the experience of empathy characterized Japanese disagreements; in contrast predominantly positive affect and the experience of anger are common and functional in Belgian couples（Boiger, Kirchner, Schouten, Uchida, & Mesquita, 2019; Kirchner et al., 2019）. These different emotional patterns appear to reflect and support the relational concerns of interdependence and other-focus in Japan and autonomy and self-focus in Belgium.

■Study 1

The aim of the present studies was to gain a better understanding of how couples achieve these different emotional patterns. Our overarching idea was that partners use interpersonal emotion regulation（IER）strategies to move them and their partner away from difficult and towards desirable emotions during disagreements. In Study 1, we examined if there are indeed observable cultural differences in IER strategies that may account for the observed differences in emotions. To this aim, we used the recordings of the disagreement described above and coded them for each partner's IER strategies. We coded IER strategies using an established coding system, called the SPecific AFFect coding system（SPAFF, Coan & Gottman, 2007）. 2 Japanese judges, trained to use SPAFF, coded the Japanese couple interactions and 3 Belgian judges, similarly trained, coded the Belgian couple interactions. Coders tracked any non-codable IER behaviors to account for additional culture-specific codes. First analyses revealed that Japanese couples used more IER strategies that are geared towards validation and interest. For example, couples agreed with and showed interest in each other while maintaining opposing opinions. Belgian couples, in comparison, used more assertive strategies. For example, they directly expressed and actively negotiated opposing opinions.

■Study 2

In Study 2, we followed up on these findings by conducting focus groups with experts and married individuals in Japan and Belgium. The aim of these focus groups was to tap directly into people's cultural ideas and perceptions about how couples in their culture（as opposed to another culture）deal with disagreements. To engender discussion, we first showed each focus group a 15-minute video of Japanese and Belgian couple interactions taken from our previous research（see also Tobin & Hsueh, 2007）. Participants were then invited to discuss both their perception of the videos and their own opinions about, among others, strategies for interpersonal emotion regulation during disagreements. The interviews have been transcribed and are currently being analyzed using thematic analysis.

References

Boiger, M., Kirchner, A., Schouten, A., Uchida, Y., & Mesquita, B.（2019）. Different bumps in the road: Emotional attractor states during conflict interactions in Belgian and Japanese couples. *Manuscript Submitted for Publication*.

Gottman, J. M.（1994）. *What predicts divorce?*（3rd ed.）. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Kirchner, A., Boiger, M., Uchida, Y., Higuchi, Y., Uchida, A., & Mesquita, B.（2019）. The role of the positive-to-negative affect ratio in Belgian and Japanese couples. *Manuscript in Preparation*.

Tobin, J., & Hsueh, Y.（2007）. The poetics and pleasures of video ethnography of education. *Video Research in the Learning Sciences*, 77–92.

一般公募プロジェクト

Emotions and Motivation Following Feedback about Natural Talent or Hard Work

Christina Brown (Associate Professor of Arcadia University)

■Purpose of this study

In an ideal world, it would be easy to feel motivated to persist on difficult tasks. In reality, motivation is influenced by factors such as enjoyment of the task, wanting to master a skill, a desire for rewards, or fear of punishment. One possible factor that could influence motivation is whether achievements are believed to be caused by talent or hard work.

These beliefs can vary from person to person, but they also differ by culture. Previous research has found that Japanese adults and children value effort relatively more than Americans do, while Americans tend to value talent (Heine et al., 2001; Lockhart, et al., 2009).

Christina Brown, Yukiko Uchida, and Yoshiyuki Ueda are conducting an experiment to understand how Japanese and Americans react when they believe they were successful because of their own effort or talent. Specifically, do people feel more motivated to persist on a difficult task if they believe their prior achievements on the same task were caused by their own efforts, or if they were caused by their own talent?

■Methods

In an experiment designed to answer this question, Japanese and American college students (participants) are told that the researchers are studying their "cognitive flexibility skill." The researchers are actually studying the students' motivation, and "cognitive flexibility skill" is a story intended to make the participants care about the experimental tasks. First, the participants complete two mirror tracing problems at a computer. In these problems, participants try to copy a simple drawing using a computer mouse, but the line that appears as they draw moves in the opposite direction of their hand movements. This is a challenging task, but people can improve if they practice these problems repeatedly.

After finishing two problems, the computer shows participants feedback about their performance. Participants in a control group are only told that they did well. Participants in a "talent" group are told they did well because they have a talent for it, whereas participants in an "effort" group are told they did well because they worked hard. This information is actually fake, but participants are told this to test how their beliefs influence motivation.

Next, while participants are waiting for the experimenter to prepare the next task, they are allowed to use the computer freely. They have the option to practice more mirror tracing problems, or they can do something else (e.g., use the Internet).

The researchers are measuring whether participants choose to continue practicing mirror tracing problems. The prediction is that Japanese students will be more motivated to continue when their past effort was emphasized, whereas American students will be more motivated when their talent was emphasized.

■Progress

Data is currently being collected in both Japan and the U.S., and the results of the experiment will be shared widely. Importantly, if there are cultural differences in reactions to beliefs about talent and effort, this would suggest that effective methods for increasing motivation depend on culture (e.g., parenting style, societal norms and values). This can be useful for parents, educators, and supervisors who want to increase motivation in a positive way.

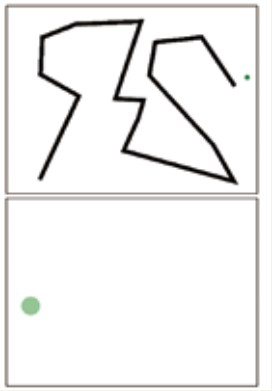


Figure. Sample mirror tracing problem. The participant places the mouse cursor in the bottom box and tries to copy the figure in the top box. When the participant moves the mouse, a drawing line appears in the top box. The drawing line moves in the opposite direction of the participant's mouse movements, like a mirror reflection.

Reference

Heine, S. J., Lehman, D. R., Ide, E., Leung, C., Kitayama, S., Takata, T., & Matsumoto, H. (2001). Divergent consequences of success and failure in Japan and North American: An investigation into self-improving motivations and malleable selves. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 4, 599-615.

Lockhart, K. L., Nakashima, N., Inagaki, K., & Keil, F. C. (2009). From ugly duckling to swan? Japanese and American beliefs about the stability and origins of traits. *Cognitive Development*, 23, 155-179.

一般公募プロジェクト

Tibetan Nītiśāstras in Bhutan: Ethical and Political Philosophy

Miguel Álvarez Ortega (Associate Professor of University of Seville)

■Background

Nītiśāstras (Tibetan: lugs kyi btstan bchos) are treatises of proper behavior usually addressed to kings, and hence serving as"speculum principis." The Tibetan scholarship translated such treatises from Sanskrit and also created their own compositions from the 9th century up to the 1950s. Nītiśāstras spread throughout the Himalayan region (e.g. Bhutan) and became very popular. They are usually interpreted as compedia of "folk wisdom", considered a minor genre aimed at educating unlearned people. Their political and social philosophy is still not properly explored; neither is their presence in legal texts fully understood.

■Goals

The project aimed at exploring the socio-political and ethical discourse of the most relevant native Tibetan Nītiśāstras in the middle (pre-Gelugpa) period: *Sakya Legshe* (XIIIth century), composed by Sakya Paṇḍita Kunga Gyeltsen (1182-1251) and *An Examination of fools* (XVth century), composed by Bodong Panchen Chogle Namgyal (1376-1451). It also proposed the consideration of their external influence by focusing on their relationship with "native Bhutanese" Nītiśāstra and with legal texts (Tibetan and Bhutanese).

■Methodology

The methodology employed was threefold, comprising a:

Philological approach: Transcription, edition and translation of *An Examination of fools;* comparison: *Sakya Legshe* vs *An Examination of fools* & Indian *nītis* (correlations); search and study of "Bhutanese" nītiśāstras;

Philosophical approach: Systematic analysis of content: cross-cutting themes, main positions, exceptions;

Legal approach: identification of parallels in Tibetan and Bhutanese legal documents

■Results

Textual analysis resulted in the identification of parallelisms (borrowed verses) in Bodong Panchen's *An Examination of fools* (484 stanzas) in both *Sakya Legshe* and in the Tibetan translations of Sanskrit texts (*Prajñāśataka, Jantupoṣaṇabindu, Masūrākṣa's Nītiśāstra, Gāthāśataka*). A native Bhutanese Nītiśāstra (*skye bo lugs kyi bstan bcos dpag bsam myu gu*, XXth century) was located in the British Library. A primary philological analysis shows that it consists of 35 stanzas (7 –syllable lines) of an irregular number of lines and also that is a completely original composition (no apparent parallels).

Regarding the socio-political discourse embedded in *An Examination of fools* and *Sakya Legshe,* the research has shown three main results:

a) certain themes can be identified as recurring and hence prevailing: the topic of qualities and characters; the topic of Merit, Karma and Wealth (to explain and legitimize aristocracy); the topic of Rulers and officials (showing a pragmatic approach to kingship); the topic Soteriology (as the ultimate goal).

b) There is a principle / exception organization of elements, according to which, individuals are determined by social group (principle), and there is only very limited space for social mobility (exception).

c) The underlying rationale of the texts is the legitimation & preservation of a conservative casteist social system in which the King-subjects relationship is mutually beneficial but there is no room for criticism or *ius resistendi*.

This proves, that contrary to common opinion, Tibetan Buddhist nītiśāstras do not represent a break but a continuation of the Brahmanical political tradition.

Finally, several legal texts using verses borrowed from nītiśāstras could be identified:

khrims yig zhal lce bco lnga pa (XV c.); *Glang dor gsal bar ston pa'idrang thig dvangs shel me long nyer gcig pa* by (1681); *Bka' khrims* (XVIII c.) 1986. Bstan 'dzin Chos rgyal's Bhutan Legal Code of 1729.

河合俊雄

論文

Kawai, T., "Transformation of East Asian spirituality: with the reference to Eranos lectures,"『身心変容技法研究』, 2018, (7), 267-272（英語論考）.

粉川尚枝，松岡利規，田中康裕，河合俊雄，畑中千紘，梅村高太郎．「夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連」『箱庭療法学研究』, 2018, 31 (2), 3-17.

著書

Kawai, T., "The loss and recovery of transcendence: perspectives of Jungian psychology and the Hua-Yen School of Buddhism," In Cambray, J., & Sawin, L. (Eds). *Research in Analytical Psychology: Applications from Scientific, Historical, and Cross-Cultural Research*. 2018.5, 197-209. Routledge.

河合俊雄『當村上春樹遇見榮格：用心理學解析故事背后的智慧與力量』北京聯合出版公司, 2018.4.1.（※中国語翻訳版）

編集

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第20回「仏教と古層の論理」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (85), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第21回「憑依と解離性障害」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (86), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第22回「解離と現代性」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (87), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第23回「解離と古層の交錯」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (88), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第24回「夢とこころの古層」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (89), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第25回「夢と歴史性」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (90), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第26回「中世と夢」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (91), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第27回「現代の夢と解釈」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (92), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第28回「現代の夢と共有」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (93), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第29回「現代の夢と異界」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (94), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第30回「精神病とこころの古層」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (95), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第31回「うつ病とこころの古層」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (96), 2-3.

河合俊雄　連載「こころの最前線と古層」第32回「病態水準と境界」,『究』ミネルヴァ書房, 2018, (97), 2-3.

谷川俊太郎，河合俊雄（編）『臨床家 河合隼雄』岩波現代文庫, 2018年（復刊）.

中沢新一，河合俊雄（編）『思想家 河合隼雄』岩波現代文庫, 2018年（復刊）.

河合隼雄著，河合俊雄（編）『河合隼雄語録――カウンセリングの現場から』岩波現代文庫, 2018年.

学会発表（講演・ワークショップ等含む），主催等

Kawai, T., "The tension and paradox between determinate and indeterminate state: clinical, social and cultural aspects."「夢，或者黎明」(Taiwan, China) 2018.4.14-15.

Kawai, T., "The Prevalence of Autistic Spectrum Disorder and its Cultural and Contemporary Meaning: Psychotherapeutic Research," The Joint Conference IAAP/Vilnius University /LAAP "Research in Psychotherapy and Culture: Exploring Narratives of Identity" (Vilnius, Lithuania) 2018.5.11-12.

Kawai, T., "The verticality in sandplay: It's meaning in symptom, psychological development and human existence," The 22nd Conference of Korean Association of Sandplay Therapy (soul) 2018.6.9.

谷川俊太郎，河合俊雄「詩の朗読とインタビュー　谷川俊太郎さんが語る河合隼雄先生――子どもってどんなだろう？」日本ユング心理学会（JAJP）第7回大会プレコングレス――河合隼雄先生生誕90周年記念行事（連合会館大会議室，東京都）2018.6.23.

Kawai, T., "The tension and paradox between determinate and indeterminate sate: Clinical, social and cultural aspects," The fifth IAAP-IAJS JOINT CONFERENCE "Indeterminate States: trans-cultural; trans-racial; trans-gender" (Goethe University, West-end campus, Frankfurt, Germany), 2018.8.2-5.

Kawai, T., "The interdisciplinary approach to the question: What is psyche?," Analytical Psychology Meets Academic research: Pre-Conference of the IV European Congress of Analytical Psychology (Hotel Cloître St. Louis, Avignon, France) 2018.8.29-30,

畑中千紘，河合俊雄，田中康裕「心理療法におけるこころの変容とその波及――心理療法事例のメタ的分析から」日本箱庭療法学会第32回大会（新潟青陵大学，新潟市）2018.10.20-21.

粉川尚枝，畑中千紘，梅村高太郎，皆本麻実，田附紘平，鈴木優佳，西珠美，山﨑基嗣，大場有希子，松岡利規，豊原響子，文山知紗，長谷雄太，水野鮎子，河合俊雄，田中康裕「発達障害の子どものプレイセラピーと発達検査の比較検討」日本箱庭療法学会第32回大会（新潟青陵大学，新潟市）2018.10.20-21.

河合俊雄「発達の非定型化と思春期心性の変容」日本青年期精神療法学会総会「青年期の発達障害と精神療法」（大阪大学銀杏会館，大阪市）2018.12.1-2.

新聞・一般雑誌等への寄稿・インタビューなど

河合俊雄「心豊かに生きる処方箋　河合隼雄が読んだ本＆河合隼雄の読むべき本」『日経おとなのOFF』日経BP, 2018年8月号.

テレビ・ラジオ等への出演など

NHK　Eテレ「100分de名著　河合隼雄スペシャル」

第1回2018年7月2日（月）10：25−10：50

第2回2018年7月9日（月）10：25−10：50

第3回2018年7月16日（月）10：25−10：50

第4回2018年7月23日（月）10：25−10：50

NHKカルチャーラジオ「文学の世界」『河合俊雄が読み解く村上春樹の“物語”』全12回, NHKラジオ第2，毎週木曜 午後8時30分（再放送 毎週木曜 午前10時）.

第1回（1月10日放送）「物語・夢のリアリティ：『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』」

第2回（1月17日放送）「現代のリアリティ：バラバラとデタッチメント『風の歌を聴け』」

第3回（1月24日放送）「性と暴力：『ノルウェイの森』,『1Q84』」

第4回（1月31日放送）「解離と向こうの世界：『海辺のカフカ』」

第5回（2月7日放送）「作中物語：『1Q84』」

第6回（2月14日放送）「垂直性：『パン屋再襲撃』」

第7回（2月21日放送）「大切な人と向こうの世界の喪失：『スプートニクの恋人』」

第8回（2月28日放送）「現実へのコミット：『ねじまき鳥クロニクル』」

第9回（3月7日放送）「インターフェイス（夢と現実を超えて）：『色

彩を持たない多崎つくると，彼の巡礼の年』」
第10回（3月14日放送）「第三者と縁：『騎士団長殺し』」
第11回（3月21日放送）「現実への帰還：『騎士団長殺し』」
第12回（3月28日放送）「偶然とリアリティ：『偶然の旅人』」

受賞

日本箱庭療法学会学会賞（日本箱庭療法学会第32回大会）2018.10.20.

テキスト

河合俊雄「5章　分析心理学的アプローチ」野島一彦，岡村達也（編）『第3巻　臨床心理学概論（公認心理師の基礎と実践）』遠見書房，2018.4.

講師

河合俊雄「主体性の弱さと夢によるアプローチ」日本箱庭療法学会第32回大会ワークショップ（新潟青陵大学，新潟市）2018.10.20.

指定討論者

河合俊雄「学生相談における箱庭を用いた卒業支援――『アウトプット』としての箱庭を経て，地に降りるまで」日本箱庭療法学会第32回大会研究発表B（新潟青陵大学，新潟市）2018.10.21.

小村豊

論文

藤本蒼・野口真生・小村豊「メタ認知から見た意識の生物学」『人工知能学会誌』2018, 33（4），468-471.

学会発表・ワークショップ等

Yuza, J. Okubo, M., Komura, Y., & Kajiwara, R., "The role of nucleus accumbens for tolerance to delayed reward using two-choice maze in rats," The 11th FENS Forum of Neuroscience (Berlin, Germany) 2018.7.10.

Yuza, J., Okubo, M., Komura, Y., & Kajiwara, R., "Behavioral analysis of tolerance to delayed reward in rats using two-choice maze," 第41回日本神経科学大会（神戸コンベンションセンター，神戸市）2018.7.27.

新國彰彦，小村豊 "(Mal-) adaptive behavioral adjustment in metacognition," 第25回脳機能とリハビリテーション研究会学術集会（千葉県立保健医療大学，千葉市），2018.8.19.

Yuza, J., Okubo, M., Komura, Y., & Kajiwara, R., "Contribution of nucleus accumbens to impulsive choice behavior based on the last reward experience," 2018 Society for Neuroscience meeting (San Diego, USA), 2018.11.7.

講演等

小村豊「Feeling of Knowing or Unknowing の分岐機序」第2回サロン・ド・脳（京都大学，京都市）2018.10.12.

小村豊「自己省察のシステム神経科学」脳科学研究科セミナー（同志社大学，京田辺市）2018.12.19.

小村豊「意識の再帰性を生み出す神経基盤」新潟脳神経研究会特別例会（新潟大学脳研究所，新潟市）2019.1.21.

広井良典

論文

広井良典「幸せはローカルから――幸福度指標をめぐる課題と展望」『月刊自治研』2018,60（703），16-24.

広井良典「医療費の配分と公共性――『持続可能な医療』のために」『週刊社会保障』2018,72（2971），66-71.

広井良典「多死社会のデザイン――『死をめぐる公共政策』の重要性」『地方自治職員研修』2018, 51（6），12-14.

広井良典「迫り来る分岐点　AIが示す日本社会の未来シミュレーション――『地方分散型シナリオ』の幸福論」『地方行政』10829号（2018年8月30日），8-11.

広井良典「『地域への着陸』の時代としての人口減少社会」『作業療法ジャーナル』2018, 52（11），1166-1170.

広井良典「『持続可能な医療』への視点」『健康保険』72（12），22-27.

広井良典「幸福（ウェルビーイング）について考える時代とは――2500年前と現在」『サービソロジー』2018，5（4），1-1.

広井良典「AIが示す日本社会の未来と持続可能性――2050年，日本は持続可能か？」『労働の科学』2019，74（2），68-73.

著書

広井良典『持続可能な医療――超高齢化時代の科学・公共性・死生観』筑摩書房，2018年，251頁.

広井良典「オープンスペースとコミュニティ」槇文彦，真壁智治（編著）『アナザーユートピア――「オープンスペース」から都市を考える』NTT出版，2019年，45-58頁.

学会発表

広井良典「持続可能な福祉社会へのガバナンス」，第14回社会保障国際論壇（科学技術会館，中国・大連市）2018.9.15.

広井良典「地球倫理――ローカル・グローバル・ユニバーサル（シンポジウム座長）」，地球システム・倫理学会第14回学術大会（稲盛財団記念館大会議室，京都市）2018.11.26.

講演

広井良典「人口減少社会のデザイン――これからの日本社会と都市・地域・幸福」特別区（東京23区）新任職員研修（昭和女子大学人見記念講堂，東京都）2018.4.10.

広井良典「AIを活用した持続可能な日本の未来に向けた政策提言」総合地球環境学研究所実践プログラム3「豊かさの向上を実現する生活圏の構築」セミナー（総合地球環境学研究所，京都市北区）2018.5.10.

Hiroi, Y., "AI, Public Policy, and Aging Society," Uehiro, Carnegie and Oxford Conference on Ethics and the Future of Artificial Intelligence, Carnegie Council for Ethics in International Affairs (NY, USA), 2018.5.17-18.

広井良典「人口減少社会を希望に――成熟社会における医療と社会保障」第21回兵庫県医師会医政フォーラム（兵庫県医師会館，神戸市）2018.5.26.

広井良典「幸せはローカルから――幸福度指標をめぐる課題と展望」岩手県議会次期総合計画特別委員会，岩手県議会（岩手県盛岡市）2018.9.4.

広井良典「成熟・高齢社会の都市ビジョン」第6回日仏自治体交流会議（ホテル日航熊本，熊本市）2018.10.10.

広井良典「ポスト成長・人口減少社会のデザイン――人間と社会の未来」総合研究大学院大学創立30周年記念シンポジウム「人類はどこへ向かうのか」（東京大学駒場Ⅰキャンパス，東京都）2018.11.4.

広井良典「幸せはローカルから――人口減少社会と幸福度指標」幸せリーグシンポジウム（東京都荒川区）2018.11.12.

広井良典「AIを活用した，日本社会の未来と高等教育に関するシミュレーション」中央教育審議会大学分科会・将来構想部会合同会議，文部科学省（東京都）2018.11.20.

広井良典「豊かさって何ですか？――デジタルマネーは社会を変えるか（トークセッション）」（日本科学未来館，東京都）2019.1.27.

広井良典「地域リハビリテーションと新しいコミュニティづくり――地域包括ケアシステムのソフトとハード」第4回きょうと地域リハビリテーションフォーラム（京都府立医科大学，京都市）2019.2.16.

広井良典「人口減少社会のデザイン」上廣倫理財団寄付研究部門社会還元事業（京都大学東京オフィス大会議室，東京都）2019.3.9, 3.16.

新聞等掲載

「AIにできること・できないこと（現代のことば）」京都新聞夕刊，2018.4.10.

「『無の科学』は可能か（現代のことば）」京都新聞夕刊，2018.6.4.

「現代版『不老不死』の夢（現代のことば）」京都新聞夕刊，2018.8.14.

「風土と宗教（現代のことば）」京都新聞夕刊，2018.10.4.

「精神と物質（現代のことば）」京都新聞夕刊，2018.11.29.

「公共政策　AIが開く未来（論点）」読売新聞朝刊，2018.12.28.

「個人の生き方　新時代を左右――2050年　AIの予測シナリオは」朝日新聞朝刊，2019.1.1.

「『無』の世界史（現代のことば）」京都新聞夕刊，2019.1.28.

「拡大成長から持続可能性へ――『ポスト安倍』時代のビジョン」神戸新聞朝刊等（共同通信配信），2019.1.28.

「死を含む生命（現代のことば）」京都新聞夕刊，2019.3.27.

テレビ・ラジオ等への出演

「AIが示す日本社会の未来」『視点・論点』，NHK，2019.2.6.

その他

広井良典「コミュニティから見た日本」高等学校国語（現代文）教科書，大修館書店『現代文B改定版』90-99頁，「精選現代文B新訂版」192-202頁.

内田由紀子

論文

Ito, A., Gobel, MS., & Uchida, Y., "Leaders in Interdependent Contexts Suppress Nonverbal Assertiveness: A Multilevel Analysis of Japanese University Club Leaders' and Members' Rank Signaling," *Frontiers in Psychology*, 2018, 9, 723.

Uchida, Y., Kitayama, S., Akutsu, S., Park, J., & Cole, S. W., "Optimism and the Conserved Transcriptional Response to Adversity," *Health Psychology*, 2018, 37 (11), 1077-1080

Krys, K., Uchida, Y., Oishi, S., & Diener, E., "Open society fosters satisfaction: Explanation to why individualism associates with country level measures of satisfaction," *The Journal of Positive Psychology*, In press. Advance Online Publication.

Kirchner, A., Boiger, M., Uchida, Y., Norasakkunkit, V., Verduyn, P., & Mesquita, B., "Humiliated fury is not universal: The co-occurrence of anger and shame in the United States and Japan," *Cognition and Emotion*, 2018, 32 (6), 1317-1328.

Taylor, P.M., & Uchida, Y., "Awe or horror: Differentiating two emotional responses to schema incongruence," *Cognition and Emotion*, 2019,33 (8), 1548-1561.

Rappleye, J., Komatsu, H., Uchida, Y., Krys, K., & Markus, H., "'Better policies for better lives'?: constructive critique of the OECD's (mis) measure of student well-being," *Journal of Education Policy*, in press. Advance online publication.

Uchida, Y., Takemura, K., Fukushima, S., Saizen, I., Kawamura, Y., Hitokoto, H., Koizumi, N., & Yoshikawa, S., "Farming cultivates a community-level shared culture through collective activities: Examining contextual effects with multilevel analyses," *Journal of Personality and Social Psychology*, 2019, 116 (1), 1-14.

Krys, K., Capaldi, C. A., Lun, V. M.-C., Vauclair, C.-M., Bond, M. H., Dominguez-Espinosa, A., & Uchida, Y., "Psychologizing indexes of societal progress: Accounting for cultural diversity in preferred developmental pathways," *Culture & Psychology*, In press. Advance Online Publication.

Mano F., Ikeda K., Uchida Y., Liu I.H., Joo E., Okura M., & Inagaki N., "Novel psychosocial factor involved in diabetes self-care in the Japanese cultural context," *Journal of diabetes investigation*, in press.

Krys, K., Capaldi, C. A., Zelenski, J. M., Park, J., Nader, M., Kocimska- Zych, A., Kwiatkowska, A., Michalski, P., & Uchida, Y., "Family well-being is valued more than personal well-being: A four-country study," *Current Psychology*, In press. Advance Online Publication.

Liu, I. H., Uchida, Y., & Norasakkunkit, V., "Socio-Economic Marginalization and Compliance Motivation among Students and Freeters in Japan," *Frontiers in Psychology*, 2019, 10, 312.

Krys, K., Zelenski, J. M., Capaldi, C. A., Park, J., van Tilburg, W., van Osch, Y., Haas, B. W., Bond, M. H., Dominguez-Espinoza, A., Xing, C., Igbokwe, D. O., Kwiatkowska, A., Luzniak-Piecha, M., Nader, M., Rizwan, M., Zhu, Z., & Uchida, Y., "Putting the 'we' into well-being: Using collectivism-themed measures of well-being attenuates well-being's association with individualism," *Asian Journal of Social Psychology*, 2019, 22 (3), 256-267.

Fukushima, S., Takemura, K., Uchida, Y., Asano, S., & Okuda, N., "Dual nature of trust within a community: Individual-level effect of trust on well-being is positive but its contextual effect is negative," *Psychologia*, In press.

内田由紀子「日本の協調性の行方」『ひらく』2019, 創刊号.

De Almeida, I., & Uchida, Y., "Examining affective valence in Japanese and Brazilian cultural products: An analysis on emotional words in song lyrics and newspapers," *Psychologia*, In press.

Takemura, K., & Uchida, Y., "Editorial: Trust," *Psychologia*, In press.

Uchida, Y., Takemura, K., & Fukushima, S., "How do socio-ecological factors shape culture? Understanding the process of micro-macro interactions," *Current Opinion in Psychology*, in press.

著書

内田由紀子，堀毛一也「ポジティブ心理学の測定と評価」，鈴木伸一（編）『健康心理学の測定法・アセスメント』ナカニシヤ出版，2018年，193-213頁.

Hitokoto, H., & Uchida, Y., "Interdependent happiness: Progress and implications," In. Demir, M. & Sümer, N. (Eds.), *Close Relationships and Happiness across Cultures*, 2018, 19-39, Dordrecht: Springer.

内田由紀子「日本社会における資本主義と倫理」，京都大学経済研究所附属先端政策分析研究センター（編）『資本主義と倫理――分断社会をこえて』東洋経済新報社，2019年，149-163.

福島慎太郎，内田由紀子，竹村幸祐「つながりがつむぐ『地域のしあわせ』――鳥の目から見る住民の主観的幸福感」，脇田健一，谷内茂雄，奥田昇（編著）『流域ガバナンス――地域の『しあわせ』と流域の『健全性』』京都大学出版会，印刷中.

学会発表・ワークショップ等

Kirchner, A., Boiger, M., Uchida, Y., & Mesquita, B., "We move, we stay, together: Interpersonal patterns of affect in Belgium and Japan," Paper presented at the Consortium of European Research on Emotion (Glasgow, UK), 2018. 4.

小森政嗣，飯田梨乃，箕浦有希久，一言英文，竹村幸祐，内田由紀子「非負値行列分解による集落の社会的接触の因子の抽出」電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーション基礎研究会（HCS），（沖縄産業支援センター，那覇市），2018.5.21.

内田由紀子「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の効果と実践――作業療法現場における援用を考える」（特別講演），作業療法神経科学研究会第4回学術集会（北海道大学学術交流会館，札幌市），2018.6.16.

Krys, K., Hitokoto, H., Takemura, K., & Uchida, Y., "Towards communitarian happiness – perspective of cultural psychologists," Symposium organized at the Annual Conference of the Society for the Advancement of Socio-Economics (Kyoto, Japan), 2018.6.23.

Krys, K., & Uchida, Y., "Others-benefitting qualities of individualism promote societal happiness," Paper presented at the Annual Conference of the Society for the Advancement of Socio-Economics (Kyoto, Japan), 2018.6.23.

Krys, K., & Uchida, Y., "Applying Cultural Sensitivity (CS) to development indexes: On culturally diversified conceptualisations of post-economic development," Paper presented at the Annual Conference of the Society for the Advancement of Socio-Economics (Kyoto, Japan), 2018.6.25.

Krys, K., Uchida, Y., Kosiarczyk, A., Kwiatkowska, A., & Torres, C., "Double symposium on societal happiness (part 1): Why individualism associates with happiness?" Symposium organized at the 24th International Congress of the International Association for Cross Cultural Psychology (Guelph, Canada), 2018.7.4.

Boiger, M., Ceulemans, E., De Leersnyder, J., Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Mesquita, B., "Variance is at the heart of emotion: A novel approach to cultural variation in emotional experience," In J. De Leersnyder (Chair), Moving forward in culture and emotion research: Three innovative methods to model the cultural heterogeneity of emotional expression and experience, Symposium conducted at the 24th International Congress of the International Association for Cross Cultural Psychology (Guelph, Canada), 2018.7.4.

Boiger, M., Kirchner, A., Uchida, Y., & Mesquita, B., "Different bumps in the road: Emotions during conflict interactions in Belgian and Japanese couples," Paper presented at the 24rd International Congress of the International Association for Cross Cultural Psychology (Guelph, Canada), 2018.7.4.

Krys, K., Uchida, Y., Gardiner, G., Baranski, E., Funder, D., Domínguez-Espinosa, A.,… Okvitawanli, A., "Double symposium on societal happiness (part 2): Macro-level correlates of various subjective well-being measures," Symposium organized at the 24th International Congress of the International Association for Cross Cultural Psychology (Guelph, Canada), 2018.7.5.

Krys, K., & Uchida, Y., "Others-benefiting attitudes prevalent in open societies is a key for societal happiness," Paper presented at the 24th International Congress of the International Association for Cross Cultural Psychology (Guelph, Canada), 2018.7.4.

Krys, K., & Uchida, Y., "Applying cultural sensitivity (CS) to social development indexes: Preferences for post-economic directions of development vary across societies," Poster presented at the 24th International Congress of the International Association for Cross Cultural Psychology (Guelph, Canada), 2018.7.4.

中尾元，内田由紀子「曖昧さへの耐性の観点からみた異文化間能力とは？ 認知的完結欲求と文化的知性尺度を用いた検討」日本社会心理学会第59回大会（追手門学院大学，茨木市），2018.8.28

Liew, K., dela Cruz, C., Lee, L. N., & Uchida, Y., "Identifying cultural and well-being related predictors of mood regulation in music through machine learning," 日本社会心理学会第59回大会（追手門学院大学，茨木市），2018.8.29.

伊藤篤希，Gobel, M., 内田由紀子，「非言語行動による社会的地位の伝達における文化差」日本社会心理学会第59回大会（追手門学院大学，茨木市），2018.8.29.

内田由紀子 「『地域の幸福』の多面的測定――地域内外の社会関係資本からの検討」 日本社会心理学会59回大会ワークショップ「地域の幸福」の多面的測定――地域内外の社会関係資本からの検討」（追手門学院大学，茨木市），2018.08.29.

竹村幸祐，福島慎太郎，内田由紀子「自分と他者の住居流動性はどちらが問題か？ 協力規範と協力行動の関係を弱める干渉効果」日本社会心理学会第59回大会（追手門学院大学，茨木市），2018.8.29.

中山真孝，内田由紀子，竹村幸祐，金子祥恵，伊藤篤希，新谷茉奈「企業風土と個人特性の相互作用――自己価値随伴性のマルチレベル分析による検討」日本社会心理学会第59回大会（追手門学院大学，茨木市），2018.8.29.

Uchida, Y., Hitokoto, H., Takemura, K., Minoura, Y., & Fukushima, S., "Happiness and social capital: social psychological perspectives for sustainable societies, with Happiness Indices for Communities (HICS)," World Social Science Forum 2018: Parallel Sessions (CS1-07) Intergenerational co-creation to achieve sustainable and inclusive development (Fukuoka), 2018.09.26

Krys, K., Capaldi, C., Torres, C., van Tilburg, W., Vignoles, V., Bond, M.,… Uchida,… Y., Xing, C., "What is good for individual does not have to be good for people around: Two perspectives on negative emotions expressivity," Paper presented at the Third International Conference on Wellbeing & Public Policy (Wellington, New Zealand), 2018.9.6.

Taylor, p., 中山真孝，野崎優樹，内田由紀子「Awe（畏怖・畏敬）感情おける『運命性の認知』の役割――壮大さの知覚と認知的調節の間の媒介要因の検討」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市），2018.9.25.

小森政嗣，飯田梨乃，箕浦有希久，一言英文，竹村幸祐，内田由紀子「集落の多層的な社会的ネットワークの分解」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市），2018.9.26.

内田由紀子，富永仁志，中尾元，前浦菜央「生理センシングでリアルなこころに迫る」京都大学アカデミックデイ2018, 京都大学，2018.9.22.

Uchida, Y., "Cultural Construction of Happiness: Variations within National and Community Cultures," (大会基調講演) The Second International Conference on Well-being (Singapore University of Social Sciences, Singapore), 2018.11.2.

Krys, K., Ng, W., Tov, W., & Uchida, Y., "Well-being of societies: Lessons from multi-country comparisons," Symposium organized at the Second International Conference on Well-being (Singapore University of Social Sciences, Singapore), 2018.11.2.

Liew, K., Uchida, Y., dela Cruz, C., & Lee, L. N., "When social relationships fail: Social withdrawal and well-being," Paper presented at the Second International Conference on Well-Being (Singapore University of Social Sciences, Singapore), 2018.11.2.

Liu. I.T., Uchida, Y., Ikeda, K., Mano, F., Joo, E., & Okura, M., "Cause and effect of interdependent happiness among diabetic patients in Japan," Paper presented at the Second International Conference on Well-Being (Singapore University of Social Sciences, Singapore）, 2018.11.2.

Ito, A., Uchida, Y., Takemura, K., Nakayama, M., Kaneko, S., & Shintani, M., "Promotion-focused workplace enhances workers' happiness," The Second International Conference on Well-Being（Singapore University of Social Sciences, Singapore), 2018.11.2.

Krys, K., & Uchida, Y., "Others-benefiting qualities of open societies facilitate societal satisfaction," Paper presented at the Second International Conference on Well-being (Singapore University of Social Sciences, Singapore), 2018.11.3.

Krys, K., Capaldi, C., Torres, C., van Tilburg, W., Vignoles, V., Bond, M.,… Uchida, Y.,… Xing, C., "Expression of negative emotions causes individual-society tension," Paper presented at the Second International Conference on Well-being (Singapore University of Social Sciences, Singapore), 2018.11.3.

Krys, K., Uchida, Y., Capaldi, C., Cantarero, K., Torres, C., Isik, I., … Zelenski, J., "What's next? Post-economic aims of societal development," Paper presented at the Second International Conference on Well-being (Singapore University of Social Sciences, Singapore), 2018.11.3.

内田由紀子「文化心理学からみたローカルな価値とグローバルな価値」（招待ワークショップ）地球システム・倫理学会第14回学術大会 シンポジウム「地球倫理――ローカルからグローバルへ」（京都大学），2018.11.26.

Liew, K., & Uchida, Y., "You can give the NEET a job but you can't make him work: Perceived failures in social relationships are associated with NEET lifestyle preference in Singaporean youth," Poster presented at the 7th International Symposium on Human Survivability (Kyoto), 2018.12.10.

Bowen, K. S., & Uchida, Y., "Alone and lonely? One-person households and social pathways to health in Japan," The Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology (Portland, Oregon), 2019.2.8.

Jeong, S., Bowen, K. S., & Uchida, Y., "The relationship among relational ambivalence, life satisfaction, and cultural interdependence," The Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology (Portland, Oregon), 2019.2.9.

Shintani, M., Uchida, Y., Takemura, K., Nakayama, M., & Ito, A., "Does match between own and perception of colleague's regulatory focus read to positive organizational experiences? Person-organization fit in regulatory focus," The Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology (Portland, Oregon), 2019.2.9.

Krys, K., Uchida, Y., Capaldi, C., Cantarero K., Torres, C., Isik, I., … Zelenski, J., "Societal development: Aims, outcomes, and underlying psychological processes," Paper presented at the Working-group Meeting on Psychologizing Societal Development (Hong-Kong), 2019.2.

Krys, K., Uchida, Y., Capaldi, C., Cantarero K., Torres, C., Isik, I., … Zelenski, J., "Societal development: Aims, outcomes, and underlying psychological processes," Paper presented at the Seminar of Mark Eunkook Suh (Seoul, South Korea), 2019.2.

Uchida, Y., "The ways of well-being and the self in Japanese society: An examination of biological and psychological data of Japanese company employees," The 2019 Society for Affective Science conference (Washington DC), 2019.3.2.

講演

内田由紀子，竹村幸祐，福島慎太郎「『農をつなぐ仕事』――普及指導員とコミュニティへの社会心理学的アプローチ」大分県農業改良普及職員協議会・大分県協同農業普及事業70周年記念式典 基調講演（大分市），2018.5.29.

内田由紀子「農業コミュニティにおける社会関係資本――社会心理学からの検討」第31回京都大学地球環境フォーラム「ムラのつながり，ムラの未来」（京都大学），2018.6.2.

内田由紀子「地域づくりと幸福感について」滝沢市地域づくり研修会（岩手県滝沢市），2018.6.29.

Uchida, Y., "Farming cultivates a community-level shared culture through collective activities: Examining contextual effects with multilevel analyses," Stanford University, Department of Psychology, Culture Collaboratory (Stanford, USA), 2018.8.13.

内田由紀子，中山真孝，竹村幸祐，伊藤篤希，新谷茉奈「ビジネスと幸福感」第9回京機ビジネス倶楽部（京都市），2018.9.14.

内田由紀子「日本社会における資本主義と倫理」京都大学経済研究所シンポジウム「資本主義と倫理――分断社会をこえて」（京都大学），2018.10.6.

内田由紀子，箕浦有希久，千島雄太，福島慎太郎「地域づくりと幸福感について」重点地域調査フィードバック（岩手県滝沢市），2018.10.18.

内田由紀子「日本社会における生き方と自己――組織従業者の生理・心理調査からの考察」第3回京都こころ会議シンポジウム「こころと生き方――自己とは何か」（京都大学），2018.11.18.

内田由紀子「普及活動の意義と重要性：農業コミュニティにおける信頼関係構築」平成30年度新規普及職員研修（近畿ブロック）近畿農政局（京都市），2019.1.10.

内田由紀子「企業文化における従業員の幸福と健康」第8回京都クオリア塾（京都市），2019.1.19.

内田由紀子「幸福感の文化・社会的基盤」名古屋大学大学院情報学研究科附属価値創造研究センター第1回ポジティブ情報学シンポジウム「幸福感とは何か『人間中心の情報学』からのアプローチ」（名古屋市），2019.1.25.

内田由紀子「地域の幸福の多面的側面の測定と持続可能な多世代共創社会に向けての実践的フィードバック」RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究領域PJの社会実装に向けた意見交換ワークショップ（東京都），2019.2.14.

内田由紀子「保護者の文化が子育てに与える影響」第2回事保連シンポジウム 基調講演（大阪市），2019.2.24.

内田由紀子「地域コミュニティーにおける幸福感研究」産官学コンソーシアム"PEGASAS"第15回"未来のまちづくり"イノベーション会議（京都大学），2019.3.13.

新聞・一般雑誌への寄稿・インタビューなど

内田由紀子 「学問への夢」 神戸新聞　随想　2018.09.11.

内田由紀子「頃合いの湯加減」 神戸新聞　随想　2018.09.28.

内田由紀子「文化と生活に根差すウェルビーイング実現のヒント」『ふるえ』，NTT研究所，2018.10.

内田由紀子「阪急宝塚線」 神戸新聞　随想　2018.10.16.

内田由紀子「研究者の世界」 神戸新聞　随想　2018.10.31.

内田由紀子「独立性と協調性」 神戸新聞　随想　2018.11.15.

内田由紀子「町のアイデンティティー」神戸新聞　随想　2018.12.03.

内田由紀子「一歩ずつ前へ」 神戸新聞　随想　2018.12.18.

受賞

小森政嗣，飯田梨乃，箕浦有希久，一言英文，竹村幸祐，内田由紀子「集落の多層的な社会的ネットワークの分解」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市），2018.9.25-27.（大会優秀発表賞）

吉川左紀子

論文

Ueda, Y., & Yoshikawa, S., "Beyond personality traits: Which facial expressions imply dominance in two-person interaction scenes?," *Emotion*, 2018, 18 (6), 872-885.

Uchida, Y., Takemura, K., Fukushima, S., Saizen,I., Kawamura., Y, Hitokoto, H., Koizumi, N., & Yoshikawa, S. "Farming cultivates a community-level shared culture through collective activities: Examining contextual effects with multilevel analyses," *Journal of Personality and Social Psychology*, 2019, 116 (1), 1-14. DOI: 10.1037/pspa0000138

Suzuki, M., Kawagoe, T., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Asano, K., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, K., "Neural correlates of

working memory maintenance in advanced aging: Evidence from fMRI," *Frontiers in Aging Neuroscience*, 2018. Manuscript ID: 10, 358. DOI: 10.3389/fnagi.2018.00358

Sato, W., Hyniewska, S., Minemoto, K., & Yoshikawa, S., "Facial expressions of basic emotions in Japanese laypeople," *Frontiers in Psychology*, 2019, 10, 259. DOI：10.3389/ fpsyg.2019.00259

長岡千賀，小山内秀和，矢野裕理，松島佳苗，加藤寿宏，吉川左紀子「子どもの適応行動の発達を支える療育者の関わり――発達障がいの作業療法場面の分析」『認知科学』2018, 25（2），139-155.

著書

吉川左紀子「『魔法』の心理学的解明に向けて」，本田美和子，伊東美緒（編），『ユマニチュードと看護』医学書院，2019年，195-196頁.

学会発表

Nakazawa, A., Honda, M., Kurazume, R., Sato, W., Ishikawa, S., Yoshikawa, S., & Ito, M., "Computational tender-care science: Computational and cognitive neuroscientific approaches for understanding the tender care," SymCollab（一橋講堂，東京都），2018.3.7-11.

布井雅人・吉川左紀子「異人種顔画像の表情とその割合が対象の選好判断に及ぼす影響」日本認知心理学会第16回大会（立命館大学大阪いばらきキャンパス，茨木市），2018.9.1-2.

布井雅人，吉川左紀子「受け手の体勢が表情画像の印象に及ぼす影響――対人援助場面を想定した検討」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市），2018.9.25-27.

嶺本和沙，上田祥行，吉川左紀子「表情のアンサンブルが後続の表情認知に与える影響」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市），2018.9.25-27.

田村綾菜，小川詩乃，常深浩平，長岡千賀，正高信男，吉川左紀子「学習に困難のある子どもをもつ保護者の学習支援に対する理解と子どもの適応について」第15回子ども学会議（同志社女子大学今出川キャンパス，京都市），2018.11.10.

嶺本和沙，上田祥行，吉川左紀子「表情のアンサンブル平均が後続の表情認知に与える影響――単独表情との比較」日本基礎心理学会第37回大会（専修大学生田キャンパス，川崎市），2018.11.30-12.2.

受賞

京都府あけぼの賞

講演等

吉川左紀子「世代間コミュニケーションの難しさと面白さ」放送大学公開講演会「心理学からみた若者のこころと現代社会」（放送大学京都学習センター，京都市），2018.7.22.

吉川左紀子「コミュニケーションの心理学」京都府看護協会実習指導者講習会（京都府看護協会研修センター，京都府），2018.10.27.

吉川左紀子「瞑想のこころを科学する」ダライ・ラマ法王と科学者との対話（パシフィコ横浜国立大ホール，横浜市），2018.11.16.

吉川左紀子「コミュニケーションの心理学」大阪歯科大学FDセミナー（大阪歯科大学天満橋学舎創立100周年記念館，大阪市），2018.12.5.

吉川左紀子「『機嫌よく生きる』を支える科学の知恵，臨床の知恵」放送大学公開講演会「中高年期を幸せに生きる知恵――認知科学者，臨床心理学者が語る」（放送大学京都学習センター，京都市），2019.2.10.

吉川左紀子「触覚を用いた多感覚コミュニケーションの心理学」日本化粧品技術者会東日本支部第280回学術講演会（学士会館，東京都），2019.2.18.

吉川左紀子「心理学からみたユマニチュード――人生後期を幸せに暮らす」ユニットin北京都平成31年度全体研修会（セントラーレホテル京丹後，京丹後市），2019.3.3.

社会活動等

日本認知心理学会理事.

科学技術振興機構研究開発運営会議外部専門家.

科学技術振興機構研究成果展開事業（COIプログラム）構造化チームメンバー.

戦略的情報通信研究開発推進事業（SCOPE）専門評価委員.

京都市社会福祉審議会委員.

京都市社会教育委員.

公益財団法人ひと・健康・未来研究財団理事.

吉岡　洋

論文

吉岡洋「〈毒〉の重要性について」『ポワゾン・ルージュ――現代社会における〈毒〉の重要性2018』，京都大学こころの未来研究センター，2019.3.25, 10-23.

吉岡洋「アール・ブリュットの芸術哲学」『臨床精神医学』2019.3.28, 48, (3)，325-330.

批評・エッセイ・対談等

吉岡洋「ケントリッジ演出の『魔笛』を視る」（オペラ作品評），『ジ・アトレ』新国立劇場，2018年5月20日，6月号，6-7.

吉岡洋「揺動するプラトニックな世界」（田中奈緒子の作品批評），『KYOTO EXPERIMENT 2018』（京都国際舞台芸術祭2018プログラム），2018.9.14.

吉岡洋「『馴染む』ことの両義性」（エッセイ），ロームシアター京都リサーチプログラム 紀要――2017年度報告書，2018.11, 106.

吉岡洋「金魚に助けを求める」『ポワゾン・ルージュ――現代社会における〈毒〉の重要性2018』，京都大学こころの未来研究センター，2019.3.25, 3-9.

学会発表（講演・ワークショップ等含む），主催等

吉岡洋「時間と空間」（講演），（秋田公立美術大学），2018.4.10.

吉岡洋「コマと回転体をめぐって」，「アート／メディア―四次元の読書」レクチャー（国立国際美術館），2018.4.27.

Yoshioka, H., "Ambivalence of Monstrosity: Understanding Godzilla after Fukushima,"（講演）（University of Stockholm），2018.9.5.

吉岡洋，マヌエラ・インファンテ「プロジェクト〈CHI-SEI〉をめぐって」（KYOTO EXPERIMENT 2018参加のチリのアーティストManuela Infanteとの公開対談），（京都芸術センター），2018.9.14.

吉岡洋「芸術と〈毒〉という問題系」（講演），「芸術と〈毒〉」（公開講座），（京都大学稲盛財団記念館），2018.9.16.

吉岡洋「1970以後，文化の記憶喪失」（講演），（京都大学人文科学研究所），2018.10.27.

吉岡洋「芸術による社会包摂」（講演），文化庁・群馬大学「文化芸術による社会包摂は可能か？ 芸術と医療・福祉の対話と越境」，（特別養護老人ホームえいめい，群馬県前橋市），2018.11.16.

吉岡洋「The Mind, "artificial" or "artistic"? ――こころと技術（アート）の奇妙な関係」（研究発表）2019年第1回こころ研究会，（京都大学こころの未来研究センター），2019.3.13.

阿部修士

論文

Abe, N., Greene, J.D., & Kiehl, K.A., "Reduced engagement of the anterior cingulate cortex in the dishonest decision-making of incarcerated psychopaths," *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 2018, 13 (8), 797-807.
Abe, N., Kawasaki, I., Hosokawa, H., Baba, T. & Takeda, A., "Do patients with Parkinson's disease exhibit reduced cheating behavior? A neuropsychological study," *Frontiers in Neurology*, 2018, 9, 378.
Suzuki, M., Kawagoe, T., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Asano, K., Yamada, M., Yoshikawa, S., & Sekiyama, K., "Neural correlates of working memory maintenance in advanced aging: Evidence from fMRI," *Frontiers in Aging Neuroscience*, 2018, 10, 358.
Ueda R., Yanagisawa K., Ashida H., & Abe N., "Executive control and faithfulness: only long-term romantic relationships require prefrontal control," *Experimental Brain Research*, 2018, 236 (3), 821-828.
阿部修士「より良い意思決定の実現に向けて――脳とこころの傾向と対策」『日本健康教育学会誌』2018，26（4），404-410.
阿部修士「意思決定のメカニズムと罠――心理学と神経科学の知見から」『研究開発リーダー』2018，（148），56-59.

学会発表・ワークショップ等

柳澤邦昭，阿部修士「主観的幸福感の個人差を予測する神経回路」日本社会心理学会第59回大会（追手門学院大学，茨木市），2018.8.28.
柳澤邦昭，加藤樹里，阿部修士「時間の有限性と正直な行動の関連」日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会（神戸大学，神戸市），2018.9.8.
Abe, N., Huang, T.R., Wu, C.T., "Neural correlates of dishonesty: preliminary results of resting-state fMRI," The 4th NTU-Kyoto University International Symposium of Understanding Self and Its Interaction with Social and Physical Environments, (Kyoto, Japan), 2018.12.9.
山下雅俊，大澤智恵，鈴木麻希，郭霞，貞方マキ子，大塚結喜，浅野孝平，阿部修士，積山薫「長年の楽器訓練経験と高齢者の海馬と小脳灰白質容積の関連」第21回日本ヒト脳機能マッピング学会（東京大学本郷キャンパス大講堂，東京都），2019.3.15.
郭霞，山下雅俊，鈴木麻希，大澤智恵，浅野孝平，阿部修士，積山薫「楽器訓練参加による高齢者の脳の情報処理効率化――fMRI を用いた検討」第21回日本ヒト脳機能マッピング学会（東京大学本郷キャンパス大講堂，東京都），2019.3.15.
上田竜平，阿部修士「親密な異性間関係の維持を支える神経機構――社会的報酬遅延課題による検討」第21回日本ヒト脳機能マッピング学会（東京大学本郷キャンパス大講堂，東京都），2019.3.15.

講演

阿部修士「ヒトの意思決定のメカニズムと決断前に用心すべき罠――脳とこころの傾向を知り，あらゆるシーンでの判断力を向上させる」サイエンス＆テクノロジー（株）価値づくり特集セミナー（品川区立総合区民会館，東京都），2018.5.24.
阿部修士「より良い意思決定の実現に向けて――脳とこころの傾向と対策」第27回日本健康教育学会学術大会（姫路市市民会館，姫路市），2018.7.8.
阿部修士「正直さの認知神経科学」中央大学人文科学研究所主催公開研究会（中央大学駿河台記念館，東京都），2018.7.14.
阿部修士「IAT で『嘘』を予測する――正直さについての潜在意識からのアプローチ」第82回日本心理学会（仙台国際センター，仙台市），2018.9.27.
阿部修士「正直さの認知神経科学」新学術領域「意志動力学の創成と推進」心理系研究交流会（キャンパスプラザ京都，京都市），2018.9.28.
阿部修士「中高生のためのモチベーション講座――認知神経科学編」同志社クローバー祭2018心理学部特別講義（同志社大学京田辺キャンパス知真館，京田辺市），2018.11.3.
Abe, N., "Social neuroscience of dishonesty," CiNet's Friday Lunch Seminars (CiNet, Suita, Japan), 2018.11.9.
阿部修士「不正な判断・行動のメカニズム――心理学と脳科学のアプローチ」経営倫理実践研究センター 企業不祥事を克服するための「人の心と行動」の研究会（経営倫理実践研究センター，東京都），2018.11.30.

テレビ・ラジオ等への出演など

「痛みを“脳”で克服！“慢性痛”治療革命」NHK ガッテン！2018.5.9.

新聞・一般雑誌への寄稿・インタビューなど

"How to maintain monogamy after infatuation wears off," Psychology Today, 2018.7.18.
https://www.psychologytoday.com/us/blog/why-bad-looks-good/201807/how-maintain-monogamy-after-infatuation-wears
「嘘をつくときのサイコパスの脳とは？――脳活動測定で探る！」，academist Journal, 2018.8.1.
https://academist-cf.com/journal/?p=8074
"New neuroimaging research helps explain why psychopaths lie effortlessly," PsyPost, 2018.8.11.
https://www.psypost.org/2018/08/new-neuroimaging-research-helps-explain-why-psychopaths-lie-effortlessly-51909

熊谷誠慈

論文

熊谷誠慈「GNH と日本」『月刊ガバナンス』，2018，（11），94-95.
Kumagai, S., "Bonpo Abhidharma Theory of the Aggregate of Form (rūpaskandha)," *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 2018, 76, 101-137.
西田愛，今枝由郎，熊谷誠慈「古代チベット人の死後の世界観と葬送儀礼の仏教化――敦煌出土『生死法物語』『置換』『神国道説示』三部作の研究」『神戸外大論叢』，2019, 70（1），87-130.

著書

Kumagai, S., "A Report on Some Physical Evidences and Oral Transmission about Tsangpa Gyare (1161-1211) Collected at the Ralung Monastery and the Druk Monastery in Tibet," In Vajrayāna Buddhism in the Modern World: *Proceedings of the Second International Conference on Vajrayāna Buddhism*, 28-30 March 2018, Thimphu. 2018, pp. 34-48. Thimphu, Bhutan: Centre for Bhutan Studies & GNH Research.

学会発表・研究会発表

Kumagai. S., "Overview of History of Tibetan Buddhism," 16th Seminar on Himalayan Region (Kyoto University, Kyoto), 2018.8.5.
Kumagai. S., "Overview of History of Bhutanese Buddhism," 20th Seminar on Bhutan/17th Seminar on Himalayan Region (Kyoto University, Kyoto), 2018.9.12.
Kumagai, S., "The Education of Tsangpa Gyare (1161-1211) as the Basis of the Pedagogic System of the Drukpa Kagyu School," ISBS Launch Conference 2019 (University of Oxford, Oxford), 2019.1.9.

講演

熊谷誠慈「GNH と仏教――世俗的・究極的幸福とはどういうものな

のか？」国際開発学会「開発経験の実証的考察を通じた発展・開発のあり方の再考」研究部会,『「発展・開発」概念の再考を試みる――ブータン／GNHからの逆照射』(甲南大学西宮キャンパス，神戸市)，2018.6.16.
熊谷誠慈「ブータンの伝統と現代」『ゲンボとタシの夢見るブータン』京都公開記念特別講演会（出町座，京都市)，2018.9.1.
Kumagai, S., "Tibetan Buddhism: History and Influence in Neighboring Himalayan Regions," (University of Prague, Prague) 2018.11.27.
Kumagai, S., "ISBS : Identity & Purposes: Suggestions from Indo-Tibetan Buddhology," ISBS Launch Conference 2019 (University of Oxford, Oxford), 2019.1.10.

佐藤　弥

論文
Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., Usui, N., Kondo, A., Matsuda, K., Usui, K., Toichi, M., & Inoue, Y., "Analyzing neural activity and connectivity using intracranial EEG data with SPM software," *Journal of Visualized Experiments*, 2018, 140, e58187.
Hyniewska, S., Sato, W., Kaiser, S., & Pelachaud, C., "Naturalistic emotion decoding from facial action sets," *Frontiers in Psychology*, 2019, 9, 2678.
Sato, W. Hyniewska, S. Minemoto, K., & Yoshikawa, S., "Facial expressions of basic emotions in Japanese laypeople," *Frontiers in Psychology*, 2019, 10, 259.
Kubota, Y., Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., Yoshimura, S., Sawada, R., & Toichi, M., "Corticostriatal-limbic correlates of sub-clinical obsessive-compulsive traits," *Psychiatry Research: Neuroimaging*, 2019, 285, 40-46.

学会発表（講演・ワークショップ等含む)，主催等
Sato, W., "Spatiotemporal neural network dynamics for processing emotional expressions," Neurotalk-2018 (AVANI Riverside Bangkok Hotel, Bangkok), 2018.5.16.
Sato, W., "The psychological and neural mechanisms of atypical social functioning in autism spectrum disorder," São Paulo School of Advanced Science on Social and Affective Neuroscience (Mackenzie Presbyterian University, São Paulo), 2018.8.27.
Sato, W., "The psychological and neural mechanisms of rapid emotional responses," São Paulo School of Advanced Science on Social and Affective Neuroscience (Mackenzie Presbyterian University, São Paulo), 2018.8.29.
Sato, W., "Measuring emotional valence using facial EMG," São Paulo School of Advanced Science on Social and Affective Neuroscience (Mackenzie Presbyterian University, São Paulo), 2018.8.30.
佐藤弥「無意識の感情を脳科学で捉える――基礎から応用へ」けいはんな共創シンポジウム「超快適スマート社会」への挑戦（グランフロント大阪，大阪市)，2018.10.23.
佐藤弥「無意識の感情を脳科学で捉える――基礎から応用へ」けいはんな共創シンポジウム「超快適スマート社会」への挑戦（イイノカンファレンスセンター，東京都)，2018.10.30.
佐藤弥「表情認知の心理・神経メカニズム」第42回日本高次脳機能障害学会学術総会（神戸国際展示場，神戸市)，2018.12.7.

テレビ・ラジオ等への出演など
「認知症時代に希望　"科学的介護" 最前線」，NHK, クローズアップ現代，出演 2019.1.10.

上田祥行

論文
Fujino, M., Ueda, Y., Mizuhara, H., Saiki, J., & Nomura, M., "Open monitoring meditation reduces the involvement of brain regions related to memory function," *Scientific Reports*, 2018, 8, 9968.
Sukegawa, M., Ueda, Y., & Saito, S., "The effects of Hebb repetition learning and temporal grouping in immediate serial recall of spatial location," *Memory & Cognition*, 2019, 47 (4), 643-657.

著書
上田祥行「全体としてこちらのほうがよい――アンサンブル知覚」，三浦佳世，河原純一郎（編)『美しさと魅力の心理』，ミネルヴァ書房，印刷中.

学会発表（講演・ワークショップ等含む）
Sukegawa, M., Ueda, Y., & Saito, S., "Rhythm is irrelevant to the Hebb repetition effect in immediate serial recall of spatial locations," The 9th European Working Memory Symposium (Pavia, Italy), 2018.8.30.
Ueda, Y., Huang, T.-R., Yeh, S.-L., & Saito, S., "Sequential dependence of Hebb repetition learning in visual short-term memory," The 9th European Working Memory Symposium (Pavia, Italy), 2018.8.30.
上田祥行「注意の範囲が表情のアンサンブル知覚の精度に及ぼす影響」日本認知心理学会第16回大会（立命館大学，茨木市)，2018.9.1.
助川桃枝，上田祥行，齊藤智「視空間Hebb反復学習における時間的グルーピングの効果」日本認知心理学会第16回大会（立命館大学，茨木市)，2018.9.2.
上田祥行「Hebb反復による環境の学習を支えるメカニズム」日本心理学会第82回大会公募シンポジウム「環境，知識，そしてワーキングメモリ」（仙台国際センター，仙台市)，2018.9.25.
藤野正寛，上田祥行，井上ウィマラ，大石悠貴，北川智利，野村理朗「集中瞑想と洞察瞑想が妨害刺激の価値低減効果に与える影響」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市)，2018.9.26.
嶺本和沙，上田祥行，吉川左紀子「表情のアンサンブルが後続の表情認知に与える影響」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市)，2018.9.27.
坂田千文，上田祥行，野村理朗「固執する態度の緩和に与える対立場面状況の影響」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市)，2018.9.27.
Ueda, Y., "Distributed attention improves perception of facial expression ensembles," Psychonomic Society's 59th Annual Meeting (New Orleans, USA), 2018.11.17.
竹久志穂，石松一真，辰巳陽一，上田祥行「表情は看護師の協働のきっかけとなる判断に影響するのか？」第13回医療の質・安全学会学術集会（名古屋市)，2018.11.24.
嶺本和沙，上田祥行，吉川左紀子「表情のアンサンブル平均が後続の表情認知に与える影響――単独表情との比較」日本基礎心理学会第37回大会（専修大学，川崎市)，2018.12.1.
上田祥行，蔡佳君，簡頌恩，葉素玲，齋木潤「長短線分の探索非対称性の文化差――日米加台における比較」日本基礎心理学会第37回大会（専修大学，川崎市)，2018.12.2.
Saito, S., Ueda, Y., Huang, T.-R., & Yeh, S.-L., "Statistical Learning for Working Memory Functioning," The 4th NTU-Kyoto University International Symposium of Cognitive Neuroscience: Understanding Self and Its Interaction

with Social and Physical Environments (Kyoto, Japan), 2018.12.9.
Yeh, S.-L., Ueda, Y., Yamamoto, H., & Saiki, J., "Comparing Perceptual and Semantic Processing of Taiwanese and Japanese," The 4th NTU-Kyoto University International Symposium of Cognitive Neuroscience: Understanding Self and Its Interaction with Social and Physical Environments (Kyoto, Japan), 2018.12.9.
上田祥行「環境とつながるモノの見方・考え方――こころワールドマップ作成の試み」京都大学こころの未来研究センター研究報告会2018（京都大学，京都市），2019.1.13.
石松一真，竹久志穂，辰巳陽一，上田祥行「表情は看護師の協働のきっかけとなる判断に影響する」日本心理学会「注意と認知」研究会第17回合宿研究会（ホテルサンルートプラザ名古屋，名古屋市），2019.3.4.

清家　理

論文
清家理，竹内さやか，大久保直樹他「軽度認知障害および初期認知症をもつ人への心理的アプローチによる当事者・家族介護者相互効果検証研究」『長寿科学の最前線』2018.7, l5, 77-80.
清家理「超高齢社会における健康と幸福――猪突猛進の健康寿命の延伸政策に未来はあるか」『月刊ガバナンス』2018.12,（236），92-93.
著書
清家理（分担執筆）「家族介護者の心理教育」，鳥羽研二他（監修）『日本医師会雑誌：生涯教育シリーズ95 認知症トータルケア』2018.10, 147（2），272-274.
長田久雄，加藤伸司，阿部哲也，矢吹知之，清家理，他16名（早期支援検討委員会委員）「もしも――気になるようでしたらお読みください」（早期支援につながることの促進を目的にした市民向け冊子），平成30年度厚生労働省老人保健健康増進等事業 認知症の人の家族等介護者への効果的な支援のあり方に関する研究事業，2019.3.
京都府看取り対策プロジェクトACP推進ワーキング委員（監修）．「考えてみましょう『人生の終い仕度』と医療（解説編）」京都地域包括ケア推進機構，2019.3, 1-16.（委員として参画）
学会発表・ワークショップ
Takeuchi, S., Seike, A., Ohkubo, N., Mizuno, N., Saji, N., Toba, K., & Sakurai T., "Local Community Activities : Dementia Care Classes and Community Salon Prevent the Isolation of People with Dementia and Family Caregivers," AAIC 2018, (Chicago, USA), 2018.7.
清家理，Carl Becker，荒井秀典他「認知症予防のための自助・互助醸成プログラムの介入効果と持続検証――Dementia Friendly community リーダー育成プログラムの開発をめざして」第8回日本認知症予防学会学術集会（日本教育会館，東京都），2018.9.23.
清家理，竹内さやか，鳥羽研二他「認知症に係るボランティア育成に必要な教育的支援方法の探索――試行的ボランティア育成プログラムのトライアル結果より」第8回日本認知症予防学会学術集会（日本教育会館，東京都），2018.9.23.
清家理「錆びないココロづくり――健康長寿時代を上手に楽しく生きるコツ」第21回健康講座（KURUTOおおぶ，大府市），2018.12.17.
清家理，鈴木大河，京都市総合企画局総合政策室市民協働推進担当，向日市市民サービス部（高齢介護課）「孤立防止のための自助・互助強化プログラム：くらしの学び庵――フォローアップ講座」（京都市），2019.3.9.
講演
清家理「患者・家族を『みる』ために――必要な知識とワザを見つけてみよう」（信州大学医学部），2018.7.5
清家理「『つながり』をみなおす・みつける・つくる」認知症予防市民フォーラム――認知症予防の最前線（イイノホール＆カンファレンスセンター，東京），2018.9.17.
清家理「今日から使える知識とワザ――認知症の人と家族の『ココロとくらしのケア』」認知症をめぐる『転ばぬ先の杖』――認知症になる前のお話と認知症になった時のお話（市民向け公開シンポジウム），（尼崎市総合文化センター，尼崎市），2019.2.9.
新聞・一般雑誌（記事掲載）
「認知症予防　最新研究学ぶ」，京都新聞，2019.2.25
テレビ・ラジオ等への出演など
『みやけなおこの♡あいあいワールド』，エフエムあまがさき，尼崎市 2019.2.1.（内容）認知症の人や介護者に対する実践研究で分かってきたこと，2019年2月9日開催のシンポジウム告知．

中井隆介

論文
Seiyama, A., Yamada, K., Osaki, K., Nakai, R., Matsumoto, J., & Yoshimura, A., "Neural bases on cognitive aspect of landscape evaluation: A study using functional magnetic resonance imaging," *Journal of Neurology and Neuroscience*, 2018, 9 (4), 263.
Suzuki, M., Kawagoe, T., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Asano K., Yamada, M., Yoshikawa, S., & Sekiyama, K., "Neural correlates of working memory maintenance in advanced aging: evidence from fMRI," *Frontiers in Aging Neuroscience*, 2018, 10, 358.
学会発表・ワークショップ等
Nakai, R., Azuma, T., Toda, M., Kodama, T., & Iwata, H., "Development and evaluation of a single-phase alloy with magnetic susceptibility equivalent to that of mammalian tissue for coil embolization of a cerebral aneurysm," Joint Annual Meeting ISMRM & ESMRMB 2018 (Paris Expo Porte de Versailles, Paris), 2018.6.18.
Nakai, R., Azuma, T., Togaya, T., & Iwata, H., "Analysis of the relationship between mandibular joint motion trajectory and masticatory muscle properties (volume, shape, T1&T2 value) with MR dynamic imaging," Joint Annual Meeting ISMRM & ESMRMB 2018 (Paris Expo Porte de Versailles, Paris), 2018.6.18.
Okuhata, S., Nakai, R., & Kobayashi, T., "ODF-based automatic fiber clustering for anatomically constrained reconstructed whole-brain fibers," 第41回日本神経科学大会（神戸コンベンションセンター，神戸市），2018.7.27.
Matsumoto, N., Nakai, R., & Mitani, A., "Brain areas associated with the bodily self-attribution: The rubber hand illusion and rubber foot illusion," 第41回日本神経科学大会（神戸コンベンションセンター，神戸市）2018.7.27.
松本奈々恵，中井隆介，三谷章「身体イメージの形成に関わる脳領域――ラバーハンド・ラバーフットイリュージョンを用いて」コ・メディカル形態機能学会 第17回学術集会・総会（佐賀大学，佐賀市），2018.9.1.
松本奈々恵，中井隆介，三谷章「ラバーハンドイリュージョンとラバーフットイリュージョンによって生起する身体イメージの形成に関わる脳領域」第52回日本作業療法学会（名古屋国際会議場，名古屋市），2018.9.7.

中井隆介，山口誠二，戸田満秋，東高志，高玉博朗「物質の化学組成による磁化率アーチファクト変化の解析」第46回日本磁気共鳴医学会大会（ホテル日航金沢，金沢市），2018.9.7-9.9.
東高志，奥畑志帆，中井隆介，古橋直也，小林哲生「3T-MRIを用いた基底核組織の高分解3Dイメージング」第46回日本磁気共鳴医学会大会（ホテル日航金沢，金沢市），2018.9.7-9.9.
奥畑志帆，古橋直也，東高志，中井隆介，小林哲生「拡散MRIに基づく淡蒼球内節・外節の自動セグメンテーションに関する検討」第2回ヒト脳イメージング研究会（玉川大学，町田市），2018.9.7.
古橋直也，奥畑志帆，東高志，中井隆介，小林哲生「淡蒼球とその内部構造の明瞭な判別が可能なMRI撮像シーケンスの検討」第21回日本ヒト脳機能マッピング学会（東京大学，東京都文京区）2019.3.15.

特許

東高志，中井隆介，中村達雄「マウストレーナー」特許出願，特願2018-175347, 2018.9.19.

畑中千紘

論文

粉川尚枝，松岡利規，田中康裕，河合俊雄，畑中千紘，梅村高太郎「夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連」『箱庭療法学研究』2018, 31（2），3-17.

学会発表

畑中千紘「潜在する物語と夢――自分が登場しない夢をみていた女性との心理療法」日本ユング心理学会第7回大会（連合会館，東京都），2018.6.23-24.
Hatanaka, C., "The Empirical Research of the Paradoxical Transformation in Psychotherapy," The fifth IAAP-IAJS JOINT CONFERENCE（Frankfurt, Germany), 2018.8.2-5.
Hatanaka, C., "The dream with young woman in contemporary society," Dr. Giegerich Dream Seminar (Berlin, Germany), 2018.8.6-7.
畑中千紘，河合俊雄，田中康裕「心理療法におけるこころの変容とその波及――心理療法事例のメタ的分析から」日本箱庭療法学会第32回大会（新潟青陵大学，新潟市）2018.10.20-21.
粉川尚枝，畑中千紘，梅村高太郎，皆本麻実，田附紘平，鈴木優佳，西珠美，山﨑基嗣，大場有希子，松岡利規，豊原響子，文山知紗，長谷雄太，水野鮎子，河合俊雄，田中康裕「発達障害の子どものプレイセラピーと発達検査の比較検討」日本箱庭療法学会第32回大会（新潟青陵大学，新潟市）2018.10.20-21.

講演

畑中千紘「子どもの食とこころの発達――発達障害と現代のこころの課題」第24回日教組栄養教職員部近畿ブロック学習会（エルおおさか，大阪市），2018.9.1.
畑中千紘「子どもの心といやなもの（1）心理療法の視点から考える」大阪府学校給食会H30年度食育推進支援セミナー（大阪赤十字会館，大阪市），2018.9.28.
畑中千紘「子どもの心といやなもの（2）心理療法の視点から考える」大阪府学校給食会H30年度食育推進支援セミナー（大阪赤十字会館，大阪市），2018.10.26.

その他

畑中千紘「心理療法からみた幸福――幸せの逆説性」『月刊ガバナンス』2019年，1月号，92-93.

柳澤邦昭

講演・学会発表・ワークショップ等

柳澤邦昭，阿部修士「主観的幸福感の個人差を予測する神経回路」日本社会心理学会第58回大会（追手門学院大学，茨木市），2018.8.28.
柳澤邦昭，加藤樹里，阿部修士「時間の有限性と正直な行動の関連」日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会（神戸大学，神戸市），2018.9.8.
小林智之，柳澤邦昭，竹林由武，関谷直也，池上知子「社会問題に挑む心理学――東日本大震災を題材に」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市），2018.9.27.
柳澤邦昭「死関連思考の脳情報デコーディング」第184回社会行動研究会（東洋大学，東京都），2018.11.24.
柳澤邦昭「社会心理学領域における脳機能研究の変遷と新たな展開」第36回広島社会心理学研究会（広島大学，東広島市），2019.1.26.

中山真孝

学会発表（講演・ワークショップ等含む），主催等

中山真孝，内田由紀子，竹村幸祐，金子祥恵，伊藤篤希，新谷茉奈「企業風土と個人特性の相互作用――自己価値随伴性のマルチレベル分析による検討」日本社会心理学会第59回大会（追手門学院大学，茨木市），2018.8.29.
Taylor, P., 中山真孝，野崎優樹，内田由紀子「Awe（畏怖・畏敬）感情おける『運命性の認知』の役割――壮大さの知覚と認知的調節の間の媒介要因の検討」日本心理学会第82回大会（仙台国際センター，仙台市），2018.9.25.
Nakayama, M., & Plaut, D.C., "A hippocampal model of rapid statistical learning," The 28th Annual Conference of the Japanese Neural Network Society (Okinawa, Japan), 2018.10.25.
Nakayama, M., & Plaut, D.C., "A hippocampal model of rapid sequence learning applied to repetition effects in immediate serial recall," Meeting of the Experimental Psychology Society (University College London, U.K.), 2019.1.4.

センターの主な動向（2018年10月～2019年3月＊敬称略。肩書きは当時のもの）

●2018年10月3日・17日・31日、11月14日　こころの思想塾「日本の思想・文化、そして日本人を考える」（於：稲盛財団記念館小会議室1）。ゲストスピーカー：10／17先崎影容（日本大学危機管理学部教授）、10／31末木文美士（放送大学客員教授）、11／14藤本寵児（帝京大学文学部准教授）、講師・オーガナイザー：佐伯啓思（京都大学名誉教授／センター特任教授）。各回30名。

●10月6日・20日、11月10日　「支える人の学びの場　医療および教育専門職のためのこころ塾2018」（於：稲盛財団記念館大会議室）。〔第1回10／6〕講義：乾敏郎（追手門学院大学心理学部教授／センター特任教授）「コミュニケーションと身体性1：コミュニケーションを支える神経基盤」、岩宮恵子（島根大学人間科学部教授）「前思春期、思春期臨床にみる身体とコミュニケーション」、事例検討：加藤寿宏（京都大学大学院医学研究科准教授／作業療法士）。〔第2回10／20〕講義：乾敏郎「コミュニケーションと身体性2：非言語コミュニケーションの役割とその神経機構」、村井俊哉（京都大学大学院医学研究科教授）「社会性という観点から心の病気と健康を理解する」、事例検討：嶋谷和之（奈良県総合リハビリテーションセンター 作業療法士）。〔第3回11／10〕講義：乾敏郎「コミュニケーションと身体性3：言語コミュニケーションの基礎」、森口佑介（京都大学大学院教育学研究科准教授）「自己制御の初期発達とその支援」、事例検討：小松則登（愛知県心身障害者コロニー中央病院 作業療法士）。企画・進行：吉川左紀子。参加者数：各回約80名。

●10月20日　河合俊雄教授が日本箱庭療法学会第32回大会「学会賞」を受賞。

●10月20日　吉川左紀子教授が「あけぼの賞」（京都府）を受賞。

●10月24日　第6回京都こころ会議研究会「日本社会における生き方と自己：組織従事者の生理・心理調査からの考察」（於：稲盛財団記念館小会議室1）。講師：内田由紀子。

●11月8日　「フラメンコとアヴァンギャルド、過去と現在」（於：稲盛財団記念館大会議室）。講師：ミゲル・アルバレス・フェルナンデス（現代音楽作曲家、アーテイスト、ラジオ番組パーソナリティ）。企画・進行：吉岡洋。参加者数：30名。

11月8日　「フラメンコとアヴァンギャルド、過去と現在」

●11月10日－25日　展覧会＆公開制作「ファルマコンII――アート×毒×身体の不協的調和」（於：想念庵）。大久保美紀（パリ第8大学造形芸術学部講師）、フロリアン・ガデン（アーティスト）、ジェレミー・セガール（建築専門学校〔ENSA〕）、犬丸暁（アーティスト）、企画：吉岡洋。

●11月11日　オープニングシンポジウム「ファルマコンII――アート×毒×身体の不協的調和」（於：稲盛財団記念館大会議室）。大久保美紀、辻野将之（食事療法士）、フロリアン・ガデン、ジェレミー・セガール（スカイプ参加）、犬丸暁（スカイプ参加）。企画・進行：吉岡洋。

●11月18日　第3回京都こころ会議シンポジウム「こころと生き方――自己とは何か」The Third Kyoto Kokoro Initiative Symposium “Kokoro and Ways of Life: What is the Self?”（於：京都大学国際科学イノベーション棟西館）。開会の言葉：河合俊雄、講演1：村山美穂（京都大学野生動物研究センター センター長）「社会で生きる、こころの分子基盤」、講演2：内田由紀子「日本社会における生き方と自己：組織従業者の生理・心理調査からの考察」、講演3：出口康夫（京都大学大学院文学研究科教授）「『われわれ』としての自己、『われわれ』としての生き方」、閉会の言葉：湊長博（京都大学プロボスト）。参加者数：210名。

11月18日　第3回京都こころ会議シンポジウム「こころと生き方 ―― 自己とは何か」

●12月1日　「支える人の学びの場　医療および教育専門職のためのこころ塾2018特別編」（於：稲盛財団記念館大会議室）。開会挨拶：吉川左紀子、講演1：本田美和子（独立行政法人国立病院機構東京医療センター総合内科医長）「ユマニチュードの哲学と実践」、講演2：吉川友（株式会社スマイルリンク　デイサービス笑顔ぷらす長岡京店 作業療法士・事業所長）「認知症に対する作業療法からのアプローチとユマニチュードへの期待」。企画・進行：吉川左紀子。参加者数：80名。

12月1日　医療および教育専門職のためのこころ塾2018特別編

●12月5日　こころの思想塾講演会「アベノミクスのその先を考える：脱成長主義へ向けて」（於：稲盛財団記念館大会議室）。企画・講師・オーガナイザー：佐伯啓思。参加者数：60名。

12月5日　こころの思想塾講演会「アベノミクスのその先を考える;脱成長主義へ向けて」

●12月6日　認知科学セミナー「ロボットに“愛”を実装することは可能か？」（於：稲盛財団記念館中会議室）。講師：高橋英之（大阪大学大学院基礎工学研究科特任講師）。企画・進行：阿部修士。参加者数：20名。

●12月15日　エルキ・フータモ教授講演会「メディア、運動、交通――考古学的探究」（於：稲盛財団記念館大会議室）。講師：エルキ・フータモ（UCLAデザイン・メディアアート研究科教授）。企画・進行：吉岡洋。参加者数：30名。

●1月10日　学術広報誌『こころの未来』第20号（特集「コミュニティ」）刊行。

●1月10日・11日　認知行動・脳科学集中レクチャー2018「言語を含む社会能力とその発現の基盤」（於：稲盛財団記念館大会議室）。講師：定藤規弘（生理学研究所システム脳科学研究領域心理生理学研究部門教授）。企画・進行：阿部修士。参加者数：各日50名。

●1月13日　京都大学こころの未来研究センター研究報告会2018「つなげて見るこころの科学」（於：稲盛財団記念館中会議室／ポスター会場：大会議室）。開会の挨拶：河合俊雄、研究報告1：佐藤弥「社会的相互作用と扁桃体のつながり」、研究報告2：中山真孝「データで見る企業風土と幸福」、研究報告3：上田祥行「環境とつながるモノの見方・考え方――こころワールドマップ作成の試み」、ディスカッサント：湯本貴和（京都大学霊長類研究所長・教授）、橘木俊詔（京都大学名誉教授／京都女子大学客員教授）、閉会の挨拶：吉川左紀子。参加者数：50名。

●1月13日　京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門2018年度研究報告会「超高齢社会をよりよく生きる術」（於：稲盛財団記念館大会議室）。センター長挨拶：河合俊雄、来賓ご挨拶：丸山登（公益財団法人上廣倫理財団事務局長）、上廣倫理財団寄付研究部門の取組紹介：広井良典、リレー研究報告：広井良典、熊谷誠慈、畑中千紘、清家理、松葉ひろ美、パネルディスカッション：話題提供1：広井良典「超高齢社会への新たな展望」、話題提供2：清家理「学びあいから生まれる支えあいの可能性――認知症を例に」、話題提供3：高橋里美（豊田市社会福祉協議会旭支所係長）「高齢化率45％　豊田市旭地区での取り組み」、話題提供4：吉田万里子（京都府健康福祉部高齢者支援課地域包括ケア担当課長）「これからの医療・ケアに関する話し合い（アドバンス・ケア・プランニング）の普及啓発」、指定討論者：秋山弘子（東京大学高齢社会総合研究機構特任教授）。参加者数：120名。

●1月16日・23日、2月6日・13日　日本仏教セミナー「八宗綱要」（於：稲盛財団記念館京都賞ライブラリーセミナー室）。企画・進行：熊谷誠慈。参加者数：30名。

●2月22日　「見えない人の美術表現」研究セミナー（於：稲盛財団記念館小会議室1）。講師：光島貴之（アーティスト）、埜美智子（東山アーティスツ・プレイスメント・サービス〔HAPS〕）。企画・進行：吉岡洋。参加者数：10名。

●2月27日－3月1日　こころの科学集中レクチャー「こころの謎――心身の健康と社会・文化のダイナミックス」（於：稲盛財団記念館大会議室・中会議室）。講師：北山忍（ミシガン大学心理学部教授／センター特任教授）、中田光紀（国際医療福祉大学大学院医学研究科公衆衛生学専攻教授／国際医療福祉大学東京赤坂心理・医療福祉マネジメント学部心理学科教授）、大平英樹（名古屋大学大学院情報学研究科教授）。企画・進行：内田由紀子。参加者数：35名。

2月27日–3月1日　こころの科学集中レクチャー「こころの謎 ―― 心身の健康と社会・文化のダイナミックス」

●3月9日・16日　上廣倫理財団寄付研究部門2018年度市民講座「人口減少社会のデザイン」（於：京都大学東京オフィス大会議室）。講師・企画・進行：広井良典。参加者数：各日40名。

●3月18日・19日　fMRI解析セミナー「脳領域間結合解析2018」（於：稲盛財団記念館大会議室）。講師：河内山隆紀（株式会社ATR-Promotions, 脳活動イメージングセンタ）。企画・進行：阿部修士。参加者数：36名。

●3月23日　こころ塾2018公開講演会「多感覚コミュニケーションのケア技術『ユマニチュード』の人間観」（於：稲盛財団記念館大会議室）。講師：イヴ・ジネスト（ジネスト・マレスコッティ研究所所長／センター特任教授）。企画・進行：吉川左紀子。参加者数：157名。

こころ塾2018公開講演会「多感覚コミュニケーションのケア技術『ユマニチュード』の人間観」

●3月26日　認知科学セミナー「What can brain stimulation do for visual short-term memory?」（於：稲盛財団記念館大会議室）。講師：Philip Tseng（Graduate Institute of Mind, Brain, and Consciousness, Taipei Medical University）。企画・進行：阿部修士。参加者数：10名。